沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 36 集

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅱ）

－埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告－

2006（平成 18）年 3 月

沖 縄 県 立 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序　文

本報告書は、沖縄県恩納村の沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設計画に伴い、平成 17 年度に文部科学省より委託を受けて実施した埋蔵文化財予備調査の試掘・確認調査における成果をまとめたものです。

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地は恩納村字谷茶と南恩納にまたがり、旧白雲荘が所在した美しい海岸をもつ海側と、多くの尾根が延び清らかな沢が続く自然豊かな丘陵側に分かれています。

試掘・確認調査に先立ち、平成 16 年度には約 124.4ha の表面調査を実施し生産遺跡を中心とする多数の遺構を確認しました。その成果については平成 17 年 5 月にすでに報告書を刊行しています。

今回の調査では表面踏査の成果を基に合計 73 箇所の試掘調査と補足的な表面踏査を実施し、多くの成果を得ることができました。主なものとして、海側では「歴史の道」と考えられる古道や先史時代～グスク時代の遺物散布地、猪垣、落とし穴、古墓、石積遺構等が確認され、丘陵側では近世・近代と考えられる畑跡や古墓が確認されました。

特に恩納村の「歴史の道」は国頭方西海道と呼ばれ、その一部が平成 16 年 9 月 30 日に国の史跡に指定されています。今回確認された「歴史の道」は石敷が残っている場所や岩盤を削平している場所、盛土によって平坦面を作っている場所等があり、この海道が実際に使用されていたころの面影を良く残しています。遺物散布地は海岸砂丘上で広域に確認され、先史時代の土器や石器、グスク時代の中国産陶磁器の散布が認められました。このことから、今回は確認できませんでしたが、周辺に当該時期の遺跡が存在する可能性があります。猪垣や落とし穴等の生産遺跡は前回の表面踏査によって丘陵側では確認できていましたが、今回海側でも確認されたことによって、当該時期はこの地域一帯に広く作られていたものであることがわかりました。

今年度の調査をもって、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設に伴う埋蔵文化財予備調査は一端終了となります。本報告書が多くの方々に活用されますとともに、埋蔵文化財の保護と活用について関心を持っていただければ幸いに存じます。

末尾ながら、現地調査及び資料整理にあたり、御指導･御助言を賜りました諸先生、地元住民の方々、並びに事業の実施にあたり御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 18（2006）年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　田　場　　清　志

巻頭図版１　沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地全景（航空写真）

歴史の道（71 地点）の景観

歴史の道（71 地点） 石敷遺構（T.P60）

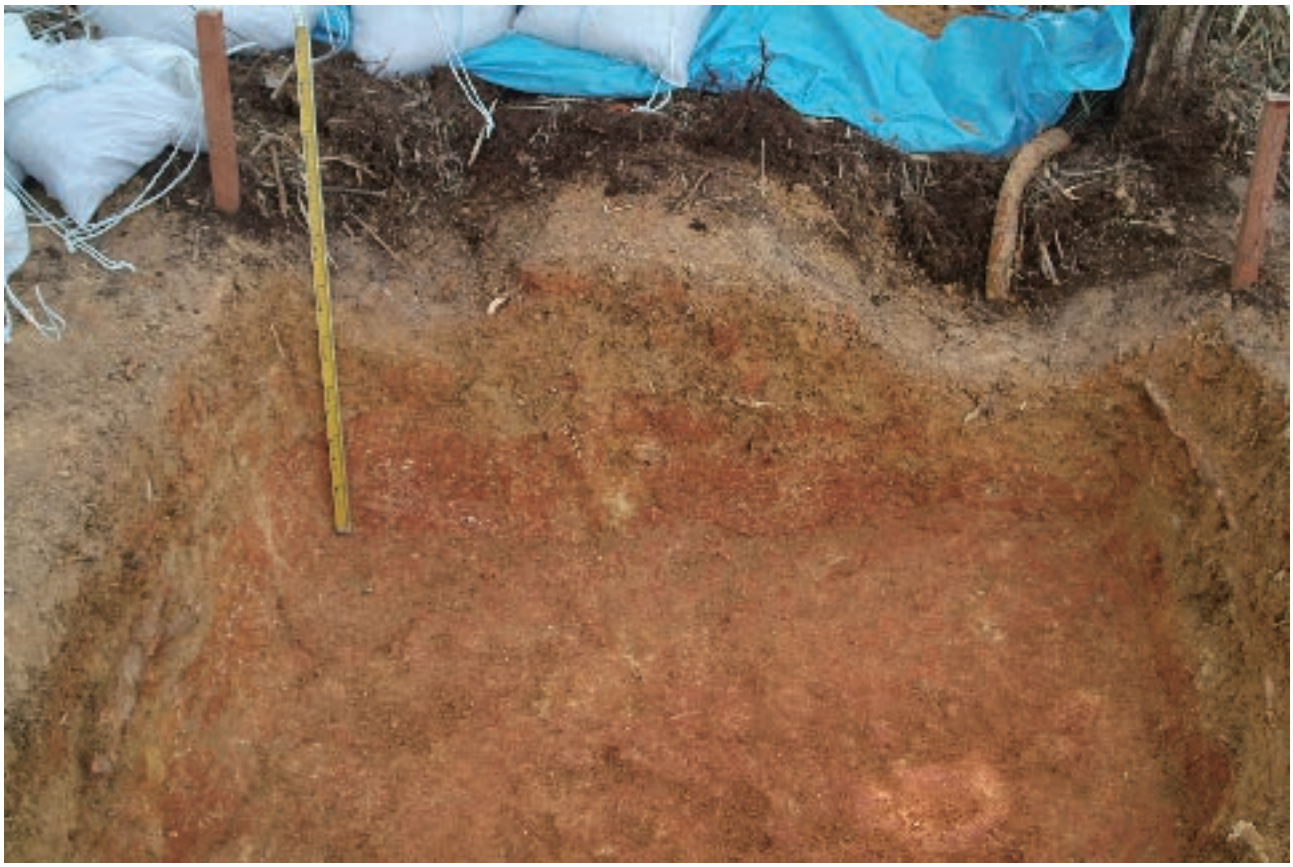
巻頭図版 2

猪垣（66 地点）

落とし穴（68 地点）

巻頭図版 3

畑跡（65 地点）



畑跡（63 地点）畝断面（T.P 6 ）

巻頭図版４

古墓（42 地点）正面（T.P43・44）

古墓（73 地点）

例　言

1．　本報告書は平成 17 年度に文部科学省からの受託事業として、沖縄県教育委員会が調査主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内における埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）の成果をまとめたものである。

2．　調査対象地は沖縄県恩納村字南恩納及び谷茶にまたがる。

3．　現地調査は平成 17 年 11 月 29 日～平成 18 年 2 月 17 日まで、資料整理作業は平成 17 年 12 月 1 日～3 月 31 日まで実施した。

4．　事業の実施にあたっては恩納村役場沖縄科学技術大学院大学推進班・恩納村教育委員会・沖縄県文化環境部自然保護課・航空自衛隊恩納分屯基地の協力を得た。また、試掘坑の設定において注意すべき貴重種の存在やその分布域に関しては、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の環境調査を実施した日本工営株式会社・株式会社イーエーシー共同体に現地にて確認をしていただいた。

5．　現地調査の実施にあたっては次の方々から貴重な助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

遺構・・・・・・・知念　　勇（恩納村博物館　館長）

地質・・・・・・・神谷　厚昭（元県立真和志高校教諭）

6．　本報告書で使用した航空写真及び地形測量図は、平成 15 年度に実施された沖縄科学技術大学院大学（仮称）用地測量調査で作成されたものである。

7．　本報告書で使用した表紙及び巻頭図版 1 、図版 1 の航空写真は航空自衛隊恩納分屯基地が所在するため、一部加筆している。

8．　本報告書は片桐千亜紀が編集し、崎原恒寿、比嘉尚輝、宮平真由美の協力を得た。執筆分担は目次に記載する。

9．　現地調査で得られた遺物及び実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

10.　本報告書の刊行に先立ち、平成 17 年 5 月に表面踏査の成果をまとめた『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅰ）』を刊行している。

目　次

序文
巻頭図版
例言

第１章　調査に至る経緯 ・・（片桐）1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

図　目　次

第１図・　沖縄本島の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第２図・　恩納村の位置及び
　　大学院大学建設予定地の位置 ・・・・・・・・ 7
第３図・　恩納村の文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
第４図・　予備調査における
　　全体計画のフローチャート・・・・・・・・・ 12
第５図・　調査対象地区におけるグリッド設定図・・・ 14
第６図・　C 地区　試掘坑の位置と成果概略 ・・・・・・ 17
第７図・　エリア①土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第８図・　エリア②土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第９図・　エリア③土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第 10 図　エリア④土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 11 図　エリア⑤土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第 12 図　T.P6 平面及び東壁・南壁 ・・・・・・・・・・・ 28
第 13 図　T.P7 平面及び東壁・南壁 ・・・・・・・・・・・ 29
第 14 図　T.P8 平面及び北壁・西壁 ・・・・・・・・・・・ 29
第 15 図　T.P27 平面及び南壁・北壁・・・・・・・・・・・ 33
第 16 図　T.P25 平面及び南壁・西壁・・・・・・・・・・・ 35
第 17 図　古墓付近の地形（42 地点－ T.P43・44）・・ 37
第 18 図　墓室・墓庭縦断面及び東壁・南壁
　　（42 地点－ T.P43・44）・・・・・・・・・・・・ 38
第 19 図　染付小杯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第 20 図　墓室平面及び pit 断面・・・・・・・・・・・・・・ 40
第 21 図　延べ煙管 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 22 図　A 地区　試掘坑の位置と成果概略 ・・・・・・ 48
第 23 図　エリア⑥・⑦土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 24 図　T.P60 平面及び南壁（石敷遺構）・・・・・・・ 56
第 25 図　T.P48 平面及び北壁・西壁・南壁 ・・・・・・ 58
第 26 図　T.P59 平面及び西壁・南壁・・・・・・・・・・・ 61
第 27 図　T.P54 東壁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 28 図　T.P54 北壁・西壁・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 29 図　T.P53 南壁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第 30 図　夜光貝蓋 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第 31 図　T.P50 南壁・東壁・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 32 図　T.P49 東壁 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 33 図　T.P49 北壁・南壁・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 34 図　遺物散布地（72 地点）　表採遺物 ・・・・・・ 76

図　版　目　次

巻頭図版１　沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地全景（航空写真）
巻頭図版２　上段 : 歴史の道（71 地点）の景観　　下段 : 歴史の道（71 地点）石敷遺構（T.P60）
巻頭図版３　上段 : 猪垣 (66 地点)　　下段 : 落とし穴（68 地点）
巻頭図版４　上段 : 畑跡 (65 地点)　　下段 : 畑跡（63 地点）畝断面（T.P ６）
巻頭図版５　上段 : 古墓（42 地点）正面（T.P43・44）　下段 : 古墓 (73 地点)

図版１・ 大学院大学建設予定地と調査範囲 ・・・・・・ 8
図版２・ C 地区へのアクセス道路・・・・・・・・・・・・・ 16
図版３・ C 地区　試掘坑の位置と成果概略・・・・・・・ 18
図版４・ エリア①入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
図版５・ エリア②入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
図版６・ エリア② ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
図版７・ エリア③入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図版８・ エリア③ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
図版９・ エリア④入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図版 10　エリア④ T.P26 作業風景 ・・・・・・・・・・・・ 25
図版 11　エリア④ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図版 12　エリア⑤入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
図版 13　エリア⑤ T.P34 作業風景 ・・・・・・・・・・・・ 27
図版 14　エリア⑤ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
図版 15　畑跡（63 地点－ T.P ６）・・・・・・・・・・・・ 30
図版 16　畑跡（63 地点－ T.P ７）・・・・・・・・・・・・ 31
図版 17　畑跡（63 地点－ T.P ８）・・・・・・・・・・・・ 32
図版 18　畑跡（64 地点－ T.P27）・・・・・・・・・・・・・ 34
図版 19　畑跡（65 地点－ T.P25）・・・・・・・・・・・・・ 36
図版 20　古墓付近の地形（42 地点－ T.P43・44）・・ 37
図版 21　墓室内の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
図版 22　染付小杯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図版 23　調査前と調査後 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
図版 24　墓室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
図版 25　延べ煙管・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
図版 26　A 地区　試掘坑の位置と成果概略 ・・・・・・ 49
図版 27　A 地区入口 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
図版 28　猪垣（66 地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
図版 29　猪垣（66 地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
図版 30　猪垣（67 地点）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

図版 31　落とし穴（68 ～ 70 地点）・・・・・・・・・・・・ 54
図版 32　T.P60・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
図版 33　T.P48・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
図版 34　T.P59・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
図版 35　T.P59　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
図版 36　試掘坑（歴史の道）周辺の景観・・・・・・・・ 62
図版 37　T.P54　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
図版 38　T.P53　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
図版 39　夜光貝蓋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
図版 40　T.P50・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
図版 41　T.P49・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
図版 42　72 ～ 74 地点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
図版 43　遺物散布地（72 地点）　表採遺物　・・・・・・ 77

表　目　次

第 1 表　全体工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第 2 表　C 地区表面踏査成果一覧・・・・・・・・・・・・・ 43
第 3 表　C 地区試掘調査成果一覧・・・・・・・・・・・・・ 44
第 4 表　A 地区表面踏査成果一覧・・・・・・・・・・・・・ 78
第 5 表　A 地区試掘調査成果一覧・・・・・・・・・・・・・ 79

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

本事業は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内における埋蔵文化財の分布状況を把握するための予備調査である。表面踏査・試掘調査によって遺跡の詳細な分布状況と性格を明らかにし、予定されている沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設計画を円滑に進めようとするものである。

2001 年６月、内閣府沖縄担当相によって世界最高水準の自然科学系の大学院大学設置構想が公表された。2002 年、沖縄県知事によって設置された候補地推薦検討会は 12 市町村 13 ヵ所の候補地から、糸満市、北中城村、恩納村の３候補地を選定した。2003 年１月・２月、細田沖縄相と構想検討会委員が３候補地を視察、その後、専門家チームによる現地詳細調査が行われ、検討が続けられた。同年４月、大学院大学設置促進県民会議が県民フォーラムを開催。これらを受け、同年４月、内閣府は沖縄新大学院大学の建設予定地を恩納村谷茶・南恩納地区に決定した。建設予定地は総面積が 222.1ha、琉球松などの森林に囲まれた谷茶・南恩納にまたがる丘陵部の地区と、南恩納の美しいビーチに面した海岸沿いの地区に分かれている。それぞれ213.4haと8.7haの面積があり、その大部分が村有地と公有地である。地元では沖縄科学技術大学院大学（仮称）を核とした地域振興とともに、次代を担う子供達に夢を与え、人材育成につながることを大きく期待している。

2003 年９月、沖縄県立埋蔵文化財センター・沖縄県教育庁文化課・沖縄県企画開発部科学学術振興室大学院大学設置推進班の３者で今後のスケジュールと調査範囲について調整を行った。大きな問題となったのは調査範囲であった。建設予定地総面積が約 221.3ha と広大なため、予定地すべてについて予備調査を実施すると長期的な年月と費用を必要とし、今後の大学院大学建設計画に大きな障害をもたらすからである。これについて検討した結果、予定地の中でもさらに造成工事や建設に係る地域を重点的に絞り込んで予備調査を実施することとした。また、調査日程についても問題があった。平成 16 年度中に予備調査を完了してほしいとのことであったが、この時期はすでに沖縄県立埋蔵文化財センターにおいては平成 16 年度の全体的な計画が確定しており、１年間で予備調査を完了させる人材を確保させることが困難であったからである。これについては年度を分けることで実施するよう要請し、今後の検討課題とした。

2004 年２月、さらに詳細な調査範囲や業務実施期間等について幾度かの調整を経て、平成 16（2004）年度に表面踏査、平成 17（2005）年度に試掘・確認調査、計２ヶ年間にわたり予備調査を実施し、報告書に関してはそれぞれの年度毎に刊行することとした。

2005 年１月５日、「沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地における埋蔵文化財予備調査（表面踏査）業務」委託契約を文部科学省と締結し、事業を開始した。表面踏査の範囲は、平成 15 年度に実施された沖縄科学技術大学院大学（仮称）の基本計画策定に資する資料作成業務の検討結果として、開発しうる範囲約 80ha が文部科学省より示されたため、その周辺約 20ha を合わせた約 100ha とした（実際の調査では、結果として 124.4ha 実施した）。調査範囲を３地区に分割し、海側を A 地区（旧白雲荘周辺、約 4.2ha）、山側を B 地区（北尾根開発検討ゾーン内、約 65.7ha）と C 地区（南尾根開発検討ゾーン内、約 54.5ha）に分割した。表面踏査の結果、猪垣３箇所、落とし穴９基、炭焼窯 34 基、階段状平坦面４箇所、平坦面７箇所、石列遺構２基、マウンド状遺構２基、畝状遺構（畑跡）２箇所、グスク１箇所、石積遺構１箇所、テーブル珊瑚集積遺構１箇所、掘り切り状遺構１箇所、溝状遺構１箇所、古墓１基の合計 62 地点が確認され、その成果報告書を 2005 年５月 31 に刊行した（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005）。

2005 年６月、文部科学省・沖縄県教育庁文化課・沖縄県立埋蔵文化財センターの３者で、試掘・確認調査における今後のスケジュールと調査範囲について調整を行った。その結果、調査はその後決定される予定のさらに詳細な開発検討ゾーンを重点的に実施することとなり、その決定を待ってから試掘・確認調査を開始することとした。ただし、契約前に試掘坑設定予定の場所を検討し文部科学省にその位置と範囲を提出することとした。

同年 10 月 14 日「沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地における埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）業務」委託契約を文部科学省と締結し、事業を開始した。

第２節　調査体制

試掘・範囲確認調査及び資料整理に係る業務は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	仲宗根用英
	教育庁	文化課 課長	千木良良範
	〃	〃 課長補佐	島袋　洋
	〃	〃 主幹	盛本　勲
	〃	記念物係 係長	盛本　勲
	〃	専門員	中山　晋
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	田場　清志
事業事務	〃	副所長	赤嶺　正幸
	〃	庶務課 課長	赤嶺　正幸
	〃	〃 主査	城間奈津子
調査統括	〃	調査課 課長	岸本　義彦
調査担当	〃	〃 専門員	片桐千亜紀
	〃	文化財調査嘱託員	比嘉　尚輝
	〃	〃	崎原　恒寿

資料整理作業員

赤嶺雅子、石嶺敏子、玉城恵美利

報告書作成協力者

池原直美、伊集ゆきの、瑞慶覧尚美、高良三千代、玉寄智恵子、宮平真由美、吉村綾子

業務委託「新大学院大学建設予定地内埋蔵文化財予備調査に伴う支援業務委託（Ⅱ）」

株式会社　中部日本鉱業研究所	調査員	井伊浩一郎
〃	調査補助員	細川　俊之

発掘調査作業員

A 班　島袋秀基、玉元靖彦、中村孝文、原田亘、宮下真太郎

B 班　上間直、佐渡山進、當山勝彦、山城幸成

C 班　平良博信、内間譲、仲西祥太、長嶺操

第３節　調査経過

当該事業は平成 17 年 10 月 14 日に開始し、平成 18 年３月 31 日に終了した。現地業務である試掘・確認調査は平成 17 年 11 月 29 日～平成 18 年２月 17 日まで実施した。

平成 17 年 10 月 14 日「沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地における埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）業務」委託契約を文部科学省と締結し、現地業務を実施するための準備を始めた。

10 月 24 日株式会社中部日本鉱業研究所と「新大学院大学建設予定地内埋蔵文化財予備調査に伴う支援業務委託（Ⅱ）」を締結した。

11 月、事業範囲は海側（以下 A 地区）及び南尾根（以下 C 地区）を中心とすることを前提に、マスタープランの最終案が作成されることとなった。これを受け、表面踏査の成果を基に、さらに具体的な試掘坑の設定位置について検討し、11 月 29 日より２ヶ月間の予定で現地業務を実施することとして準備を進めた。試掘坑は２m × ２m を基準として、手堀りによって実施する計画を立てた。表面踏査は伐採を行わずに調査を進めたが、試掘坑の掘削では必ず伐採が必要となる。その為、C 地区 45 箇所（T.P 1 ～ 45）、A 地区 15 箇所（T.P46 ～ 60）の試掘坑設定予定地を地形図上で決めた後、文部科学省に当該設定地域に伐採を行ってはならない貴重種が存在するか否かについて問い合わせをした。その結果、２地域６箇所（T.P40 ～ 42、T.P43 ～ 45）において植生に詳しい専門家の立会いが必要な場所が含まれることがわかった。その為、11 月 25 日に日本工営株式会社・株式会社イーエーシー共同体に現地確認をしていただき、貴重種を避けるよ

うに現地に杭を打ち試掘坑を設定した。また、残りの試掘坑についても、現地に杭を打って設定した。杭打ちは 11 月 24 日より開始し、12 月２日に終了した。

その他の準備として、C 地区の試掘調査の実施においては航空自衛隊恩納分屯基地の専用道路を使用する必要があり（使用できない場合、試掘坑に移動する為には尾根や沢をいくつも越さなければならなくなり、作業効率がかなり落ち、安全管理も困難となる。)、許可申請を行った。また、A 地区は沖縄海岸国定公園に含まれていることから、伐採や土地の形状変更を行うさいは許可を受ける必要があった。これは、沖縄県文化環境部自然保護課が管理しているもので、沖縄県知事あて資料を作成し、恩納村企画課に進達依頼をするものである。自然公園法第 13 条第３項の規定に基づいて「特別地域内土地の形状変更の許可申請書」を作成し、申請を行った。資料は沖縄海岸国定公園（A 地区）における調査の必要性や方法、試掘坑の規模、正確な場所等を詳細に記すものであった。

試掘調査は 11 月 29 日に開始した。調査は C 地区→ A 地区の順で実施することとした。A 班～ C 班の３班体制をつくり、それぞれの班の試掘坑は埋蔵文化財センター調査員が１名ずつ管理し、T.P １から順番に同時並行で試掘調査を行った。３班がそれぞれの進捗に合わせて別行動をするため、朝・昼・夕には必ず進捗を確認しあうこととした。日中それぞれの班が今どのような状況なのかについては、中部日本鋼業研究所の職員が常に現状を把握し、作業員の移動等作業の安全を確保した。

12 月上旬、C 地区の試掘調査を開始してまもなく畑跡(T.P ６～８、63 地点)が確認された。掘削を行うため、試掘坑及び周辺の伐採・清掃作業をしているときに、数本の畝が確認されたことから畑跡と判断できた。周辺は雑木に覆われていたことから、伐採を実施しない表面踏査では確認できなかった。掘削前の伐採と清掃によってこのような畑跡がさらに２箇所（T.P27、64 地点・T.P25、65 地点）確認された。いずれも新しい時代のもので、実測と写真記録を取った後掘削を行って耕作土の厚さ等を確認した。この遺構については表面踏査の成果に追加する形で、それぞれ 63 地点～ 65 地点とした。

試掘の当初予定は C 地区 45 箇所であったが、調査を進める内に試掘調査が必要と判断される場所が見つかり、追加で試掘坑を設定することとした（T.P61 ～ 73)。追加試掘坑の場所について、あらためて文部科学省に貴重種についての問い合わせを行った。この内、T.P71 ～ 73 については貴重種が存在する可能性があり、専門家の立会いが必要と判断された。このため、平成 18 年２月１日、日本工営株式会社・株式会社イーエーシー共同体に現地確認をしていただき、試掘坑の設定をあらためて行い、２月 13 日に試掘調査を実施した。

C 地区には表面踏査によって確認された古墓（42 地点）と考えられる遺構が存在するため、２m × 4 m の試掘坑（T.P43・44）と少し離れた場所に２m × ２m の試掘坑（T.P45）を設定した。この調査によって古墓である可能性が高いことがわかり、発掘調査を実施した。終了したのは平成 18 年１月 27 日である。

12 月 22 日、T.P １～ 42、T.P61 ～ 70 までの試掘調査を終えた。12 月下旬に沖縄海岸国定公園内における試掘調査の許可が下りた。このため、翌年１月からは、C 地区の古墓の調査と同時並行で A 地区の調査を開始することとした。

平成 18 年１月 10 日、A 地区の試掘調査を開始した。T.P45 から順番に A・C の２班同時進行で掘削を開始した（B 班は C 地区の古墓調査の継続)。A 地区の調査を開始してまもなく、海岸において石器や土器が少量表面採集された。これによって、遺跡の存在が想定されその発見に期待感が高まった。さらに、海岸付近の T.P50 において砂層と礫層が確認されたが、掘削深度が深すぎてそれ以上の掘削が危険となった。また、試掘調査の進行に伴い、当該地域は既存施設の建設等によって造成土が厚く堆積しており地形が大幅に改変されていることがわかった。従来の２m × ２m の試掘坑では充分な調査ができないことが判明し、試掘坑の拡張は必要不可欠となった。そのため、T.P48 ～ 51・53・54・56 の拡張を目的にあらためて「特別地域内土地の形状変更の許可申請書」を作成し、申請を行った。

１月中旬、T.P48・59・60 において歴史の道と考えられる遺構が確認された。

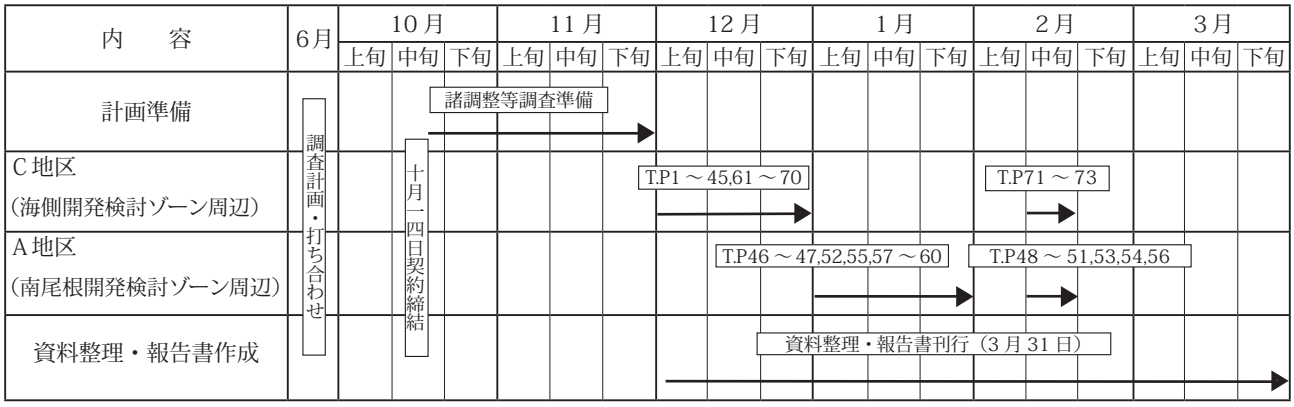
１月下旬、補足的な表面踏査を実施した結果、あらたに１本の猪垣（66 地点）が確認された。また、平成 18 年１月 10 日に承認されたマスタープランが公表されたことにより、A 地区範囲外の表面踏査を実施した。その結果、１本の猪垣（67 地点)、３基の落とし穴（67 ～ 69 地点)、２基の古墓（73 地点)、１基の石積遺構（74 地点）が新しく確認された。

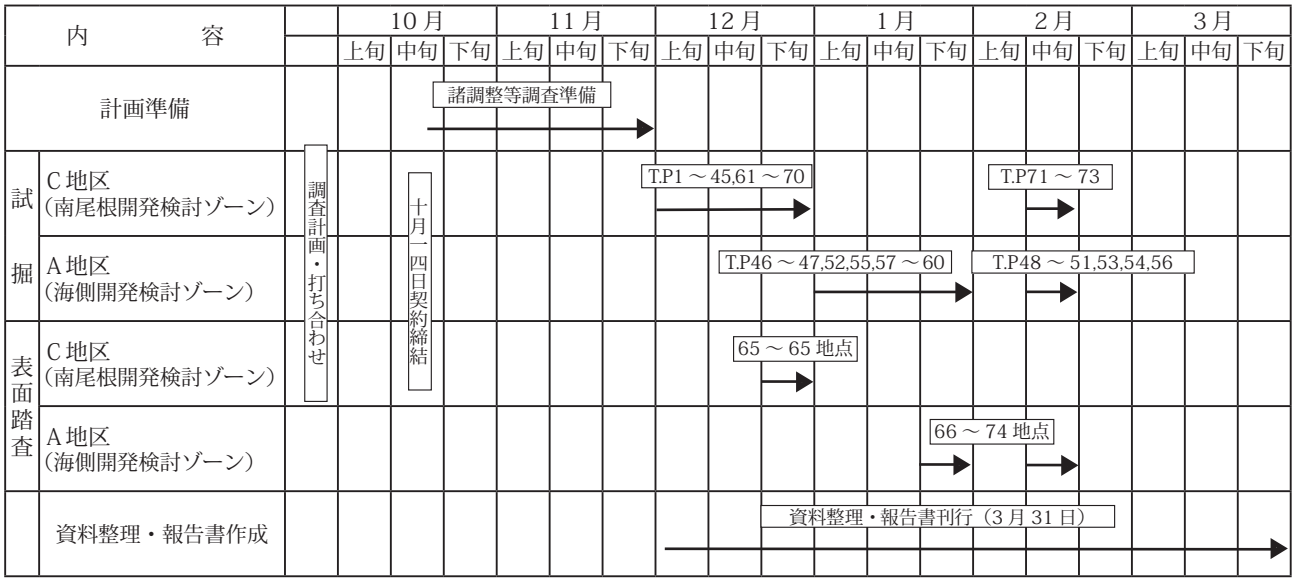
２月上旬、A 地区の試掘拡張部分に係る追加申請の許可が下りたため、2 月 13 日より試掘調査を再開した。２月 13 日は C 地区 T.P71 ～ 73 の調査を実施し、14 日より T.P48 ～ 51・53・54・56 の試掘調査を実施した。

追加で実施した試掘坑周辺は護岸工事によって土地が改変されており、明確に歴史の道と考えられる遺構は確認できなかったが、それに関係すると思われる旧表土や堆積層等が確認された。２月 17 日、本業務で予定していたすべての現地調査を終えた。

資料整理は、現地調査と同時に開始し、毎日蓄積される各試掘坑の実測図等をスキャンして埋蔵文化財センターにてトレースを適宜進めた。座標データや写真は調査終了後から管理台帳を作成し始めた。原稿執筆は調査終了間際から開始し、３月上旬に終了した。その後、構成を行い３月 31 日に報告書を刊行した。各試掘坑の座標データは GIS を利用して地形図上にプロットし、オルソ補正した航空写真とも重ねて場所の確認ができるようにした。報告書で使用した試掘坑や遺構の分布状況等の図版はこのデータを基に作成した。報告書には遺構等が確認された試掘坑を中心に掲載し、補足的に追加した表面踏査の結果も合わせて掲載した。新しく確認された遺構や遺物散布地については、前回の続きとして「～地点」で表現している。したがって、３箇所の試掘坑で遺構が確認されていても、同一の性格を持つものは同じ地点として報告している。

第１表　全体工程表





第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地が所在する恩納村は沖縄本島のほぼ中央部西海岸に位置し、海岸部と河川や湧水が豊かな丘陵部によって成り立っている。西側は東シナ海に面し、東側は恩納岳を中心に北から漢那岳・熱田岳・ブート岳・屋嘉岳・石川岳等の山々が広がり、さらにこれらの山々を源流とする川や沢が谷間を流れ出ている。特に、白い砂浜と澄んだ海水、美しい珊瑚礁によって形成された長大な恩納村の海岸線はすべて沖縄海洋国定公園に指定されており、スキューバダイビング等マリンスポーツのメッカとして有名である。珊瑚礁の広がる美しい海岸線が観光資源となっており、高級なリゾートホテルが競って並び立ち、毎年何万人もの観光客が沖縄のイメージともなっている南国の雰囲気と美しい海を求めてやってくる。このように、恩納村は山や川、海などの変化に富んだ自然豊かな村であり、また、観光立県沖縄の姿を象徴する代表的な村ともいえる。

村の総面積は 50.79 平方キロメートルで、本部町に次いで県下 10 番目の大きさとなっており、南北に 27.4km、東西に 4.2km と細長い形をしている。北に名護市、東に宜野座村・金武町・うるま市（旧石川市）、南に沖縄市・読谷村と多くの市町村と隣接しており、うるま市と隣接する部分は東西で沖縄本島のもっとも狭い地域となっている。県庁所在地である那覇市までは約 50km、北部の中心地名護市までは約 25km で、本島北部と中南部の結節地点となっている。村の人口は約 1 万人、山間地に喜瀬武原区がある他は、国道 58 号線及び県道 6 号線沿いの沿岸部に 14 の集落が点在する。

地形や地質は中南部地域とは大きく異なる。中南部は平坦な台地や緩やかな丘陵が広がり、地質は島尻マージと呼ばれる泥岩や琉球石灰岩がその基盤となっているが、恩納村に入るとほとんどが山岳と樹林によって占められ、地質も中生代の粘板岩や砂岩などの名護層や嘉陽層といわれる地層によって占められる。このような地層の上には国頭礫層が海岸近い山地に分布している。これら、中生層と国頭礫層から風化してできた土壌は、赤土の強酸性土をなしている。中南部のいたるところに見られる琉球石灰岩は、多幸山からは急に少なくなり、真栄田岬・前兼久・野原・万座毛・瀬良垣ビーチ周辺等の海岸付近にほぼ限られるようになる。内陸には安富祖の坊主ガマにわずかに見られるのみである（仲松 1980）。

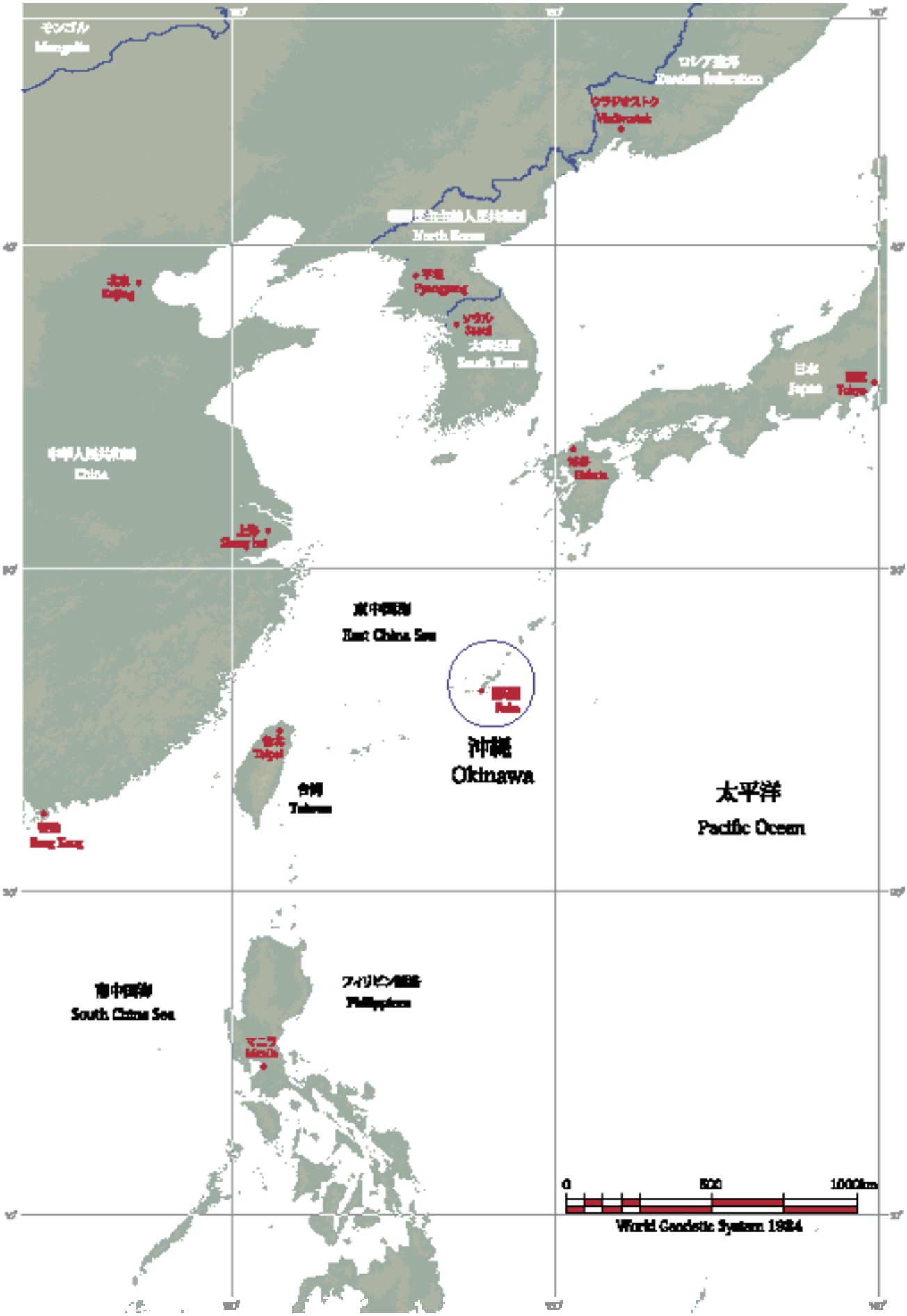
沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地は恩納村の字南恩納・谷茶にまたがって所在する。事業範囲は、海側開発検討ゾーンと南尾根開発検討ゾーンを中心とすることを前提に、マスタープランの最終案が作成されることとなった。

南尾根は琉球松などの森林に囲まれており、平坦部がほとんどなく、すべて尾根と谷で構成される。多くの小川が流れており、それらが収束し何本かの支流となって海岸に流れ出し、いくつかの沖積地をつくりだしている。また、予定地の眼前に広がる海とその砂丘はかの有名な「谷茶前の浜」である。

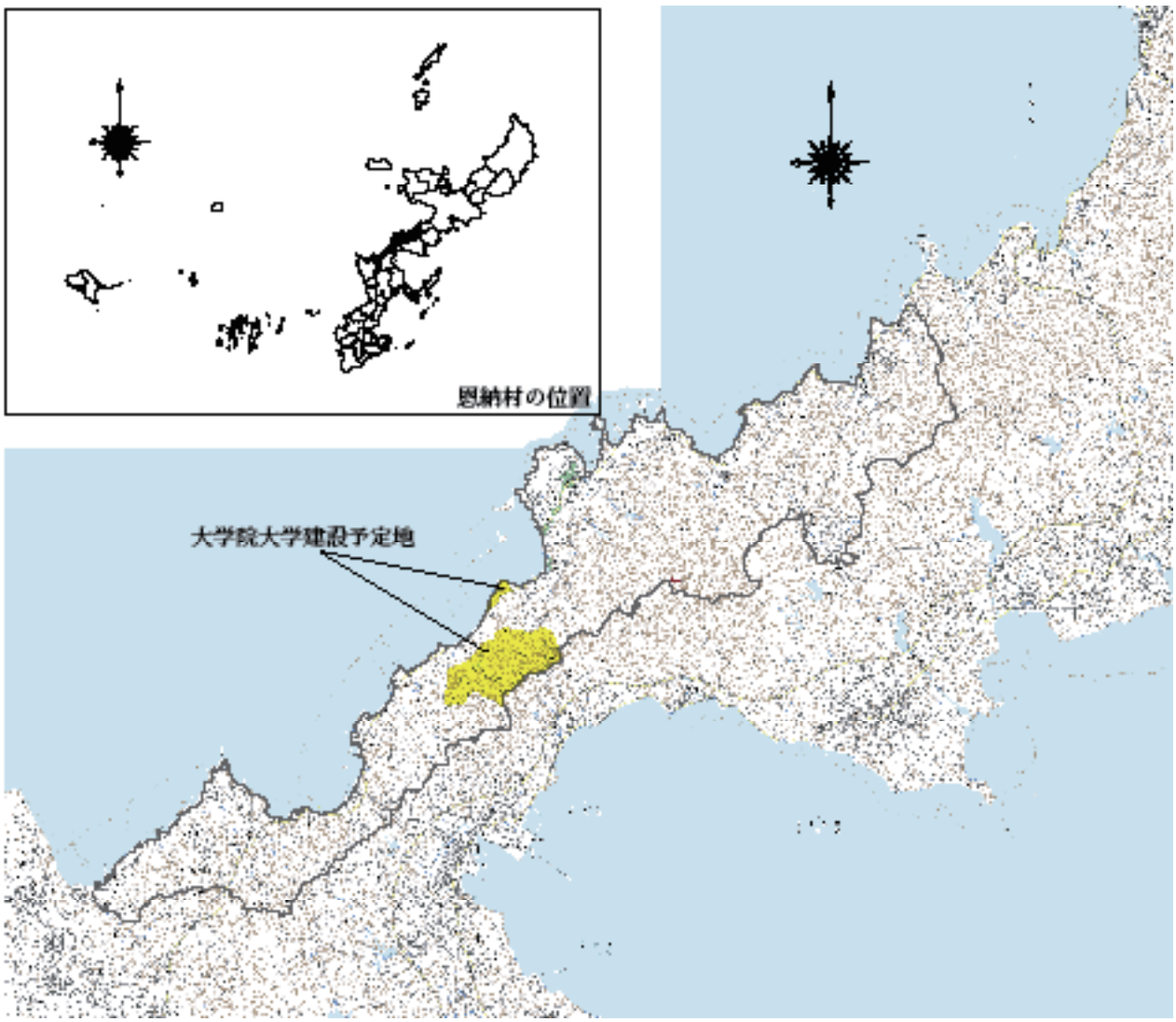
海側は美しいビーチに面しており、台地には旧白雲荘が所在した場所がある。周辺の海岸は砂丘が薄く、千枚岩が至るところに露胎している。ビーチロックは部分的に千枚岩の上に僅かに形成されている。海岸部と岩盤が露胎する急な斜面を持つ台地部によって構成されている。

このように、沖縄科学技術大学院大学（仮称）はすばらしい景観と自然を持つ絶好の場所に建設されると言える。仲松弥秀氏は言う「海は現在でも目の前にある。しかし、この海は以前の海とは違った海となっている。山林が荒れるにつれ、戦後の山地開墾方法のまずさによって、赤土泥水が川や溝はもちろんのこと、それが海へと流れ込んできた。かくして海の水はよごれ、かつ泥が堆積して浜の方からしだいに浅くなってきた。大正初めまでは、浜辺近くに山原船が着いたのであったが、今では小船さえ着けることができなくなっている。・・・(中略)。恩納の海はしだいに枯れてきている。山林を大切にし、海を大切にしなかったら、県下に誇る恩納村の美景もついには枯れてしまうのではなかろうか（仲松 1980）。」と。

建設予定地内には貴重な植生も豊富に生息していることから、表面踏査では伐採は行わずに遺構の確認をし、記録する方法をとった。試掘調査でも貴重種を損傷しないよう細心の注意をして伐採を実施した。また、丘陵部には猪が生息しており、調査中遭遇することはなかったが、鳴き声や土を掘り返した痕等がよく目に付いた。沖縄科学技術大学院大学（仮称）がこのように美しい村の自然環境の保護を充分考慮して建設されることを願う。


Mongolia
Vladivostok
North Korea
Pyongyang
Seoul
South Korea
Japan
Tokyo
China
Shanghai
East China Sea
沖縄
Okinawa
Taipei
台湾
Taiwan
太平洋
Pacific Ocean
South China Sea
Philippines
Manila
0
500
1000km
World Geodetic System 1984

第１図　沖縄本島の位置



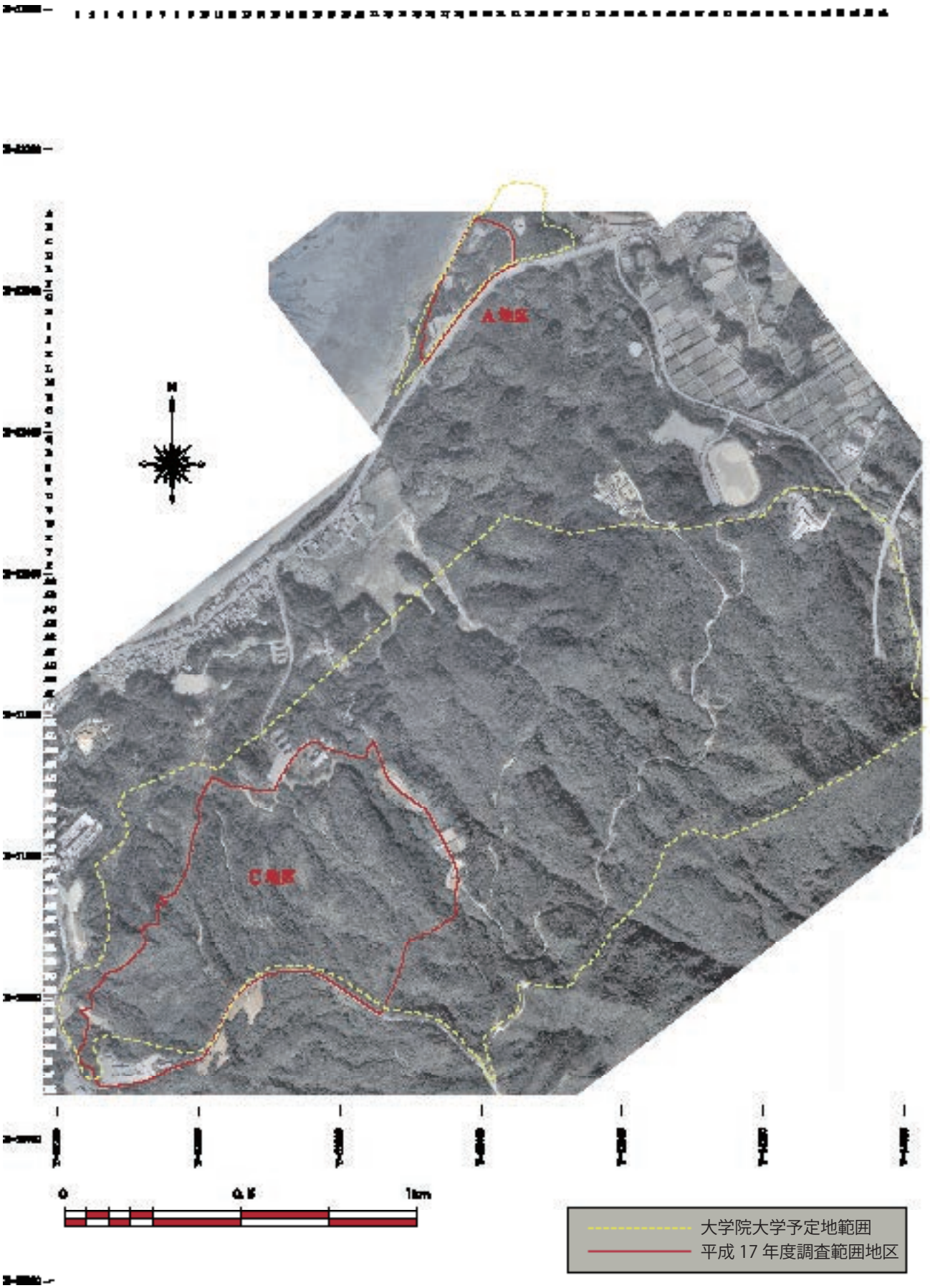
第２図　恩納村の位置および大学院大学建設予定地の位置

第２節　歴史的環境

恩納村の歴史は、今から約 3500 年前に遡ることができる。この地域には、現在までに 47 遺跡が確認されている。考古学上の調査成果から、貝塚時代前期から後期（縄文時代～古墳時代）、グスク時代（中世）～現代に至るまで人間活動の場となっていたことがわかっている。

縄文時代相当期の遺跡では、国指定の仲泊遺跡や伊武部貝塚などがある。仲泊遺跡は貝塚時代前期（縄文時代後期）に位置づけられる伊波式、仲泊式土器などといった土器群と奄美との関連性のある土器群が確認されている。沖縄国際海洋博にむけた国道 58 号線の改良工事のため、1974 年に実施された緊急発掘調査時によって、当遺跡の重要性が確認され遺跡保存の活動が強まり、国道 58 線を迂回させたことは、まだ、記憶に残っていることだと思われる。緊急調査というと 1970 ～ 80 年代にかけて、道路拡幅・改修工事に係わる緊急調査が数件行われている。遺跡は確認されていないが、沖縄最古の土器である爪形文土器を新田重清氏が仲泊遺跡前の海岸にて採集されている。この時期の遺跡が発見されると恩納村の歴史は、約 6000 年前まで遡ることとなる。今後の発見に期待したい。これまで調査した遺跡の中では縄文時代相当期の遺跡は少なく、大部分がそれ以降の遺跡である。

それらの調査の中に、縄文～古墳時代相当期まで継続して人々の生活の舞台となっていた伊武部貝塚などがある。伊武部貝塚は多和田真淳、高宮廣衛氏の報告によって知られるようになった。当遺跡は砂丘地に位置しており、縄文～古墳時代相当期の土器、石器、貝・骨製品が出土している。遺構では、土壙集積、石敷集積、集積炉などが確認されている。



図版１　大学院大学建設予定地と調査範囲

後続の弥生～古墳時代相当期では、熱田第二貝塚、久良波貝塚、熱田貝塚などが発見されており、そのほとんどが貝塚や集落跡である。久良波貝塚は、1990・1992 年に緊急調査がなされており、くびれ平底を主体とする後期土器群が出土している。先史時代の遺構は確認されていないが、92 年の調査では製糖所の炉跡を 2 基確認されている。

グスク時代（中世）から近世にかけての遺跡は、グスク、墓域、集落跡が確認されており、その中に護佐丸の居城としての山田グスクが知られている。山田グスクは字山田の東側にそびえる石灰岩台地の先端部に位置し、標高 95m の要害の地に築かれたグスクである。また、グスク北面の崖下に護佐丸先祖の墓がある。グスクの石積みは野面積みを使用しており、グスク系土器や輸入陶磁器等が出土している。グスクの北側谷間には、山田の古島があったといわれており、屋敷跡や古井戸がわずかに現存している。伝承によると山田グスク前にある久良波海岸は当時の貿易港として華やいだところだとされている。

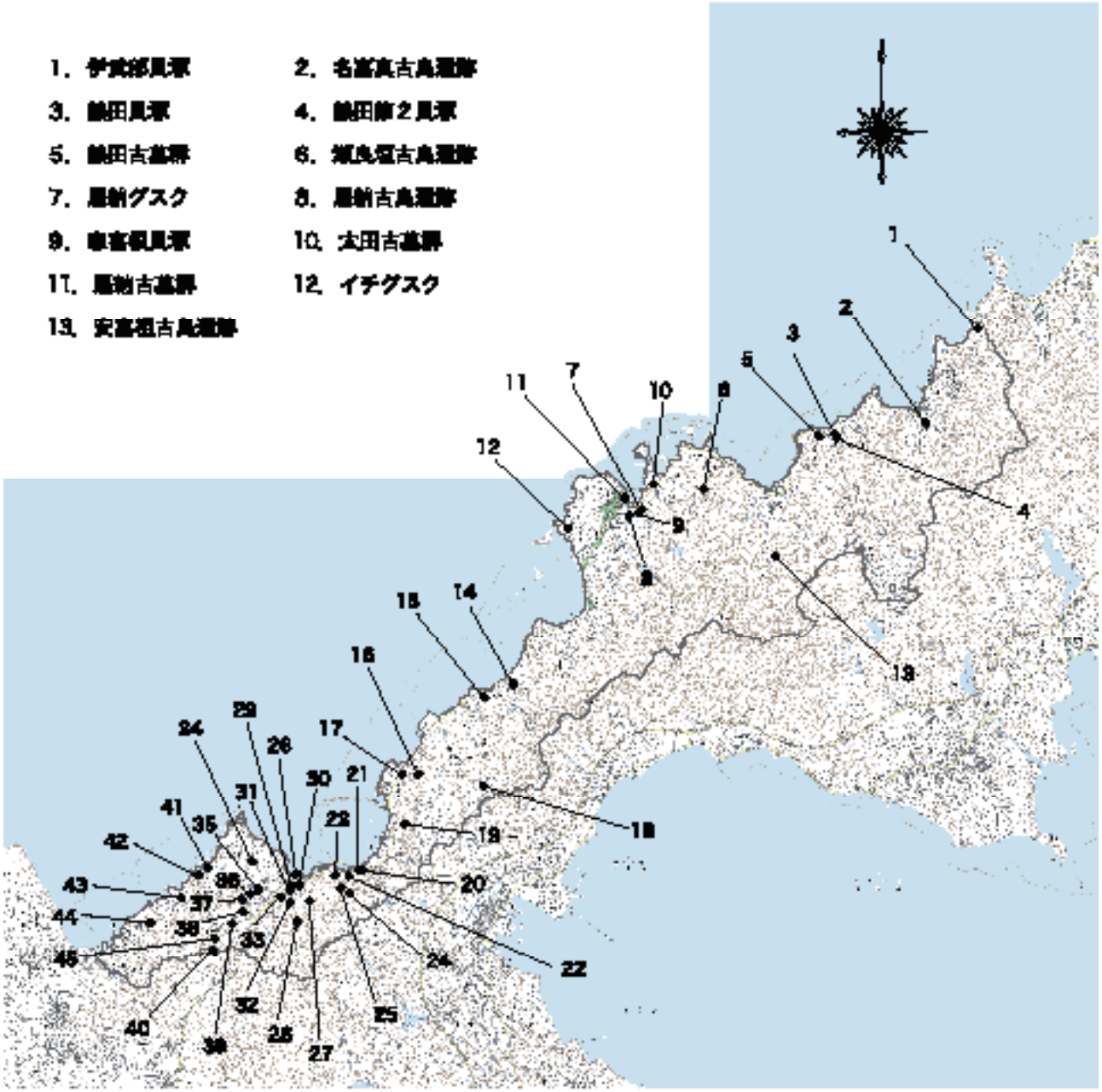
港と関連することとして、グスク下方の井戸「メーガー」から中国の貿易船に使用されていたと考えられる木碇の一部である碇石が発見されており、恩納村近海に外国船が往来していたことを裏付ける資料となっている。永楽年間尚巴志王の頃には、道路制がしかれていたこともあり、恩納村を含める国頭西海岸一帯にもグスクとグスク、またはグスクと集落をつなげる道が整備されていたものと考えられる。恩納村の道とは、比屋根坂から名嘉真を通り名護までつながっている。山田グスクの脇を通る内陸部から沿岸部を通る道が確認されている。グスク時代から国道 58 号線が出来るまで地域住民の人達の主要道として使用されている。

以後の近世～近代にかけては、生産遺跡として伝山田窯跡や字赤間の炭焼窯などを使用していたことが知られている。沿岸部においては、字真栄田の石切り場などが発見されている。

このような経過を踏んで現在の「恩納村」ができたのは、明治 41（1908）年によって制定された法律によってである。それ以前は、「恩納間切」と呼ばれていた。開始期は不明だが、「恩納村」ができた前後の大正初年頃まで恩納村では豊富な山の資源を利用し、木材や薪、竹、竹竿などを山原船によって那覇方面に運送しており、那覇方面からは酒、布類、灯油やその他の雑貨品が山原船で運搬されていた。

今回の埋蔵文化財センターによる試掘・範囲確認調査では前回の表面踏査よりさらに調査区を絞り、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地である旧白雲荘周辺の海側開発検討ゾーン（A 地区）と丘陵部の南尾根開発検討ゾーン（C 地区）が対象となった。

調査地区周辺には、隣の字谷茶に谷茶貝塚、谷茶古墓群などといった遺跡がある。谷茶貝塚は、部落の南西端側に位置し、砂丘から丘陵部の裾一帯まで広がっている。この貝塚は、貝塚時代後期の遺跡で土器片が表採されている。谷茶貝塚の北東に位置する谷茶古墓群は、国道 58 号線沿いの南東側に延びる丘陵の北東側斜面に掘り込み墓が点々とみられる。前面に広がる平地では新しい墓や建設中の墓などがあり、現在も墓域として利用されているようである。


1. 伊武部貝塚
2. 名倉真古墳群
3. 鮎田貝塚
4. 鮎田第２貝塚
5. 鮎田古墓群
6. 鍋島塩古墳群
7. 屋敷グスク
8. 屋敷古墳群
9. 車宮根貝塚
10. 太田古墓群
11. 屋敷古墓群
12. イチグスク
13. 安富祖古墳群
14. 岩茶古墓群
15. 岩茶貝塚
16. 宮城古墳群
17. 前兼久貝塚
18. 炭焼き窯
19. 安平地原貝塚
20. 仲泊一貝塚
21. 前の御嶽
22. 仲泊大金原土器製塩地
23. 仲泊遺跡、高麗人墓
24. 唐人墓の碑
25. 比屋根板石畳道
26. 久良波貝塚
27. 久良波首里殿内遺跡
28. 山田グスク＆勝佐丸父祖の墓
29. 旧久良波集落
30. アンナーグスク
31. 山田松川の石垣
32. 山田古墳遺跡
33. ムラウチ
34. ガジャグスク
35. 寺川垣
36. 伝山田城跡
37. 多幸山
38. フェーレー岳
39. 御主マーチ
40. 御待毛・殿内御宮
41. 塩屋貝塚
42. 塩屋集落内遺跡
43. 美容貝塚
44. 冬久田遺跡
45. 高弾田の一貝塚

第３図　恩納村の文化財

第３章　調査計画と方法

第１節　調査計画

本業務は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設に係る埋蔵文化財予備調査である。当該地域は分布調査が実施されていないことから、まず、基本的な表面踏査を実施し、その成果を受けて試掘調査によって遺跡の存在の有無とその性格と範囲を把握する。それによって、建設による埋蔵文化財の不時発見、または破壊を避ける為の資料とする。

平成 16 年度は表面踏査を実施し、平成 17 年度は表面踏査の成果を受けて試掘・確認調査を実施する計画を立てた。表面踏査では 62 地点の遺構が確認され、試掘調査は 73 箇所実施した。本事業では当該地域の自然環境の保護を十分考慮する必要があるため、綿密な計画を立てて実施する必要があった。基本的に伐採や枝打等は我々の判断では実施しない方針をとったため、詳細な測量や試掘調査を実施する際には植生等の知識を有する専門家に、伐採したい地域の植生チェックをしてもらい、その結果を検討して伐採をすることとした。

調査範囲については、文部科学省より提示された開発検討ゾーンをもとに決めた。表面踏査では、平成 16 年度には開発しうる範囲約 80ha が示されていたため、その範囲を囲むように調査区を３地区に分割し、海側を A 地区（海側開発検討ゾーン、約 4.2ha）とし、山側を B 地区（北尾根開発検討ゾーン、約 65.7ha）と C 地区（南尾根開発検討ゾーン、約 54.5ha）に分割した。試掘・確認調査は平成 17 年度にマスタープランの作成が進み、事業範囲が絞り込まれた段階でその範囲を中心に実施することとした。平成 17 年 11 月頃に南尾根開発検討ゾーン及び海側検討ゾーンを中心とすることを前提に、マスタープランの最終案が作成されることとなったため、そこを中心として試掘坑を設定した。ただし、当該地域には民間所有地を含んでいるため、その地域に関しては試掘調査を実施せず、村有地及び独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構所有地に絞って試掘調査を実施することとした。民間所有地に関しては、沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設計画がさらに進み、事業範囲が当該地域に含む場合に確認することとした。

平成 17 年度の試掘調査を実施する前には、C 地区においては予め航空自衛隊恩納分屯基地専用道路の使用許可を、A 地区においては特別地域内における土地の形状変更許可をそれぞれ申請する必要があった。航空自衛隊恩納分屯基地専用道路は C 地区の尾根を横断するように走っているため、その道路を使用することは当該地域の試掘調査では欠かすことができなかった。そのため、航空自衛隊恩納分屯基地専用道路は航空自衛隊那覇基地司令（航空自衛隊恩納分屯基地司令 経由）あてに使用許可を依頼した。A 地区は沖縄海岸国定公園に含まれており、当該地域内の原状を変更する際には申請が必要である。そのため、沖縄県文化環境部自然保護課と調整を行い、特別地域内土地の形状変更申請書を恩納村に提出し、沖縄県知事あて進達を依頼した。

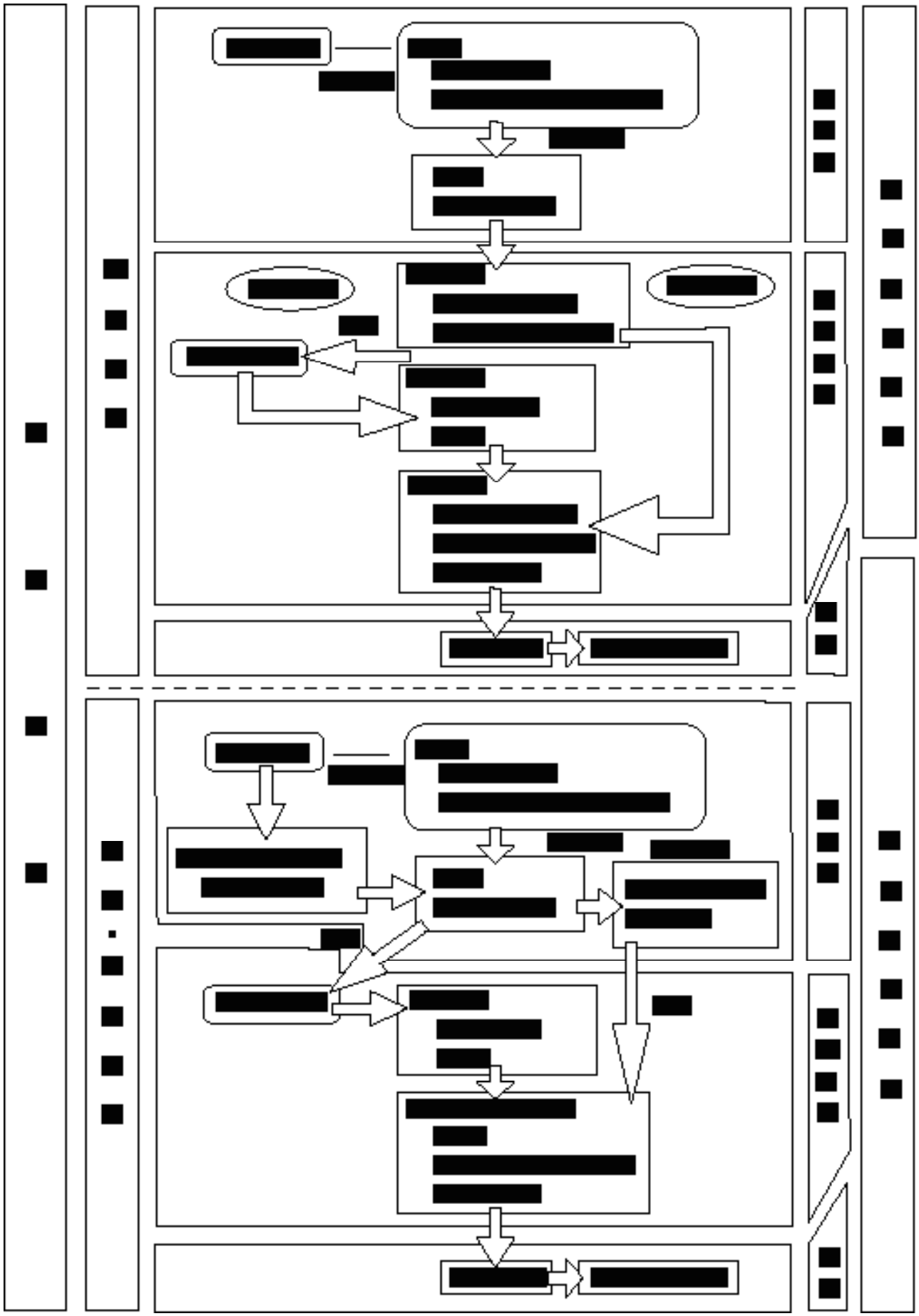
表面踏査では必要なかったが、試掘調査は掘削をするため伐採は避けて通れない。そのため、植生の専門家に植生状況を確認する必要があった。予め試掘坑設定位置及びその周辺を地形図上に示し、文部科学省に提出して植生の確認をした。いくつかの試掘坑及びその周辺においては、注意が必要な植生群落が生息していたため、現地で植生の専門家の立会いのもと試掘坑を設定した。

予備調査における全体計画をフローチャートとしてまとめた（第４図）。これは、平成 17 年５月に刊行した『沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅰ）』に示したものに一部加筆してある。

第２節　調査方法

沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設にあたっては、埋蔵文化財の保護と伴に環境への影響も充分考慮して設計を固める方針である。そのため、予備調査の段階である埋蔵文化財の分布調査でも、貴重種の損傷を抑えつつ実施する方が望ましいとの意見が提示された。これを受け、埋蔵文化財サイドと環境サイドにおいて活発な議論が展開され、予備調査の方法について検討を重ねた。

表面踏査では概要的な踏査を全体的に実施し、重要な場所についてはさらに詳細な踏査を進める２段階の調査方法を取った。概要踏査の結果、伐採が必要と判断された場合は植生の専門家に現地立会いを依頼して伐採を行い、貴重種の損傷を防ぐ。この前提のもとに、調査区を A 地区（海側開発検討ゾーン）、B 地区（北尾根開発検討ゾーン）、C 地区（南尾根開発検討ゾーン）に分割した。さらに、調査区全体を網羅するように、



第４図　予備調査における全体計画のフローチャート

地図上にグリットを設定した。グリッドの設定は踏査対象地区のA地区～C地区の３つのエリアをすべて含むよう座標値X=53040、Y=32240を基準として、40mメッシュを用いた。グリッドには東西方向に数字、南北方向にアルファベットを用いた。

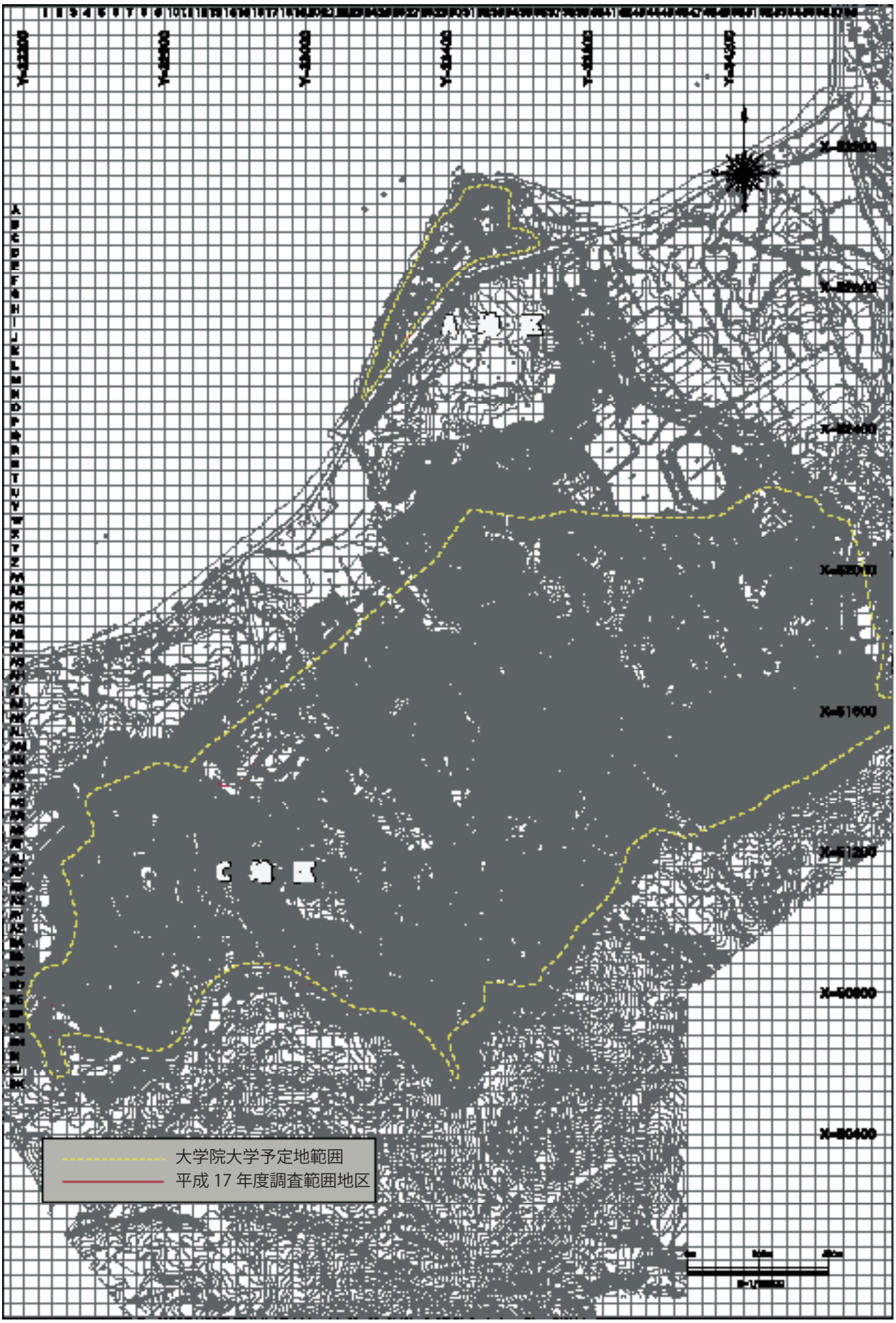
表面踏査の結果、62地点の遺構が確認された（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）。

今回の試掘・確認調査では表面踏査において用いた地区やグリット設定等すべてを踏襲し、追加で確認された遺構についても続きの通し番号をつけた。試掘坑はすべてT.P（テストピット）で表現した。また、C地区においては便宜的に①～⑤のエリアを設定した。

調査区がA地区とC地区の村有地及び独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構所有地に絞られたため、その２地区において73箇所（A地区15箇所、C地区58箇所）の試掘調査を実施した。試掘坑の設定はGPSやトータルステーションを利用して、試掘坑４点の座標・周辺の水準を確保した。使用したGPSはニコン・トリンブル社のTrimble5800、受信機に携帯電話を接続してVRS-GPSサービスを活用することでリアルタイムに公共座標データを現場で確認することができるタイプにした。しかしながら、調査対象地区は樹木の伐採等が行えないため、尾根付近でも3.0～5.0m、沢付近では10m以上に達する木々の中でのGPSの直接観測は現実的に不可能であった。そこで、本来約2.0mの支柱の先に円盤状の受信機を備えたGPSに、直径３cm・長さ1.8mのスチール製棒を２～３本つなげて製作した新たな支柱を取り付け、樹上までのばすことで衛星情報を多く取り込み、通信を可能とすることができた。この方法により尾根付近の測量は容易となったが、谷部分ではGPSが樹上に達せず衛星情報を得ることは困難であった。そのため沢付近の測量は、まず調査対象地点が見通せる尾根上にGPSにて基準点を２箇所設置し、この２点を用いて尾根から沢への斜面上にトータルステーションを立てて、位置計測を行うこととした。草木や樹木により１回で見通せない箇所については、開放トラバースを組み、機械を移動しながら、尾根から斜面を下りつつ測量した。

試掘調査はバックホウ等の重機が立ち入ることが困難な場所が多いため、基本的には手堀によって実施した。試掘坑の規模は２ｍ×２ｍを基準とし、必要に応じて拡張をする方法をとった。株式会社中部日本鉱業研究所と支援業務委託を締結し、現場事務所の設置や作業員の雇用・管理等の諸現場管理を委託した。実際の試掘調査ではA班～C班に班分けを行い、それぞれ、１名の当センター調査員、４名以上の作業員で構成した。３班同時並行で別々の試掘坑の調査を行い、朝・昼・夕には必ずそれぞれの班の進捗や今後の計画について話し合うこととした。また、調査中の各班の動向は常に中部日本鉱業の現場代理人が把握し、当センターの専門員に連絡をするようにした。C地区はすべてが険しい山林内のため、作業員の移動ルートの作成や道具の運搬等の諸準備・安全に関しては中部日本鉱業研究所が管理をした。

１つの試掘坑の基本的な調査方法としては、まず、予め設定してある試掘坑及び掘削によって出た土砂を置くための場所等を伐採し、調査環境を整えた。スコップを用いて層序ごとに掘削を行って、遺物包含層や遺構の有無を確認した。赤土対策として、試掘坑の脇にはブルーシートを広げ、土砂はすべてその上に一時置いた。地形が斜面地等で土砂がブルーシートから流出する恐れがある場合は、土砂のすべてを土嚢袋に入れた。１つの試掘坑の調査が次の日に持ち越しになる場合は、土砂の上にさらにブルーシートを厳重に被せて雨によって土砂が流出することを防いだ。記録は基本的に状態の良い壁面（東西、南北）２箇所について行い、遺構が確認された場合は平面も記録した。すべての記録が終わった後は埋戻を行い、表面には伐採した雑草を戻して赤土対策等を行い試掘を完了させる。



第５図　調査対象地区におけるグリット設定図

第４章　調査の成果

今回の試掘調査はＣ地区で 58 箇所、Ａ地区で 15 箇所の計 73 箇所実施した。また、補足的な表面踏査も合わせて実施した。その結果、試掘調査によって近世・近代と考えられる畑跡３箇所（63 ～ 65 地点）、古墓１基（平成 16 年度の表面踏査によって確認された 42 地点）、歴史の道と考えられる古道（71 地点）が確認され、表面踏査によって猪垣２本（66･67 地点）、落とし穴３基（68 ～ 70 地点）、遺物散布地（72 地点）、古墓２基（73 地点）が確認された。地区別に見ると、Ｃ地区では畑跡３箇所、古墓１基が確認され、Ａ地区では猪垣２本、落とし穴３基、歴史の道、遺物散布地、古墓２基が確認された。

試掘坑は T.P（テスト・ピット）で表現し、確認された遺構や遺物包含層については表面踏査成果（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005）の継続として「～地点」を、続きである 63 地点から使用した。

Ｃ地区では基本層序を統一（T.P43・44 の古墓を除く。）したが、Ａ地区については堆積状況が複雑だったため台地上の T.P のみ統一し、海岸沿いの T.P については個々の層序で明記している。

第１節Ｃ地区（南尾根）

Ｃ地区は細い尾根が何本も南北にはしる地形で、尾根と尾根の間には沢があり川が流れている。北側には旧グランドパークがあって、脇には細長い池がある。周辺の土地はグランドパーク時代に改変されており、沢沿いに橋や階段等の施設が設けられている。これを除くと自然地形を良く残している場所といえる。平成 16 年度は当該地区において約 54.5ha の表面踏査を実施した。その結果、古墓と考えられる横穴遺構（42 地点）が確認されたのみであった。約 65.7ha の表面踏査を実施したＢ地区においては、猪垣や炭焼窯等多数の遺構が確認されたのに対して対照的な結果となった。

Ｃ地区では、試掘調査は 58 箇所実施した。その結果、近世・近代と考えられる畑跡（63 ～ 65 地点）が３つの地点で、近代と考えられる古墓（42 地点）が１基確認された。航空自衛隊恩納分屯基地専用道路を使用する必要があったため、申請を行った。試掘坑の設定を計画したいくつかの場所には注意すべき植生が生息していたため、現地で専門家の立会いのもと伐採によって注意すべき植生を損傷しない場所に試掘坑を設定した。

１. 試掘坑の位置と概要

試掘調査は計 53 箇所で実施し、試掘坑は２ｍ × ２ｍを基本として設定した。調査にあたっての便宜上Ｃ地区をさらに①～⑤の５つのエリアに分割した。

調査の結果、エリア②の T.P ６～８（63 地点）、エリア④の T.P27（64 地点）、エリア⑤の T.P25（65 地点）において近世・近代と考えられる畑跡が確認され、T.P43・44（42 地点）において近代以降と考えられる古墓が確認された。

すべて手堀りによる試掘調査である。Ｃ地区の尾根筋を基本として平場を中心に実施した。沢は尾根の傾斜がきつく川が流れているため、試掘坑を設定できる場所がほとんどなかった。第６図～第 11 図は各エリアの地形と成果の概略を示したものである。柱状図は実測図における縦横の比率を３: １に変換してあるため、傾斜の表現等がかなり誇張されている。

Ｃ地区は丘陵部であるため尾根筋の堆積が浅く、薄い表土を掘削するとすぐに地山か岩盤となる。地山はマーブル状を呈しており、石英が混じる。厚く堆積しており、手堀りによる試掘調査では岩盤を確認できない場所や、ほとんど堆積しておらずすぐに岩盤となる場所等がある。

Ｃ地区の試掘坑にアクセスするには２つの道路が必要となる。１つは航空自衛隊恩納分屯基地専用道路でエリア①～④まではすべてこの道路を使用する。この道路脇に車を駐車し各尾根筋から試掘坑へ向かうが、道路が調査区の南側境界となっているため、北の試掘坑に向かうにしたがって移動にかなりの時間を要し、道具の運搬等が困難となっている。特に T.P18 ～ 19 を除くエリア④は試掘坑へのアクセスがとても困難な場所である。道具類を携帯せず少数で移動するならば、尾根を下って沢を登れば比較的短時間で移動できるが、当該地区は傾斜が急のため細心の注意を払って移動する必要がある。しかし、多量の道具を携帯し多数の作業員を導いての移動では、このルートを使用することができない。そのため、尾根筋のみを歩いて移動するルートを採用する必要があった。航空自衛隊恩納分屯基地専用道路でもとても遠い場所まで車で移動し、

徒歩にて約 25 分移動してようやくエリア④に到達する。昼食のため現場事務所に帰ることは時間的にも体力的にも大きな負担となったため、このエリアでの試掘はピクニックコースと称し、弁当を携帯して調査を実施した。

エリア⑤は、旧グランドパークの北側から進入できる道路を使用した。このエリアは尾根筋に細い林道が通っているため、時間はかかるが移動は比較的容易であった。ただし、沢沿で試掘を行った T.P43 ～ 44 は尾根を下る必要があり、さらに、T.P39 へはもう一度尾根を登る必要があり困難な場所であった。すべての試掘坑へのアクセスで共通して言えることは、試掘坑へ行くときは下りのため容易であるが、調査を終えて帰るときは登りとなるため、体力的に困難となることであった。

調査は基本層序を統一しているため、以下にその概要を記す。

【基本層序】

I 層：表土。概ね黒褐色。調査区全体に堆積している。周辺が山林のため落葉や植物が密集して生息しており、腐植土層となっている。

II 層：耕作土。にぶい黄橙色 (10YR6/4)。近世・近代と考えられる畑跡が確認された。地山を開墾して畝を作っているため、地山の土がブロック上に残っている。

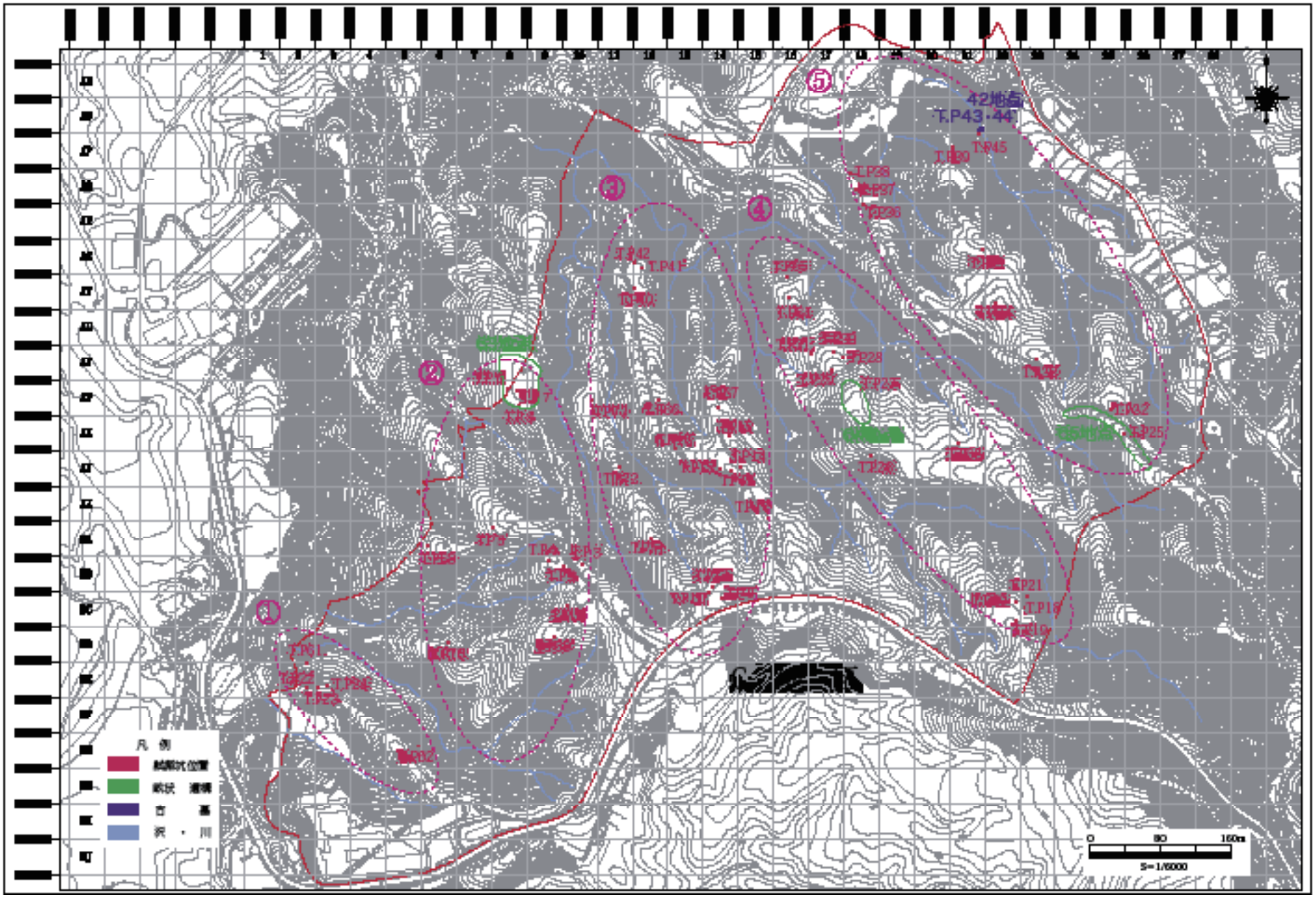
III 層：地山。概ね黄褐色、赤褐色、乳白色を呈しており、これらの色がマーブル状に堆積している。石英微粒子を多量に含む場所やほとんど含まない場所がある。全体的に堆積している訳ではなく、場所によっては表土の直下がすぐに岩盤となる場所もある。

V 層：岩盤。石質が比較的柔らかく、スコップで掘ることも可能である。

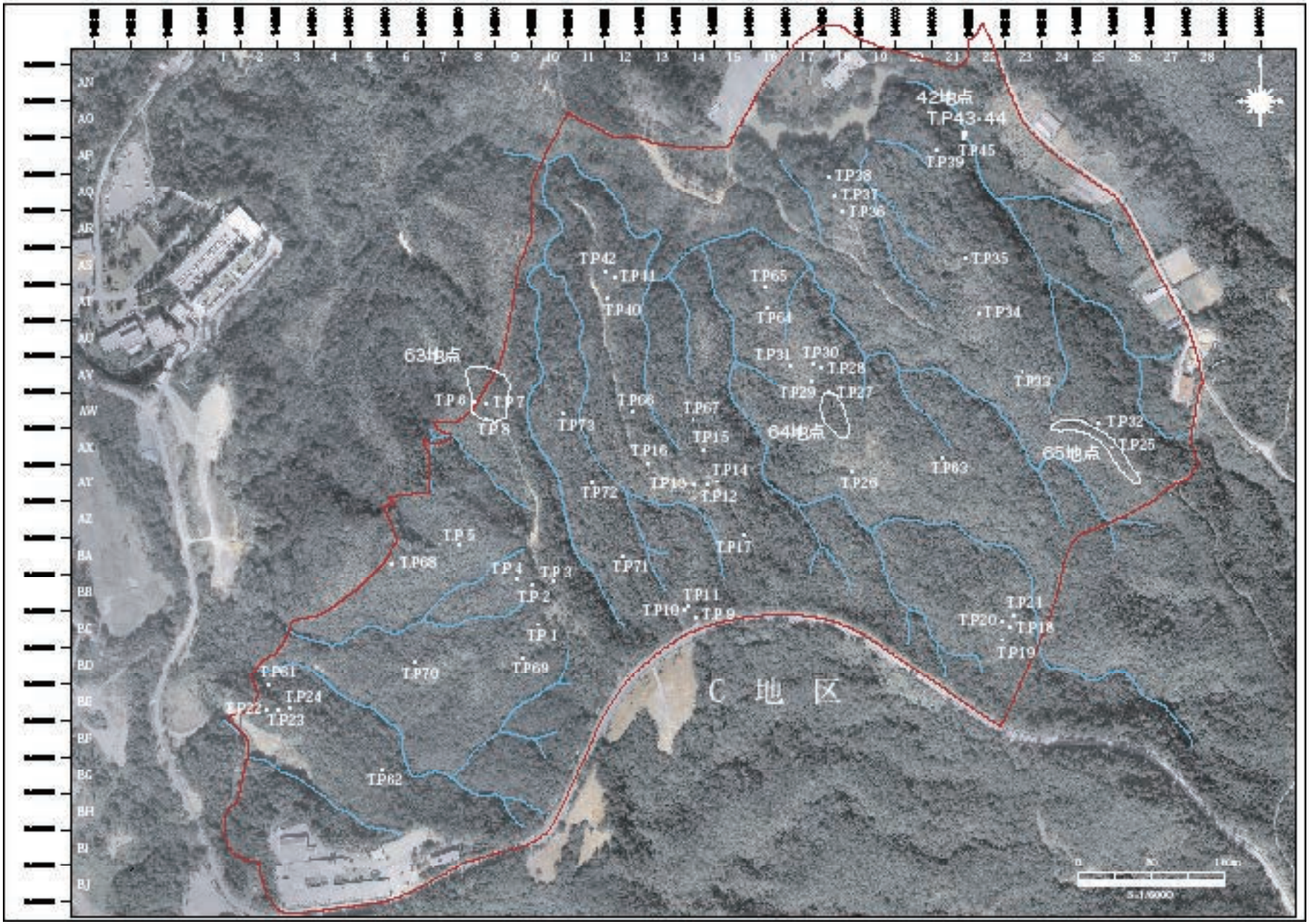
自衛隊専用道路入口（エリア①～④へ）

旧グランドパーク脇道入口（エリア⑤へ）

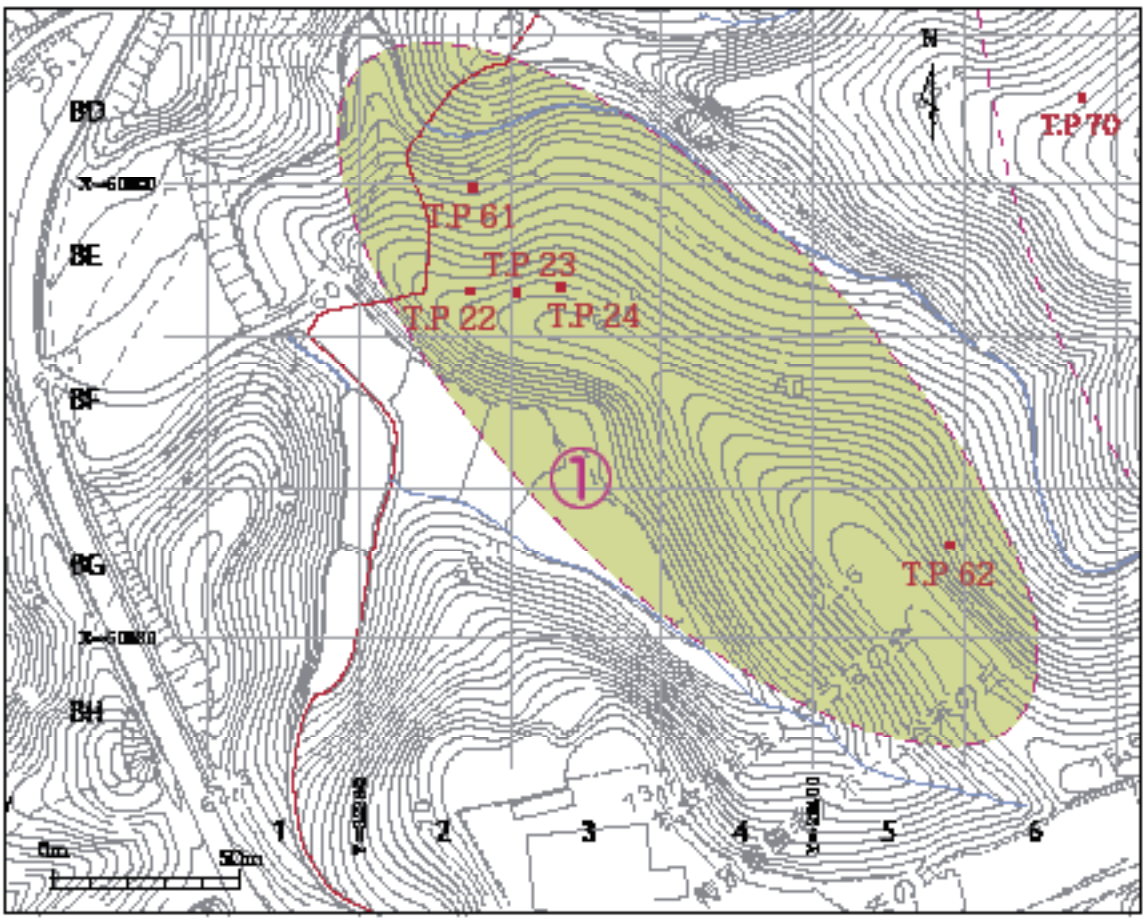
図版 2　C 地区へのアクセス道路



第６図　Ｃ地区　試掘坑の位置と成果概略

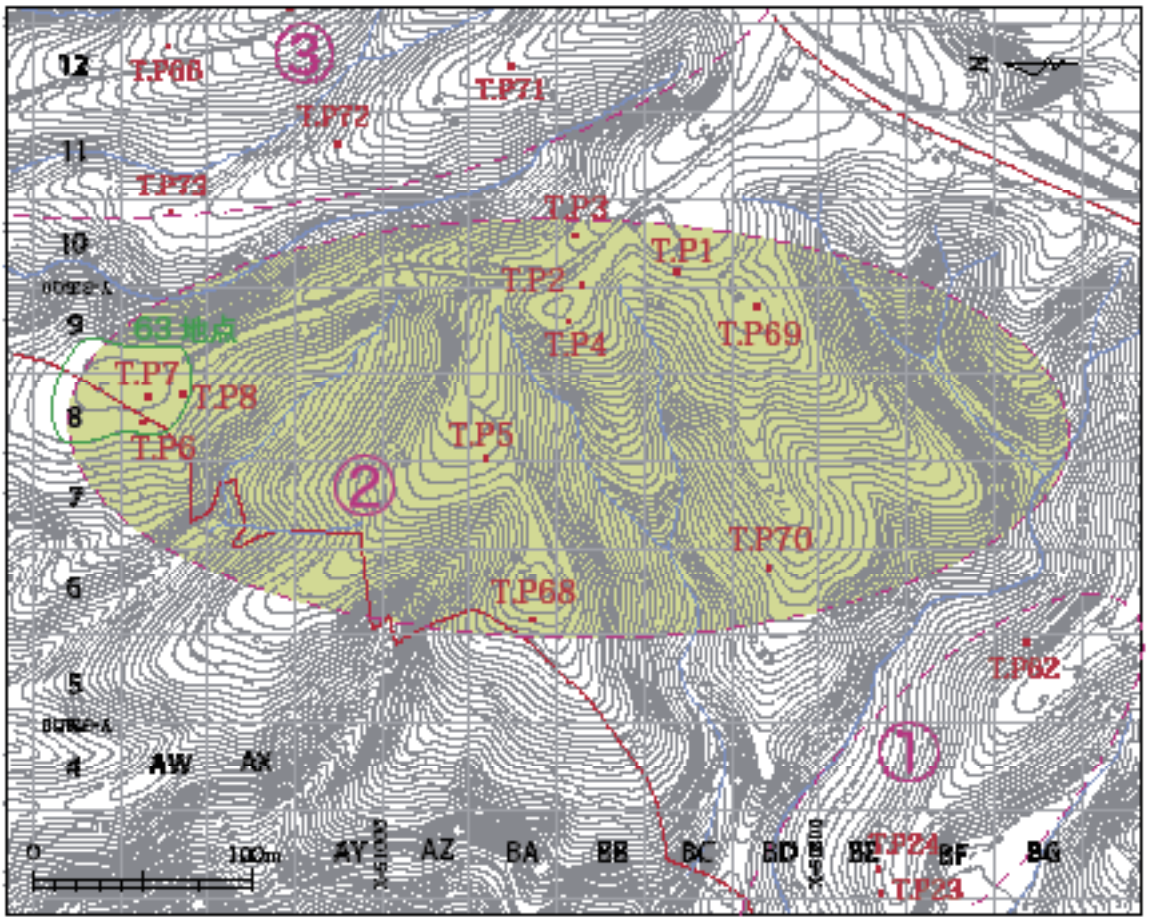


図版３　Ｃ地区　試掘坑の位置と成果概略

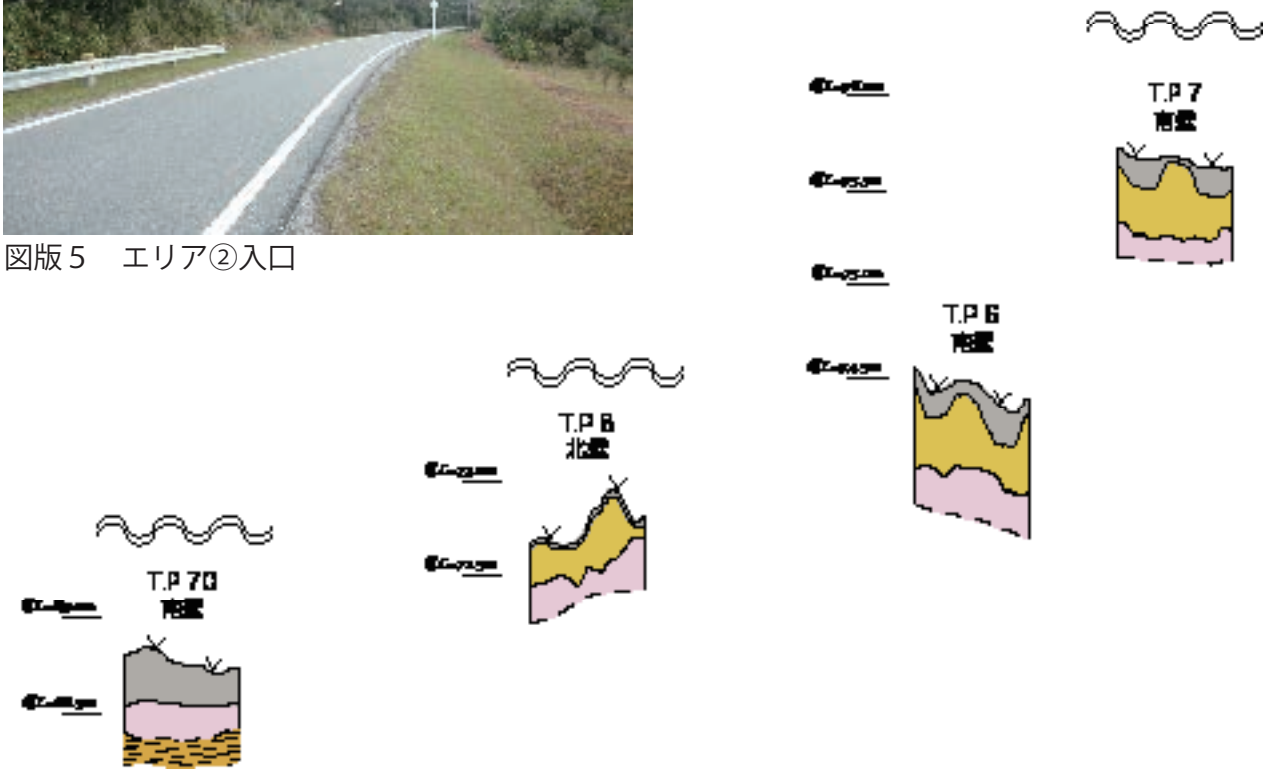


第７図　エリア①土層

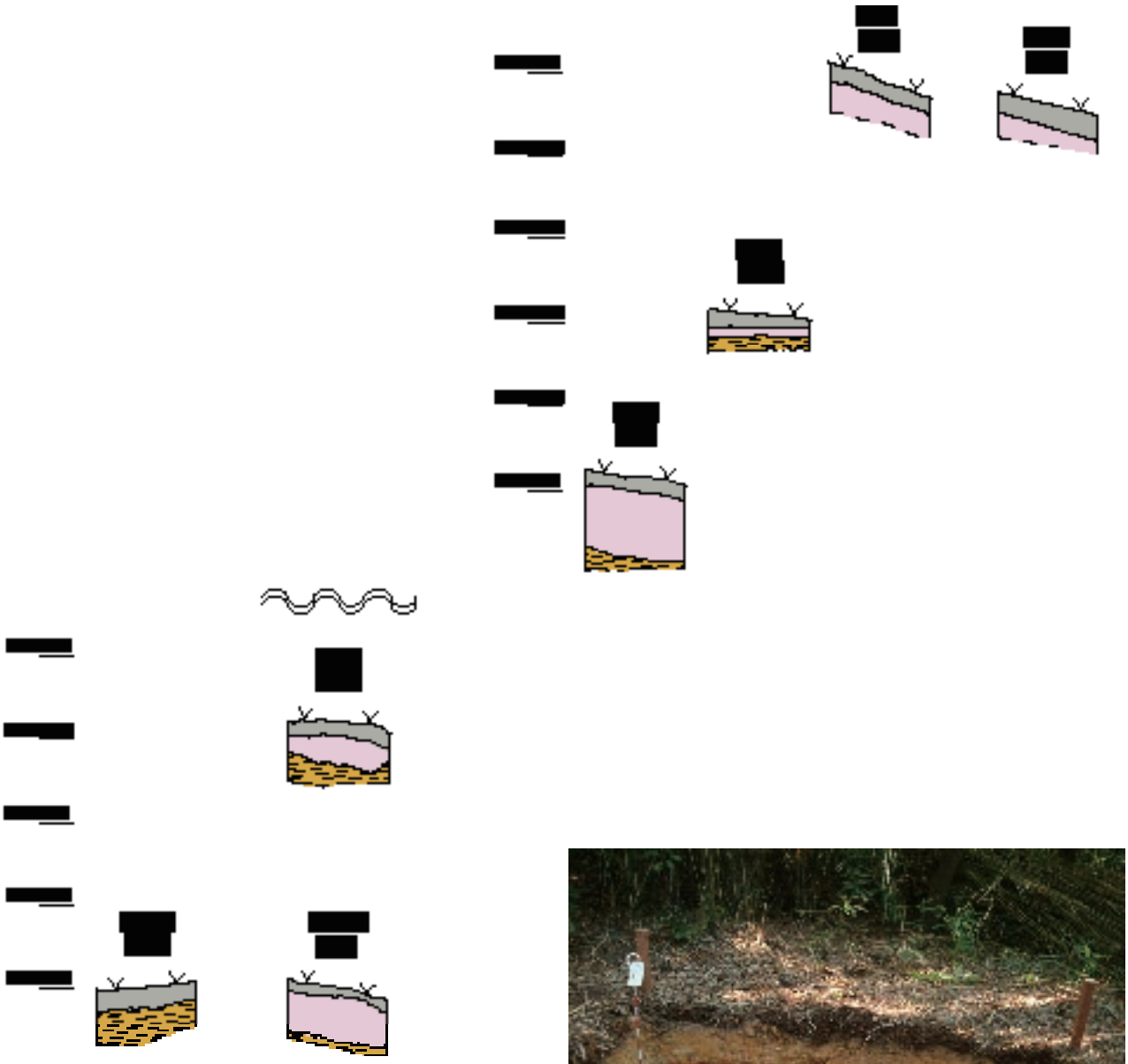
図版４　エリア①入口



図版５　エリア②入口



第８図　エリア②土層

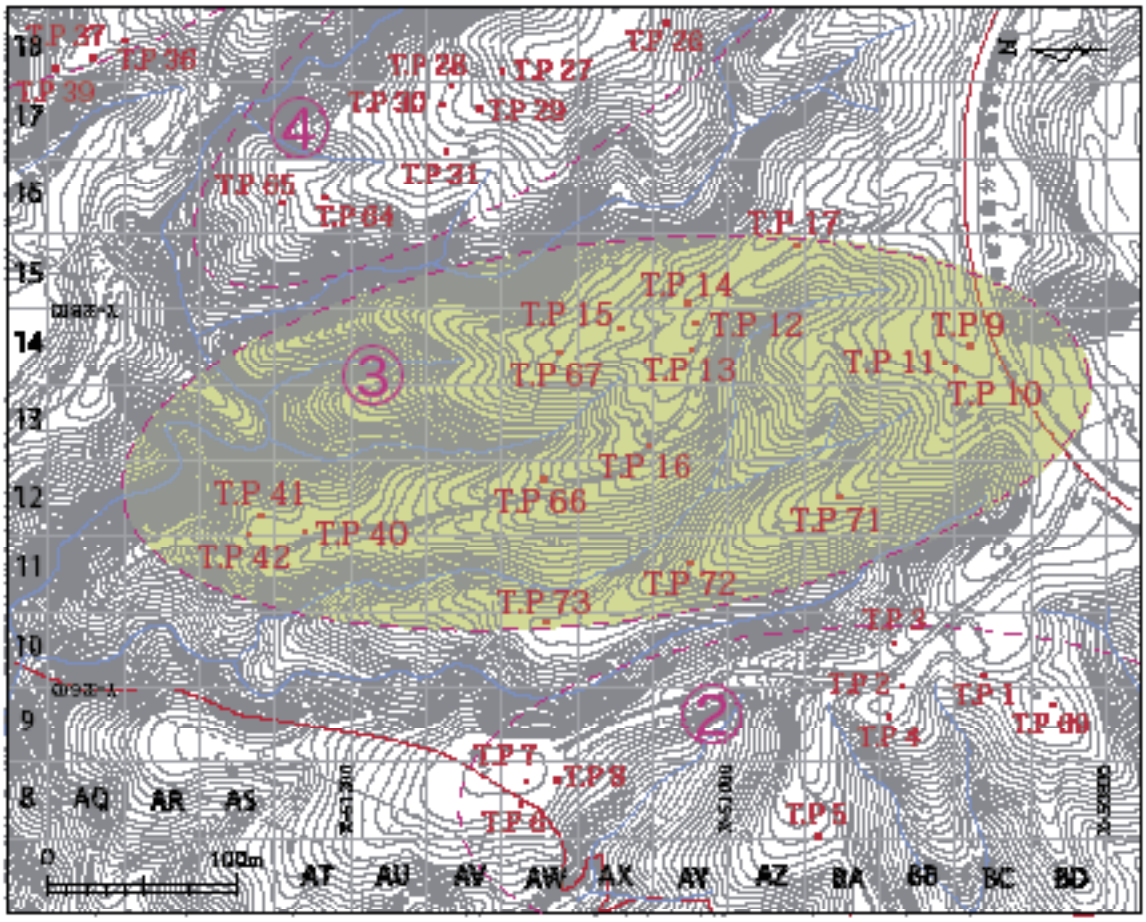


T.P 5　南壁

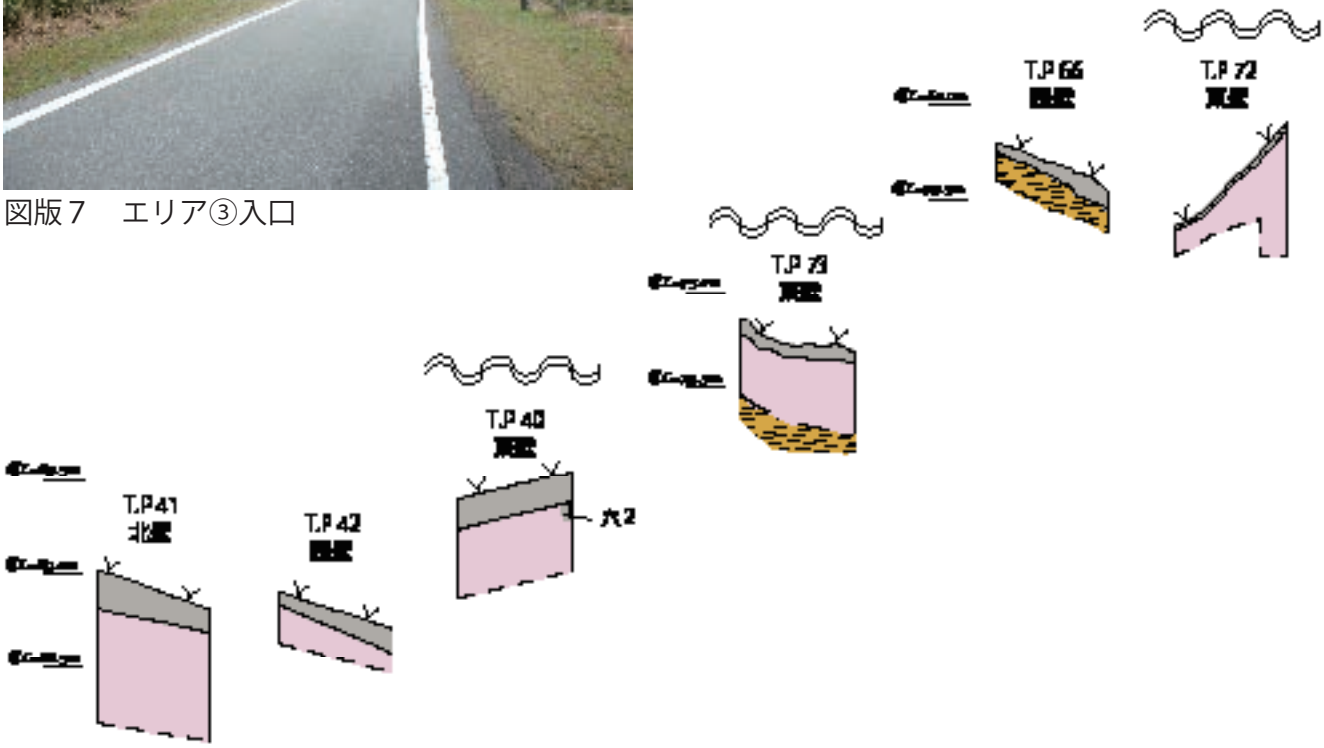
T.P17　完掘

T.P70　南壁

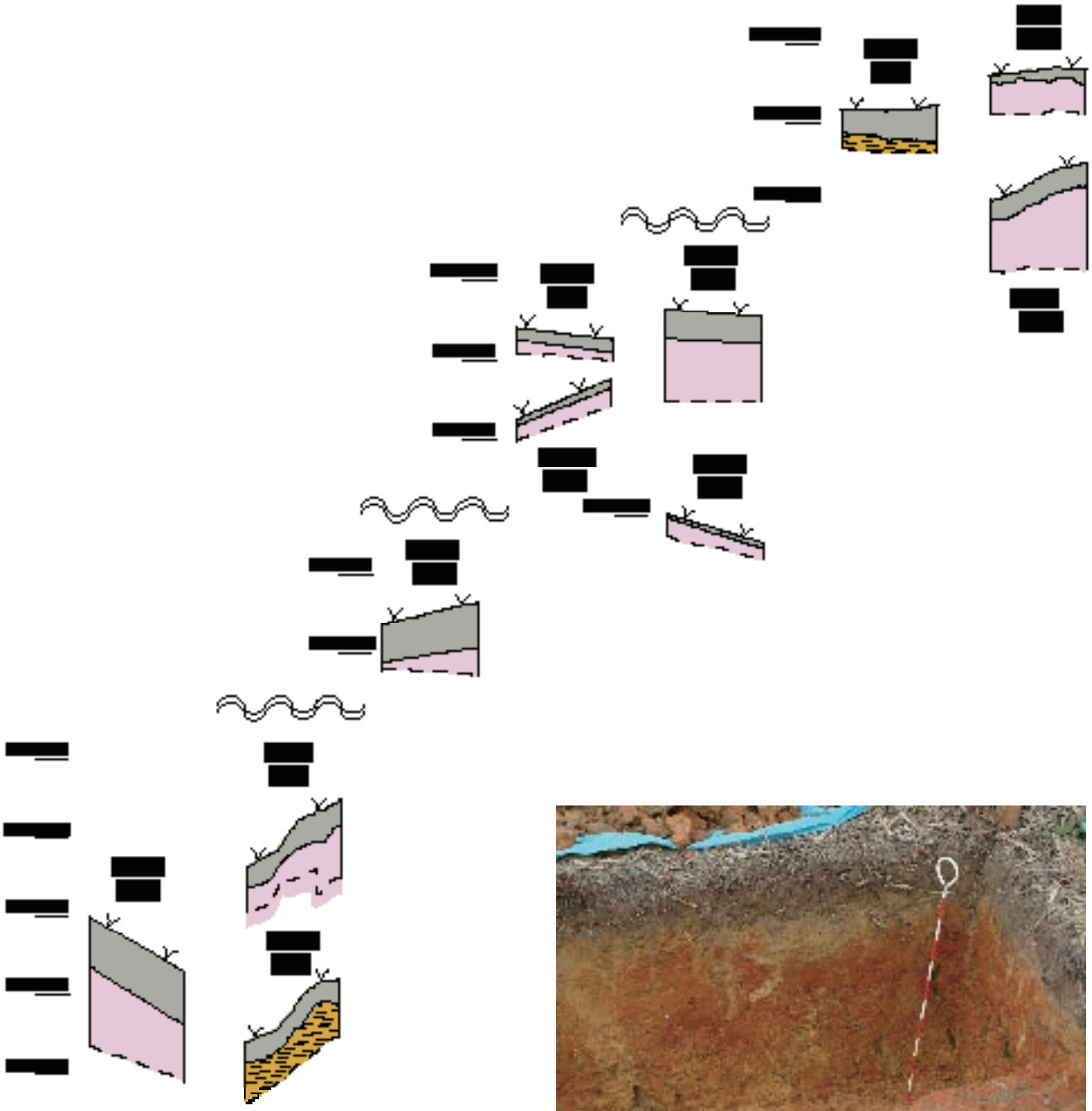
図版６　エリア②



図版７　エリア③入口



第９図　エリア③土層

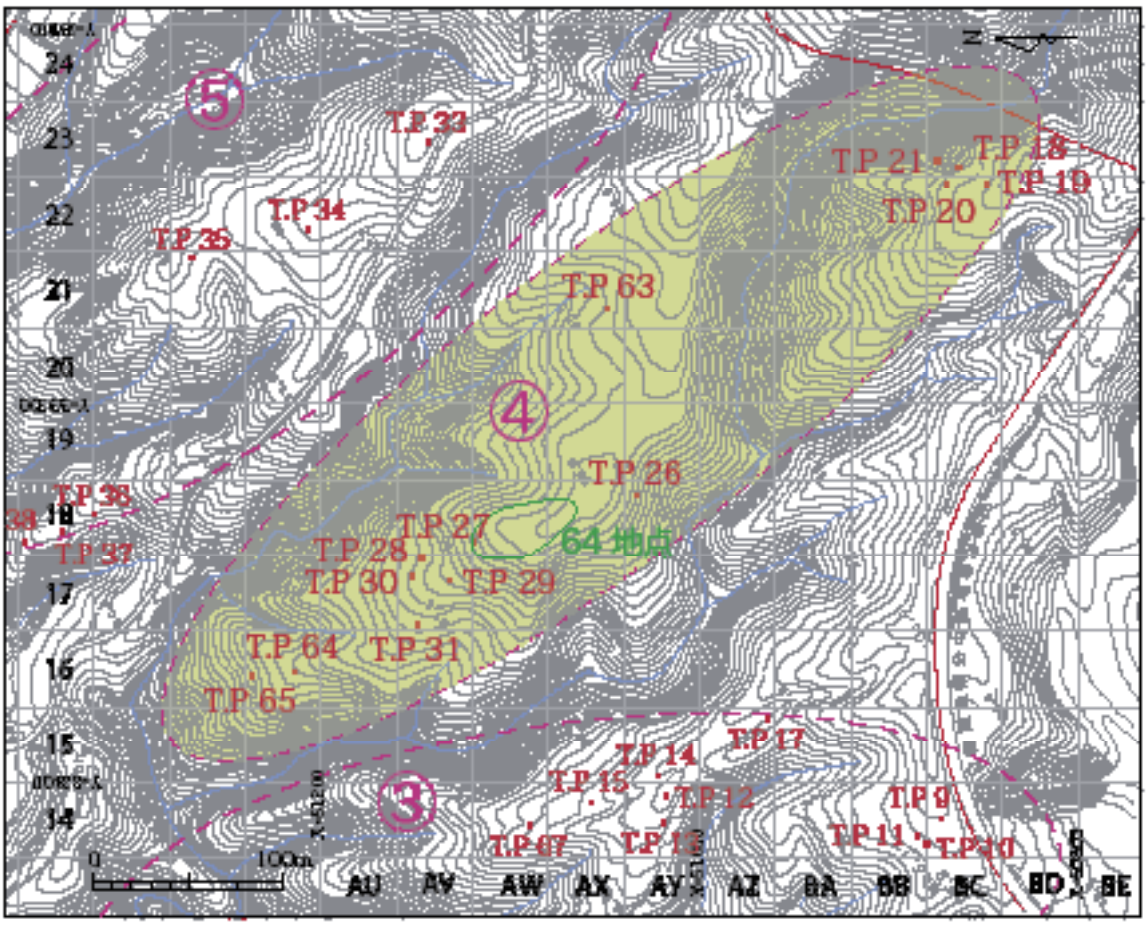


T.P11　東壁

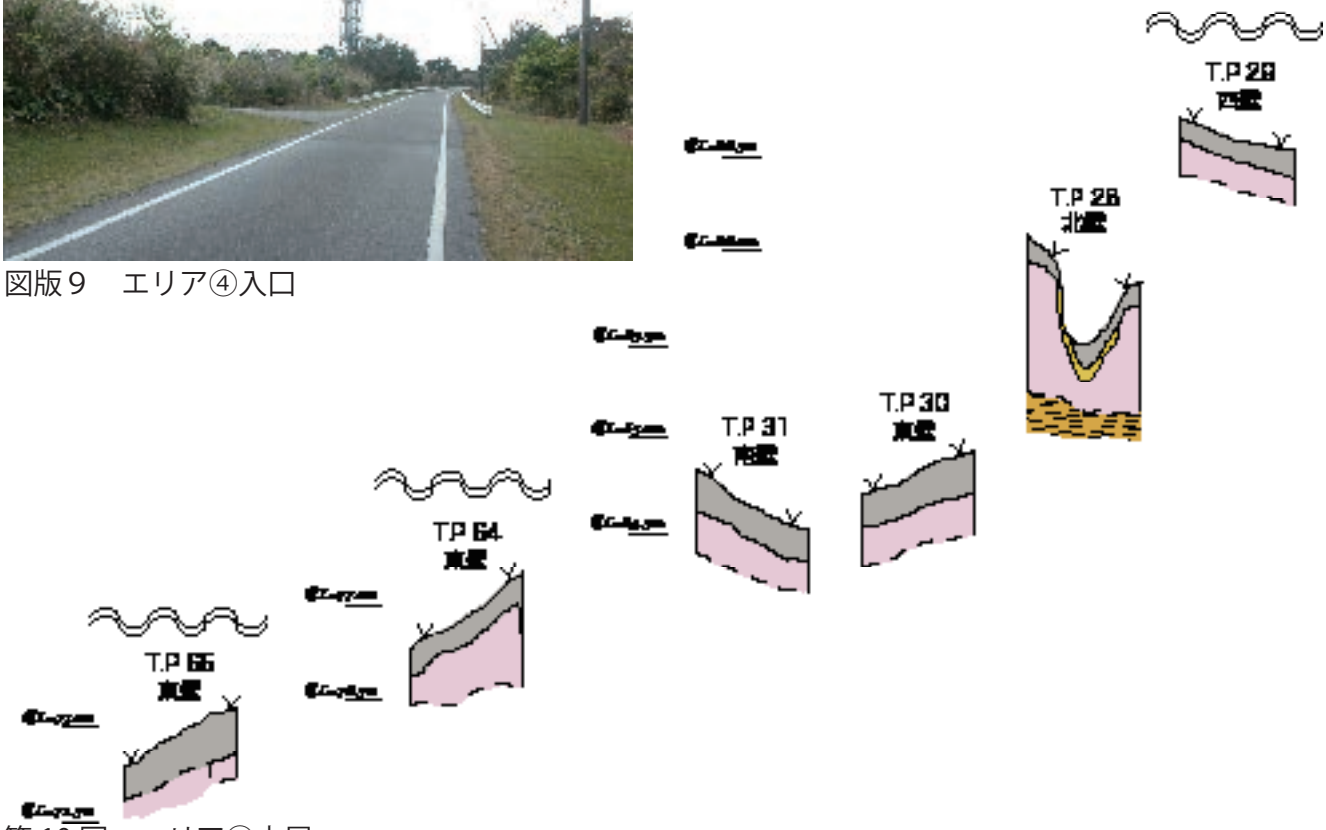
T.P41　完掘

T.P73　東壁

図版８　エリア③

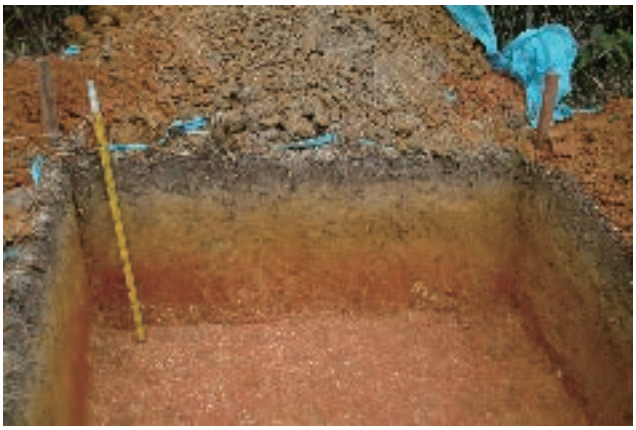


図版９　エリア④入口



第 10 図　エリア④土層

図版 10　エリア④ T.P26 作業風景

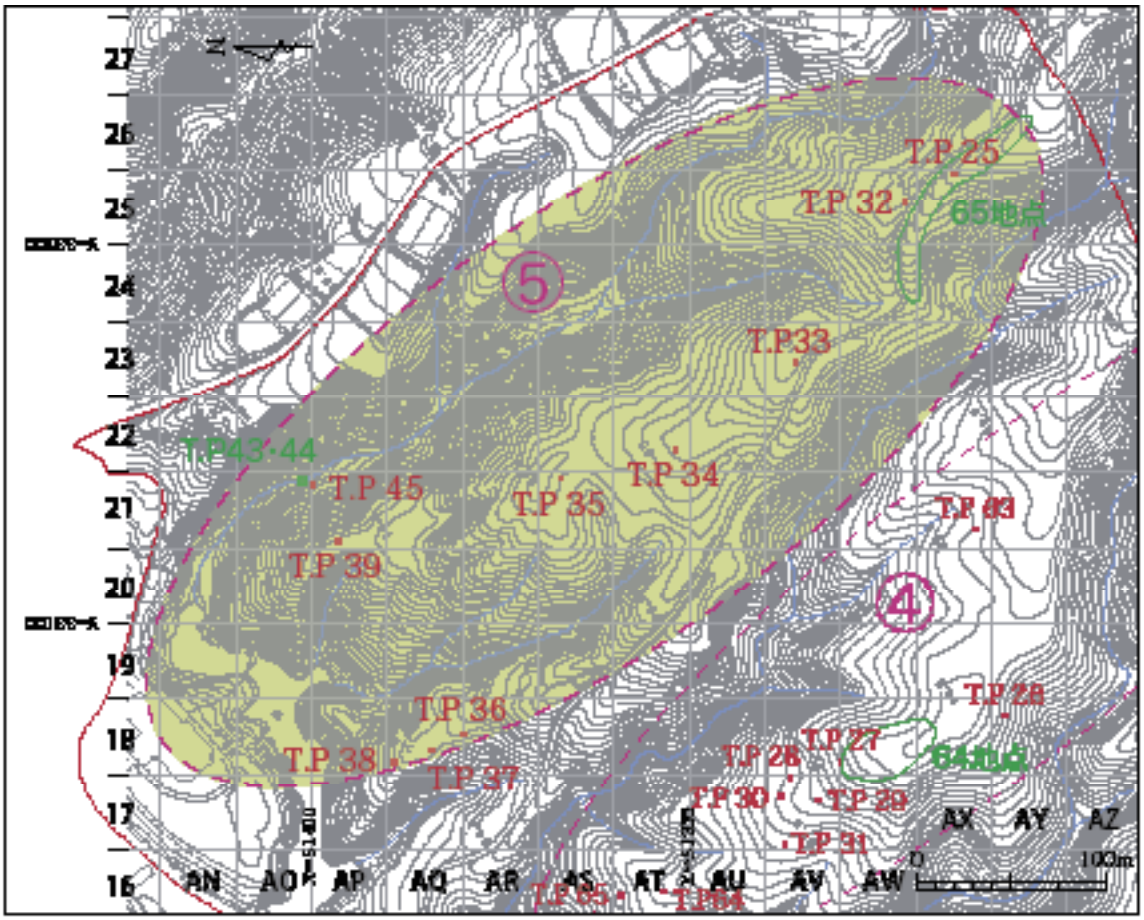


T.P19　西壁

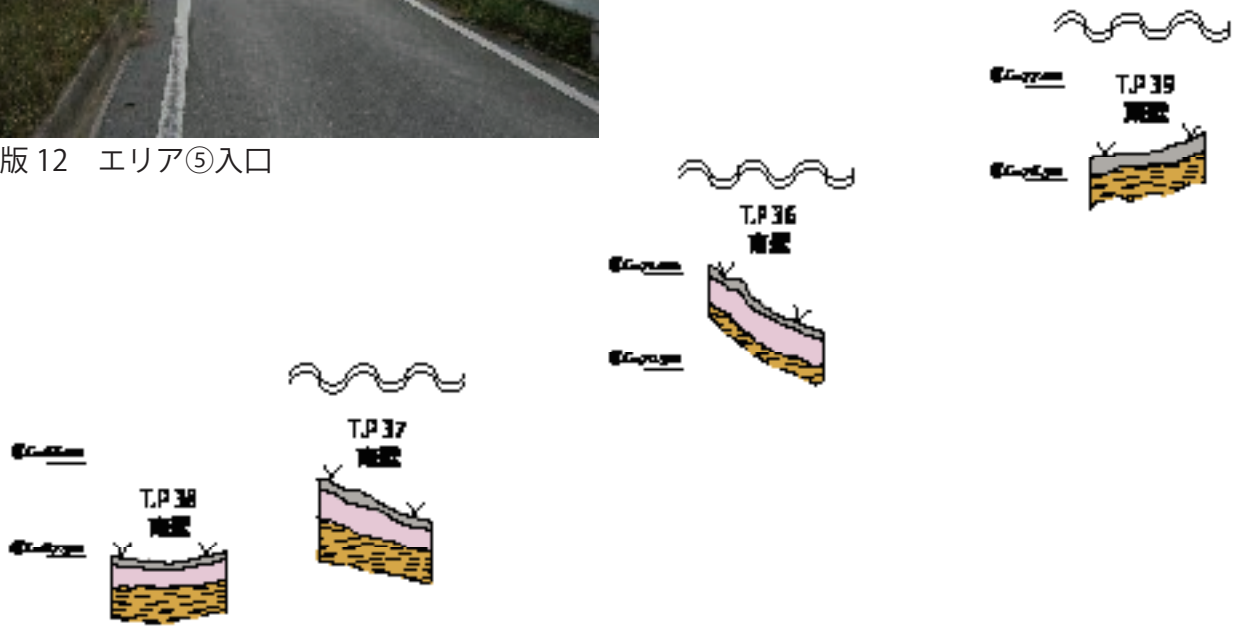
T.P30　完掘

T.P64　東壁

図版 11　エリア④

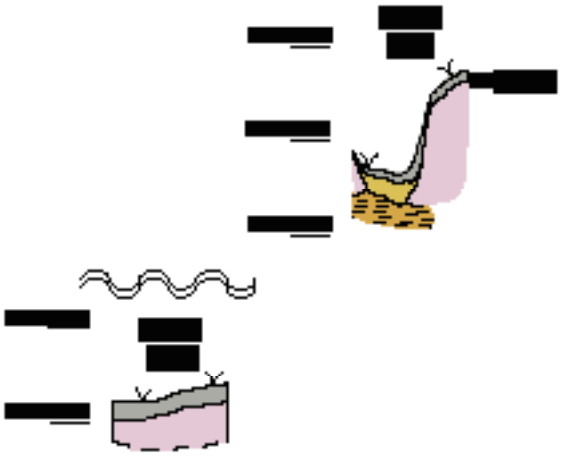


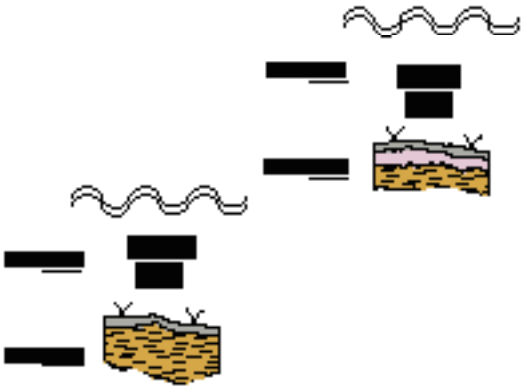
図版 12　エリア⑤入口

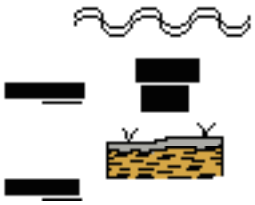


第 11 図　エリア⑤土層

図版 13　エリア⑤ T.P34 作業風景







T.P32　完掘

T.P36　南壁

T.P38　埋め戻し後

図版 14　エリア⑤

2. 畑跡（63 地点～ 65 地点）

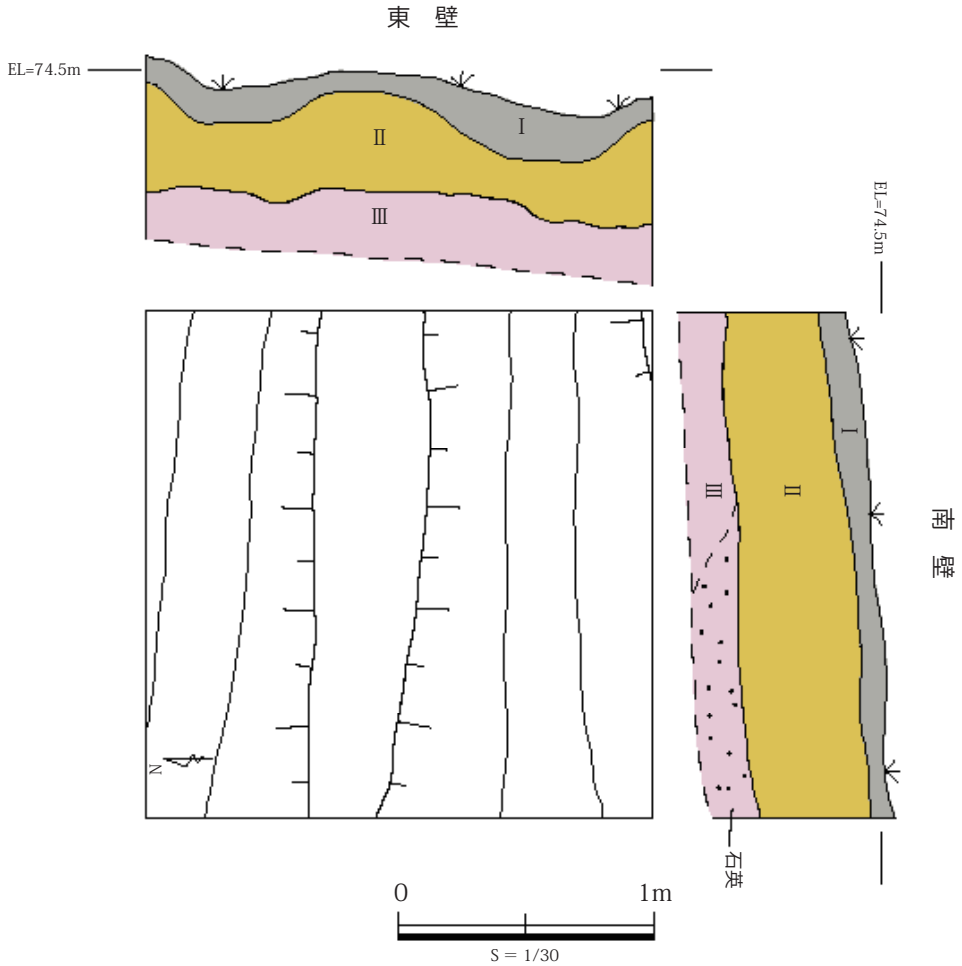
畑跡はエリア②の AW 8 グリット T.P 6 ～ 8（63 地点）、エリア④の AW18 グリット T.P27（64 地点）、エリア⑤の AY25 グリット T.P25（65 地点）において確認された。いずれも近世・近代のものと考えられる。平成 16 年度に実施した表面踏査では、当該地区は雑草等の樹木が鬱蒼と茂っており、地表面も腐植土によってほぼ平坦だったため、畝を確認することができなかった。いずれの畑跡も地形に合わせて平坦な場所にある。

以下、それぞれの畑跡について記す。

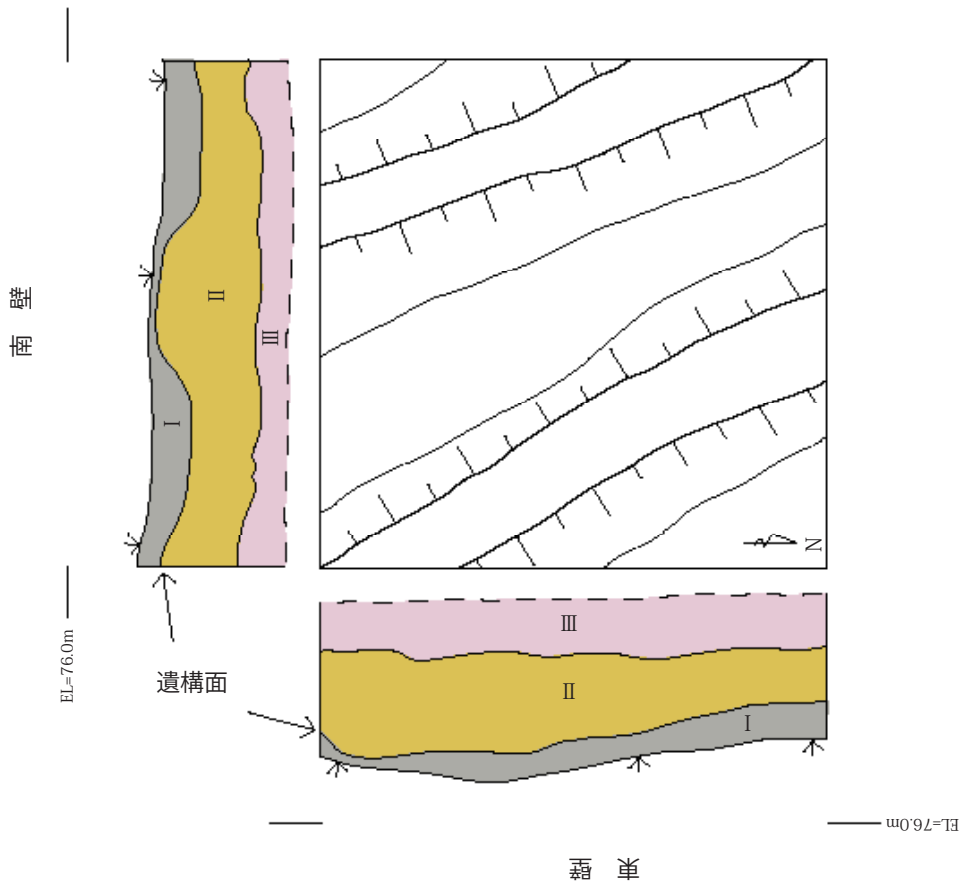
63 地点

エリア②の AW 8 グリット T.P 6 ～ 8 で畝を確認した。周辺は細い尾根筋の中で比較的平坦な場所に畑が作られており、畝が何本もある。今回確認された畑跡の中では最も広い面積となっている。畝幅は下部で 1 m 前後、上部で 50cm 前後、高さは 10cm 前後を測る。畝と畝の間隔は頂部を中心にして 1.1m 前後を測る。腐葉土が厚く堆積しており、地表面では確認が難しい。地山を掘り込み、さらに盛土によって畝を作っている。耕作土に下層の地山土がブロック状に多数混入していることから、耕作土自体はそれほど何度も耕されていないと思われる。

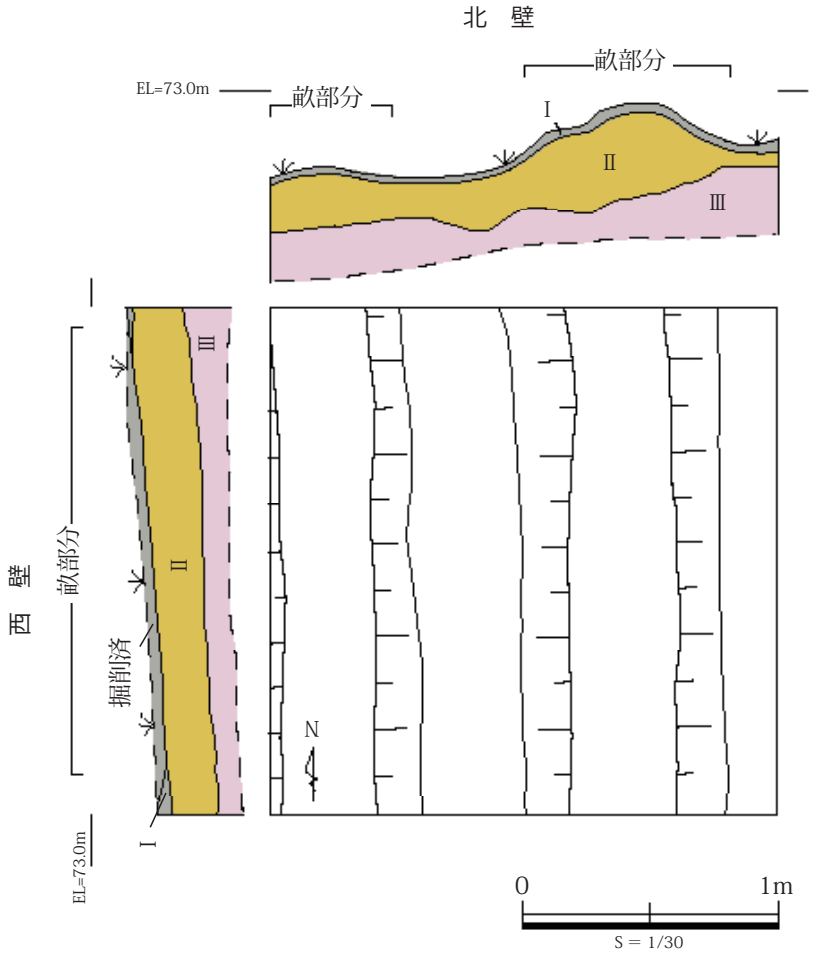
試掘坑の設定のため行った伐採や清掃によってかろうじて確認できた。現在工事中の国道建設により当該地域の尾根筋が分断されており、断面には畝の跡が観察できる。したがって、畑跡は範囲を示したものよりもさらに広範囲となる。



第 12 図　T.P 6 平面及び東壁・南壁



第 13 図　T.P ７平面及び東壁・南壁

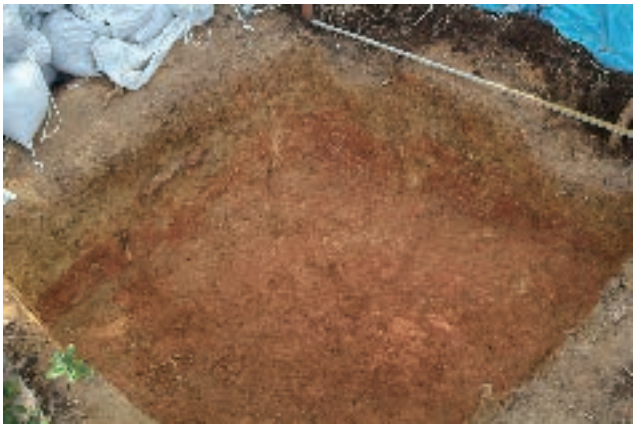


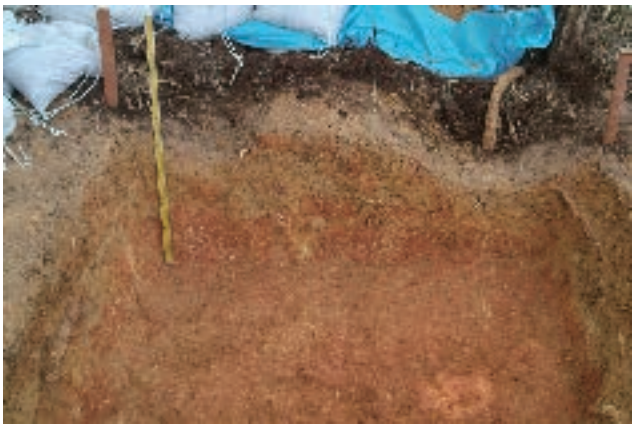
第 14 図　T.P ８平面及び北壁・西壁

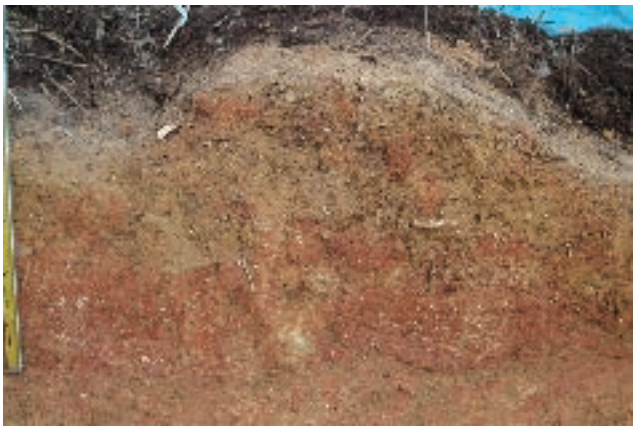
T.P 設定状況

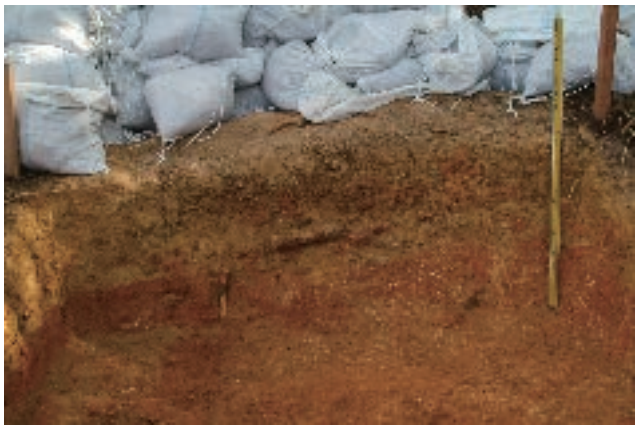
作業風景

畝検出状況


完掘状況


南壁


南壁　畝


東壁

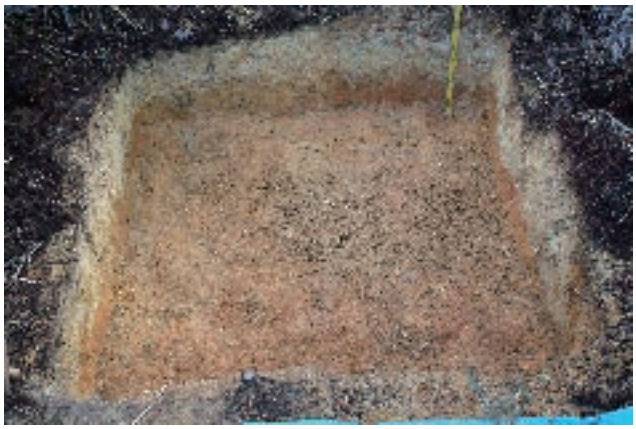
埋め戻し後

図版 15　畑跡（63 地点ー T.P 6）

T.P 設定状況（T.P ７）

作業風景（T.P ７）

畝検出状況（T.P ７）


完掘状況（T.P ７）

東壁（T.P ７）

南壁（T.P ７）

T.P 設定状況（T.P ８）

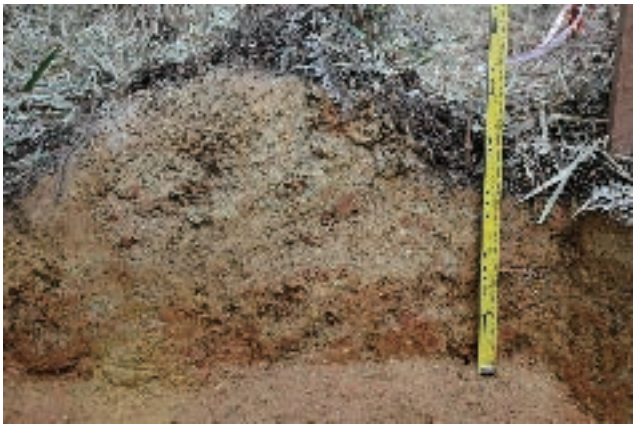
畝検出状況（T.P ８）

図版 16　畑跡（63 地点ー T.P ７～８）

完掘状況（T.P ８）

東壁（T.P ８）

北壁（T.P ８）


北壁　畝（T.P ８）

畝検出風景（T.P ８）

埋め戻し後（T.P ８）

畑跡（63 地点）近景

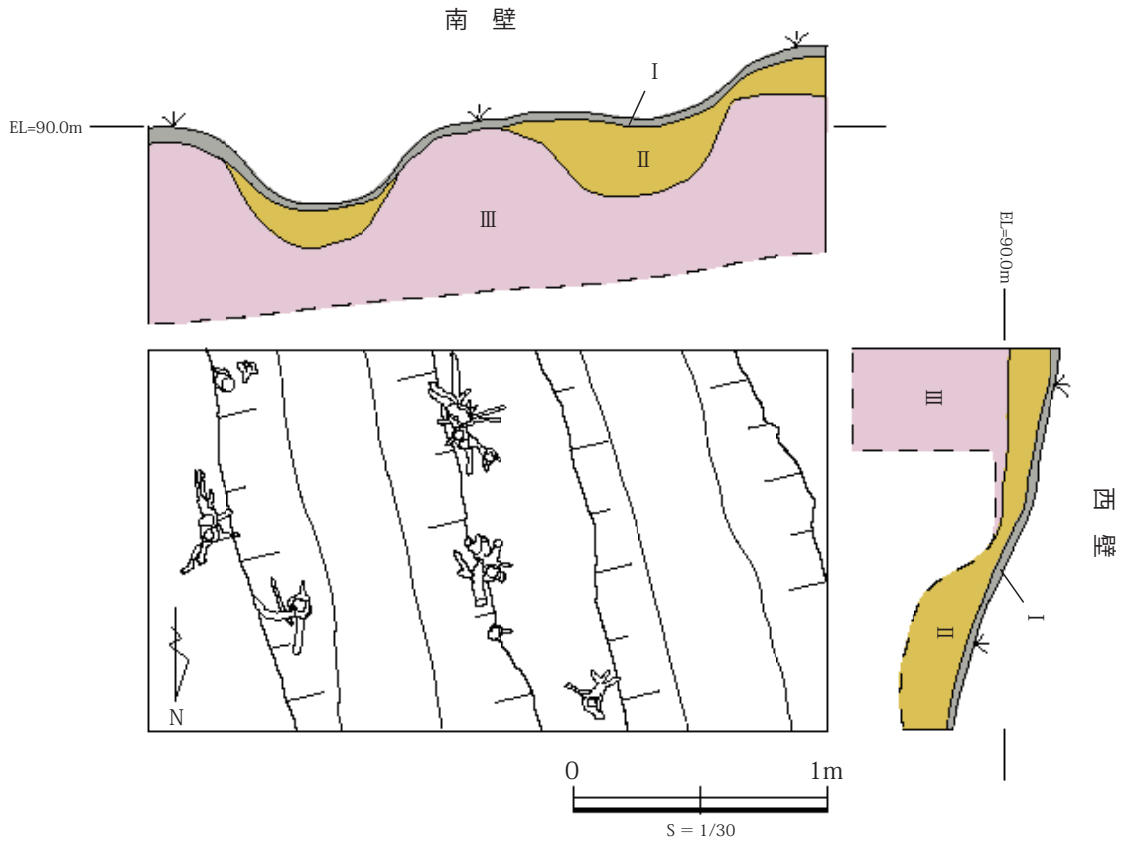
畑跡（63 地点）周辺

図版 17　畑跡（63 地点ー T.P ８）

64 地点

エリア④の AW18 グリット T.P27 で畝を確認した。周辺は比較的太い尾根筋の中央付近に畑が作られており、63 地点と同様、畝が何本もある。畝幅は下部で 1 m 前後、上部で 50cm 前後、高さは 15cm 前後を測り、63 地点と比較して畝がやや高い。畝と畝の間隔は頂部を中心として 1.1 m前後を測る。したがって、形態的特長としては 63 地点と良く似ている。腐葉土が厚く堆積しており、現地表面では確認が難しい。地山を掘り込んで畝を作っている。63 地点と異なり盛土はほとんどしておらず、溝を中心に耕作を行っている。耕作土は良く耕されていると思われ、土の粒子が細かく均質に混ざり合っている。このような堆積状況は 63 地点と異なっている。

畑跡の範囲を確認するため表面踏査を実施したが、周辺は樹木が鬱蒼としているため、詳細な範囲を調べることは困難であった。そのため、範囲を示したものよりもさらに広範囲となる可能性がある。



第 15 図　T.P 27 平面及び南壁・北壁

T.P 設定状況

畑跡（北より）

畑跡（北より）

サブトレンチ（南壁）

サブトレンチ（南壁）

サブトレンチ（南壁）

西壁

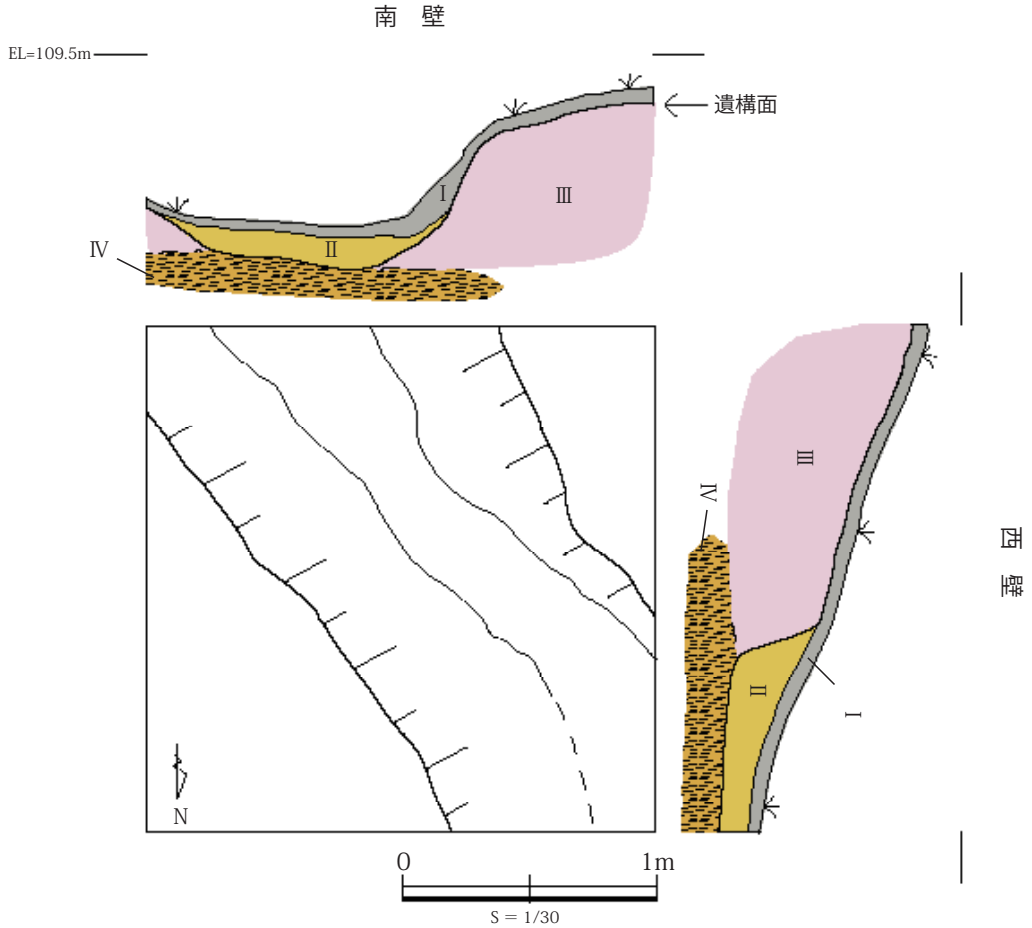
埋め戻し後

図版 18　畑跡（64 地点ー T.P27）

65 地点

エリア⑤の AY25 グリット T.P25 で畝溝を確認した。畑跡は林道のすぐ脇に広がっている。周辺は比較的広い尾根筋となっており、樹木が鬱蒼と茂っている。腐葉土が厚く堆積しており、現地表面では確認が難しい。表面踏査では林道脇にある浅い溝のみが確認されたため成果として記録しなかったが、今回の試掘調査によって畑跡の縁の溝が腐葉土によって埋まらずに残っていたものだということがわかった。周辺の腐葉土を清掃した結果、数本の畝が確認できた。63・64 地点の畝とはやや異なり、畝の幅が広い特徴がある。試掘調査を実施した場所が畝と畝の間の溝を中心としたため、畝の詳細な規模は不明である。地山を掘り込んで畝を作っている。63 地点と異なり盛土はほとんどしておらず、溝を中心に耕作を行っている。耕作土は良く耕されていると思われ、土の粒子が細かく均質に混ざり合っている。この点、耕作土の堆積状況は 64 地点と良く似ている。

畑跡の範囲を確認するため表面踏査を実施したが、周辺は樹木や竹林が鬱蒼としているため、詳細な範囲を調べることは困難であった。そのため、範囲を示したものよりもさらに広範囲となる可能性がある。



第 16 図　T.P 25 平面及び南壁・西壁

T.P 設定状況

作業風景

畝状遺構（北より）

畝状遺構（西より）

西壁

東壁

埋め戻し後

周辺清掃後

図版 19　畑跡（65 地点ー T.P25）

3. 古墓 (42 地点)

平成 16 年度の表面踏査によって、古墓と考えられる横穴（42 地点）が確認された。今回はこの遺構の性格や範囲を確認するための試掘・範囲確認調査（T.P43･44）を実施した。以下に詳細を述べる。

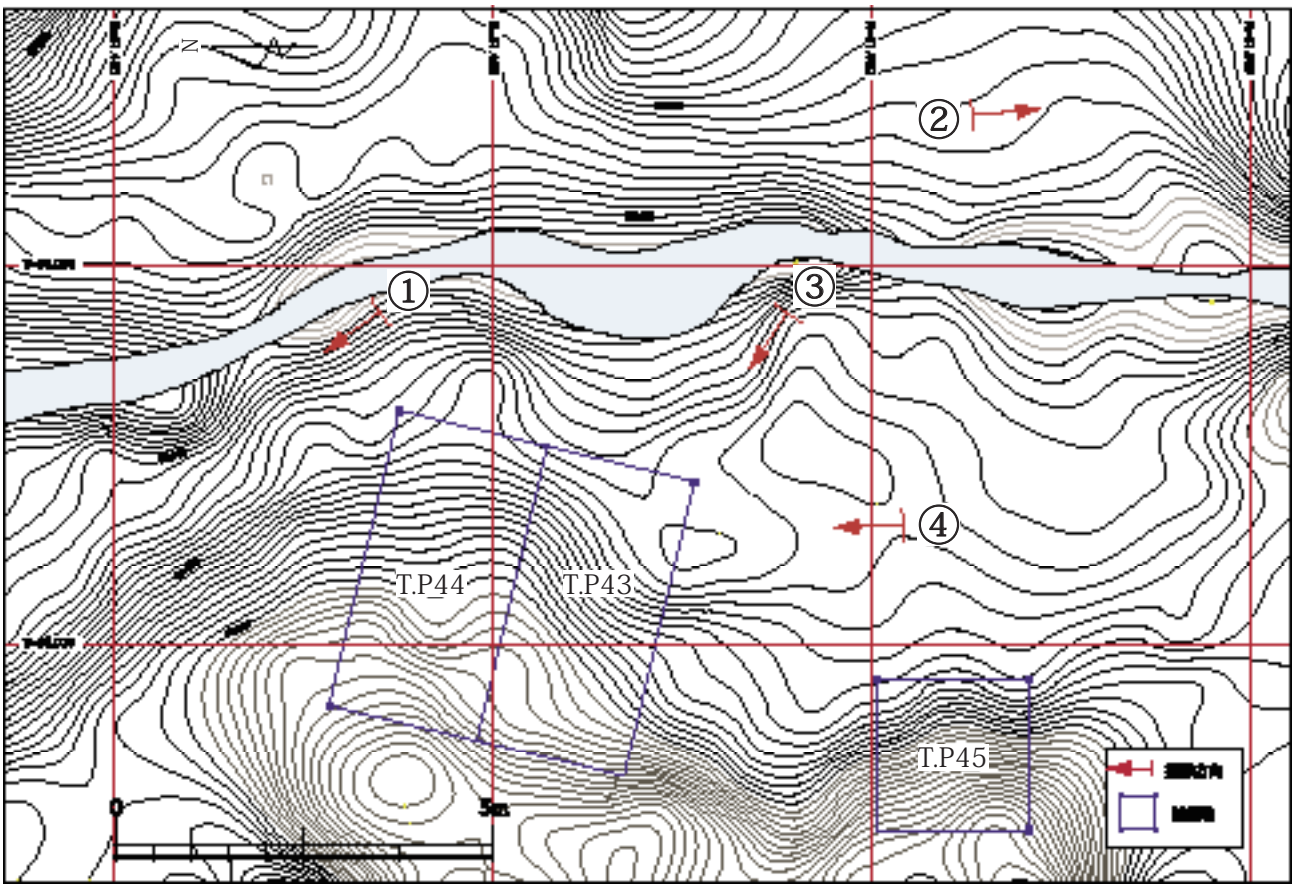
i　調査地付近の環境

調査地は恩納村谷茶集落後背の山奥、沢沿いに位置する。付近一帯は元グランドパークの跡地であり、廃屋や駐車場、池などが敷地内に点在する。調査地付近は元グランドパークの遊歩道であり、沢沿いに遊歩道が築かれ、丸太橋なども架かっている（図版 20）。沢を流れる小川は調査地の側を北西へと進み、元グランドパークの池へと流れている。グランドパークが開園している間は、比較的多くの人がこの遊歩道を利用していたと思われ、付近には昭和 40 ～ 50 年代のものと考えられる瓶や袋などの廃棄物が散在している。閉園後は、この付近の人の出入りはほとんどなかったと考えられる。調査地付近の標高は海抜 56m 程で、グリット東側の小川が約 54.5m、西側の急斜面が頂部で約 75m 程となっている。

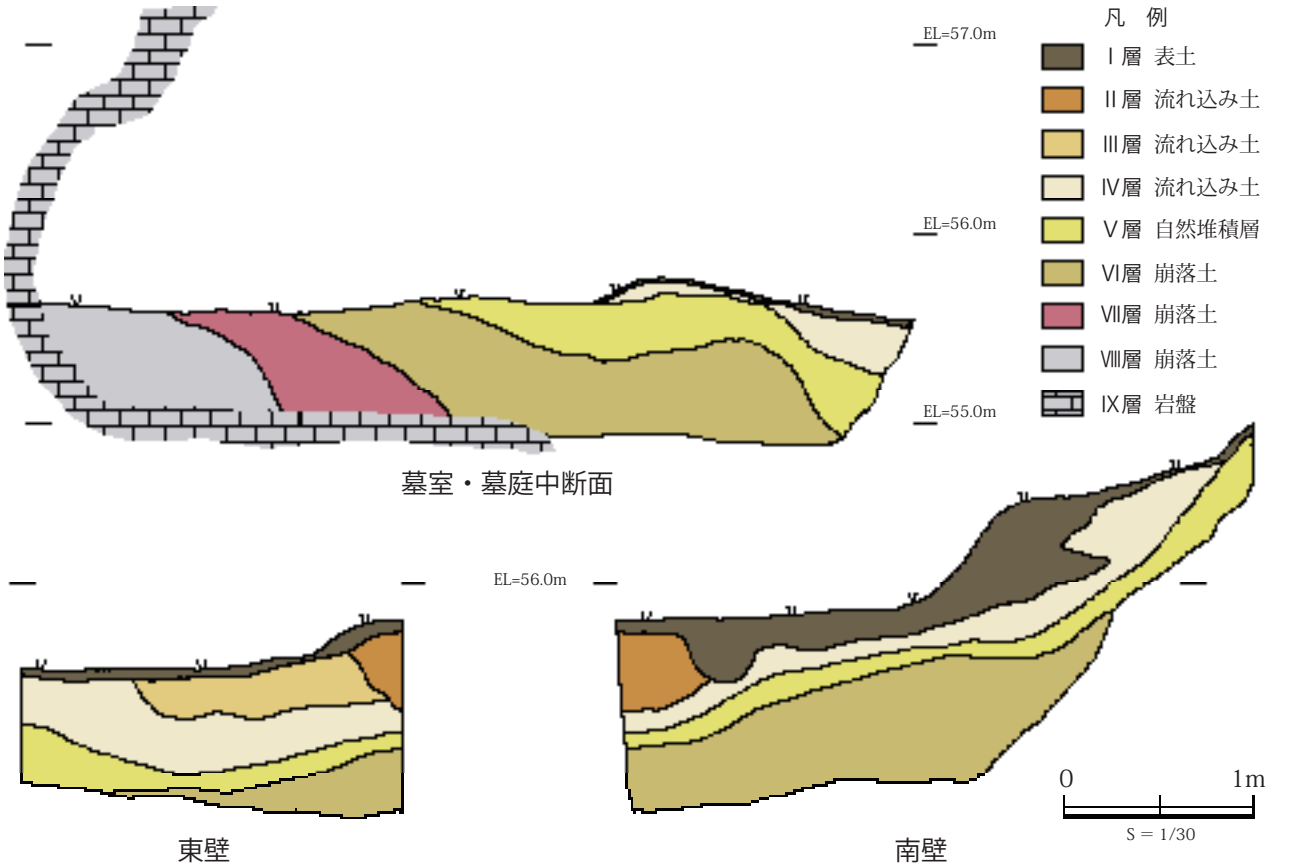
①調査地付近の様子

②調査地付近の様子

図版 20　古墓付近の地形（42 地点ー T.P43・44）



第 17 図　古墓付近の地形（42 地点ー T.P43・44）



第 18 図　墓室・墓庭縦断面及び東壁・南壁（42 地点ー T.P43・44）

墓室内層序

墓室内層序

東壁

南壁

図版 21　墓室内の様子

【層序】

観察層はグリットの南側、東側、墓室半裁時の断面の３つとした。観察の結果、層序は自然堆積である黒褐色及び褐色土層（Ⅰ層とⅤ層）と最下の灰色シルト質層（Ⅸ層）を除き、ほとんどが斜面上方部からの崩落土や墓室内天井の崩落土であると考えられる。以下に詳細を述べる。（第 18 図、図版 21）

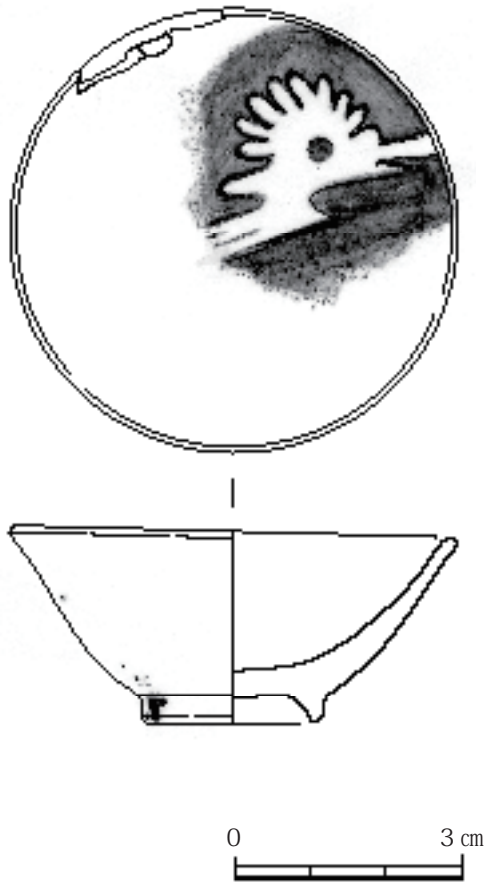
Ⅰ層：表土層。黒褐色、腐葉土の自然堆積。現代のゴミなども混じる。
Ⅱ層：橙色土。東壁・南壁角に見られる。
Ⅲ層：黄褐色土層。東壁部のみに見られる。上方からの流れ込み土と考えられる。
Ⅳ層：明黄褐色土層。上方からの流れ込み土。３つの観察層全てに見られる。
Ⅴ層：褐色土層。細かい石や砂を多く含む。樹木痕が多い。腐葉土等の自然堆積層だと考えられる。
Ⅵ層：黄褐色土層。細かい砂や土を多く含む。後述するＵ字状石積はこの層に埋没する。上方からの流れ込み土だと考えられる。３つの観察層全てに見られ、空き缶などの廃棄物も混じる。
Ⅶ層：明赤褐色土層。細かい石や砂を多く含む。分布は墓室内に限定されていることから、墓室天井からの崩落土または、上方から少量流れ込んだものと考えられる。
Ⅷ層：灰色層。墓室が掘り込まれている岩盤部と同じ質を持つ。分布は墓室内に限られることから、墓室天井からの崩落土だと考えられる。
Ⅸ層：灰色シルト質層。基盤のシルト質層だと考えられる。墓庭部床面及び墓室内床面の層。墓庭部に関しては、水が染み出す。

ⅱ　遺物

遺物は第 19 図・図版 22 に示す小杯 1 点のみが出土した。寸法は口径 5.8cm、器高 2.6cm、底径 2.4cm を測る。ほぼ前面に透明釉が施され、畳付部のみ露胎する。素地土は白色で精選されている。上絵付けにより青色の模様が施されるが、外面部はほとんど剥げ落ち、内面部には菊花文が残る。本土産磁器と考えられ、生産年代は明治以降から戦後あたりまでが考えられ、近現代の所産と考えられる。当遺構の築造年代を示す可能性のある唯一の遺物である。

出土層位はⅥ層、出土場所は第 20 図に示した場所で、座標値は X=51403.110、Y=33078.499、Z=55.015 となる。U 字状に拡がる石遺構の下部から出土した。前庭部床面を掘り込み埋納した可能性を考え、出土地付近の床面を精査したが、床を掘り込んだ形跡は見られなかった。

図版 22　染付小杯



第 19 図　染付小杯

第 20 図　墓室平面及び pit 断面

iii　遺構

遺構は岩盤を掘り込んだ部屋と内部の pit 群、床面整形時のものと考えられる加工痕、その前庭部に積まれた石積、墓室の左脇に積まれた石積み、前庭部北側に築かれた石積みから構成される。

部屋は奥行きが約 2.4m、幅が最大部で約 2m、面積は約 3.5 ㎡程の規模を持つ。天井までの高さは崩落面から考えると 70cm 程で、部屋の総体積は 2.45 ㎥程になる。かなり天井が低く、人間が内部で活動できるものではない。部屋床面には 4 箇所に柱穴が掘り込まれ、平面プランは四角形状を成す。pit の深度は全て 20 ㎝程で、平面観は楕円形状をなす（第 20 図、図版 24）。機能としては柱穴が考えられ、天井板を支える柱が想定されたが、pit 内の埋土は全て上方からの崩落土で、埋土中からは遺物や木片など、pit の機能を示唆するものは検出されなかった。部屋入り口には床面整形時の鑿痕と考えられる溝が墓口から奥に向けて 4 本見られる（第 20 図、図版 24）。

部屋左袖の石積み（石積み 1、第 20 図、図版 24）は崩落しかかっており、積み上げ方法はかなり乱雑で洗練されているものだとは言い難い。前庭部北側にも同様に石積みが見られるが（石積み 2 、第 20 図、図版 24）、石積み 1 同様、積み上げ方法は乱雑な印象を受ける。前庭部には U 字状に石の配列が見られる（第 20 図）。もともとは石積み状に構築されていたと考えられるが、上方からの崩落土を幾度か受け、崩落した石もあると見られる。平面観では U 字状に配列されているのが確認できる。この U 字状石積み直下から小杯が出土した。この石積みの周りにも多くの石が散乱している。

iv　まとめ

当遺構は墓室に相当する部屋、墓庭に相当する前庭部を持ち、形態的には近世墓に近似しているが、墓室に 4 箇所の柱穴を持つことや、50 ～ 70 ㎝程度の器高を持つ蔵骨器を収納するのには低すぎる天井高、一般的には何も構築されるはずのない墓庭部に構築された U 字状の石積み等、墓としては否定的な特徴も有しており、遺構だけで見ると、墓と結論づけるのが躊躇される。この他にも戦時中の避難壕や、ハンセン病患者の隔離場所等が想定されたが、その想定を肯定できるような物証に乏しい。谷茶集落住民にも聞き取り調査をおこなってみたが、前述の想定を補強しうるような証言は得られなかった。ただ、唯一の出土遺物である小杯が、主に墓等でしばしば見られる特徴的な遺物であることや、墓口の延長線上からの出土など、沖縄の近世墓にしばしば見られる特定場所への埋納行為を想起させることから、現時点では、当遺構は近世墓と考えるのがもっとも妥当であると考えられる。類似の遺構の検出例の増加を待って再検討するべきだろう。また、何らかの祭祀な意味を持つ遺構とも考えられる。

遺構の年代は崩落土中の現代遺物や、小杯の生産年代の新しさなどから、近代からグランドパーク廃業までの、明治から昭和 40 年代あたりにかけてとしておきたい。

③試掘前現況

④埋め戻し後

図版 23　調査前と調査後

⑤墓室左袖石積み

⑥墓室右袖石積み

⑦ T.P43・44 完掘状況

⑧ T.P43・44 完掘状況

墓室内　pit 1

墓室内　pit 2及び鑿跡

墓室内　pit 3

墓室内　pit 4

図版 24　墓室

４.成果一覧

Ｃ地区の調査によって得られた成果の概要を第２、３表に記す。

第２表　Ｃ地区表面踏査成果一覧

地点名	グリッド	遺構名	立　地	測点	X 座標	Y 座標	Z 座標	備　考
63 地点	AW 8 AW 9 AV 8 AV 9	畑　跡	尾根上平坦部	1	51143.280	32528.269	-	T.P ６～８
				2	51147.840	32531.475	-	
				3	51149.358	32544.683	-	
				4	51144.989	32558.814	-	
				5	51140.491	32568.261	-	
				6	51130.514	32576.000	-	
				7	51100.596	32572.908	-	
				8	51092.302	32570.948	-	
				9	51088.024	32561.135	-	
				10	51089.629	32548.180	-	
				11	51098.655	32533.498	-	
				12	51112.658	32533.072	-	
				13	51119.525	32533.032	-	
				14	51132.765	32528.876	-	
64 地点	AW18 AW17 AX18	畑　跡	尾根上平坦部	1	51119.676	32928.581	-	T.P27
				2	51116.235	32934.533	-	
				3	51105.649	32941.670	-	
				4	51083.884	32948.678	-	
				5	51075.440	32949.047	-	
				6	51070.369	32945.254	-	
				7	51070.879	32938.526	-	
				8	51077.356	32931.151	-	
				9	51091.667	32918.913	-	
				10	51103.202	32917.005	-	
				11	51118.024	32920.610	-	
				12	51119.209	32924.334	-	
65 地点	AW24 AW25 AX24 AX25 AX26 AY26	畑　跡	尾根上平坦部	1	51080.971	33169.918	-	T.P28
				2	51084.115	33171.542	-	
				3	51089.594	33183.900	-	
				4	51089.583	33191.142	-	
				5	51090.075	33193.989	-	
				6	51089.869	33199.291	-	
				7	51086.839	33207.799	-	
				8	51081.227	33219.616	-	
				9	51075.371	33229.333	-	
				10	51068.066	33238.710	-	
				11	51056.642	33247.968	-	
				12	51044.573	33255.503	-	
				13	51031.542	33264.479	-	
				14	51024.205	33268.235	-	
				15	51019.407	33267.713	-	
				16	51018.760	33264.186	-	
				17	51024.152	33257.977	-	
				18	51031.714	33250.898	-	
				19	51042.226	33241.275	-	
				20	51055.884	33233.699	-	
				21	51066.765	33223.081	-	
				22	51073.640	33212.248	-	
				23	51077.558	33201.290	-	
				24	51078.576	33190.609	-	
				25	51077.623	33179.756	-	
				26	51078.738	33171.854	-	
				27	51079.395	33170.889	-	

第３表　Ｃ地区試掘調査成果一覧

エリア	T.P	グリッド	立 地	標高	試掘坑の規模			面積	基本層序Ｃ				座　標	備　考
					南北	東西	深度		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		

第３表　C 地区試掘調査成果一覧

①	22	BE2	尾根上	63.5m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○		X Y	50773.050 32308.321	50773.050 32310.321	50771.050 32308.321	50771.050 32310.321	
	23	BE3		63.5m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○		X Y	50772.840 32320.556	50772.840 32322.556	50770.840 32320.556	50770.840 32322.556	
	24	BE3		63.5m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50773.926 32332.092	50773.926 32334.092	50771.926 32332.092	50771.926 32334.092	
	61	BD2 BE2		47 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50800.326 32309.072	50800.326 32311.072	50798.326 32309.072	50798.326 32311.072	
	62	BG5		63.5m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50705.993 32435.407	50705.993 32437.407	50703.993 32435.407	50703.993 32437.407	
②	1	BC10		90 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○			○	X Y	50866.272 32605.555	50866.272 32607.555	50864.272 32605.555	50864.272 32607.555	
	2	BB9 BB10		89 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50909.526 32599.819	50909.526 32601.819	50907.526 32599.819	50907.526 32601.819	
	3	BB10		90 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○		○		X Y	50913.038 32622.167	50913.038 32624.167	50911.038 32622.167	50911.038 32624.167	
	4	BB9		88 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50915.999 32583.195	50915.999 32585.195	50913.999 32583.195	50913.999 32585.195	
	5	BA8		82 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50953.651 32520.010	50953.651 32522.010	50951.651 32520.010	50951.651 32522.010	
	6	AW8		75 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○	○	○		X Y	51111.005 32536.494	51111.005 32538.494	51109.005 32536.494	51109.005 32538.494	畑　跡 （63 地点）
	7	AW8		76 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○	○	○		X Y	51108.104 32548.490	51108.104 32550.490	51106.104 32548.490	51106.104 32550.490	
	8	AW8		73 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○	○	○		X Y	51092.180 32549.408	51092.180 32551.408	51090.180 32549.408	51090.180 32551.408	
	68	BA6		81 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○			○	X Y	50932.476 32446.021	50932.476 32448.021	50930.476 32446.021	50930.476 32448.021	
	69	BD9		81 m	2 m	2 m	0 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50829.423 32589.901	50829.423 32591.901	50827.423 32589.901	50827.423 32591.901	
	70	BD6		69 m	2 m	2 m	1 m	4 ㎡	○		○	○	X Y	50824.256 33470.203	50824.256 33472.203	50822.256 33470.203	50822.256 33472.203	

※標高は 50cm 単位で最も近い場所
※掘削深度は最大の深さ
※大きさは最大の長さ

第２節　Ａ地区（海側）

Ａ地区は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地の海側開発検討ゾーン内に設定した。旧白雲荘周辺に位置し、発達したリーフと東シナ海に面する海岸部と千枚岸の急な斜面を持つ標高 10m ～ 20 mの台地部からなる。既存施設によって周辺の地形はかなり改変されており、一部の場所を除いて旧地形は削平又は造成されている。平成 16 年度は当該地区において約 4.2ha の表面踏査を実施した。その際は明確な遺構等は確認できなかった。

今回はＡ地区内において 15 箇所の試掘調査と補足的な表面踏査を、さらにＡ地区の範囲外においても表面踏査を実施した。その結果、歴史の道と考えられる古道 (71 地点)、猪垣２本 (66・67 地点)、落とし穴３基（68 ～ 70 地点）、石積（73 地点）、古墓（74 地点）が確認された。

調査別による詳細では、試掘調査によって歴史の道と考えられる古道（71 地点）が、表面踏査では猪垣１本（66 地点）及び遺物散布地（72 地点）が確認された。さらに、Ａ地区の範囲外において、猪垣１本（67 地点）、落とし穴（68 ～ 70 地点）、石積（73 地点）、古墓（74 地点）が確認された。

当該地域は沖縄海岸国定公園に指定されており土地の改変を行う場合は、自然保護法第 13 条第３項の規定に基づき「特別地域内土地の形状変更許可申請書」を提出する必要があった。また、試掘坑の設定を計画したいくつかの場所には注意すべき植生がいたため現地で専門家の立会いのもと、伐採によって注意すべき植生を損傷しない場所に試掘坑を設定した。

以下に試掘坑の成果と概要を、さらに新しく確認された各地点ごとの遺構について述べる。

１. 試掘坑の位置と概要

試掘調査は 15 箇所実施し、試掘坑は２m × ２m を基本として設定したが、歴史の道と考えられる古道が確認されたため、いくつかの試掘坑ではさらに拡張して調査を実施した。調査にあたっては、立地条件によって２つのエリアに分割し、Ｃ地区の続きとして台地上を⑥エリア、海岸沿いを⑦エリアとした。Ｃ地区のエリア①～⑤と異なり、エリア⑥・⑦は既存施設の建設等によって造成土を含み、エリア⑦ではさらに海岸砂層が含まれる。

エリア⑥は標高 15m ～８m 程の台地上である。試掘調査は６箇所（T.P46･47･52･55･57･58）実施した。旧表土等が確認されず、造成土の下はすぐに地山や岩盤となっていた。試掘調査では遺物包含層や遺構等は確認できなかったが、表面踏査によって猪垣（66・67 地点）、落とし穴（68 ～ 70 地点）、が確認された。基本層序を統一したため、以下にその概要を記す。Ｃ地区における基本層序とは表記は同じでも II 層の内容が異なる。

【基本層序Ａ】

Ⅰ　層：表土。概ね黒褐色。調査区全体に堆積している。周辺が山林のため落葉や植物が密集して生息しており、腐植土層となっている。

II 層：造成土。既存施設の建設や廃棄により土地が改変されている。建設による盛土の際は周辺の旧表土や地山を利用したようで、比較的ゴミ等の混ざりものが少ない。付随施設が廃棄された場所はさらに埋め立ており、ブロックやゴミ等を多量に含む。

III 層：地山。概ね黄褐色、赤褐色、乳白色を呈しており、これらの色がマーブル状に堆積し、土質も異なる。石英微粒子を多量に含む場所やほとんど含まない場所がある。全体的に堆積している訳ではなく、場所によっては表土の直下がすぐに岩盤となる場所もある。

IV 層：岩盤。石質が比較的柔らかく、スコップで掘ることも可能である。

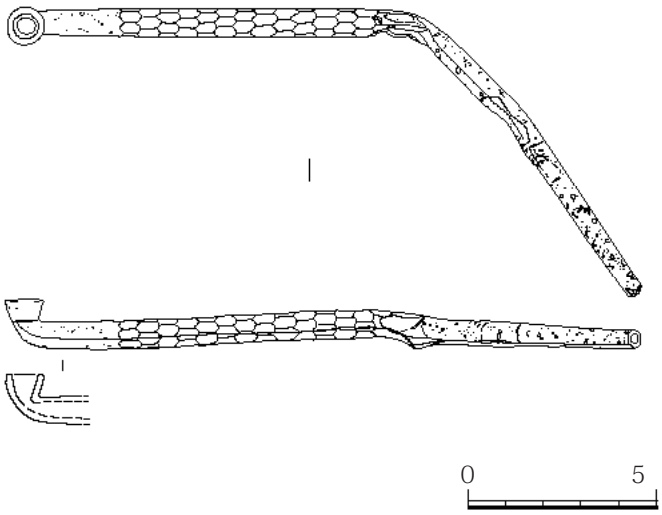
エリア⑦は標高４m～５m程の海岸沿いであり、一部の場所を除き護岸工事等既存施設の建設によって土地が改変されている。海岸の砂丘は薄く千枚岩がいたる所に露胎している。海岸の幅は狭く後背には千枚岸からなる急な斜面の岩盤があり、台地へと続いている。試掘調査は９箇所（T.P48 ～ 51・53・54・56・59・60）実施した。調査の結果、T.P48・59・60 において、歴史の道と考えられる古道（71 地点）が確認され、T.P49 ～ 51・53・54 において、歴史の道に関係すると思われる堆積土が確認された。当初２m × ２m の試掘坑を設定して調査を実施したが、歴史の道の確認により試掘坑の拡張が必要となり、再度「土地の

形状変更許可申請書」を提出した。エリア⑥の台地上と異なり海岸砂層や斜面からの流れ込みによる堆積層を含む。このため、T.P51・56 を除くエリア⑦においては層序の統一はしなかった。また、当該エリアは補足的な表面踏査によって、遺物散布地（72 地点）、古墓（73 地点）、石積（74 地点）が確認された。

当該地域は造成土が厚く堆積していたため、手堀による調査では限界があり、バックホウを併用して実施した。T.P56 については、既存施設の廃棄によって基礎等がそのまま埋まっており、バックホウを使っても掘削することが困難だったため、途中で調査を断念した。第 23・24 図は各エリアの地形と試掘調査及表面踏査の成果の概略を示したものである。柱状図は実測図における縦横の比率を３：１に変換してあるため、傾斜の表現等がかなり誇張されている。

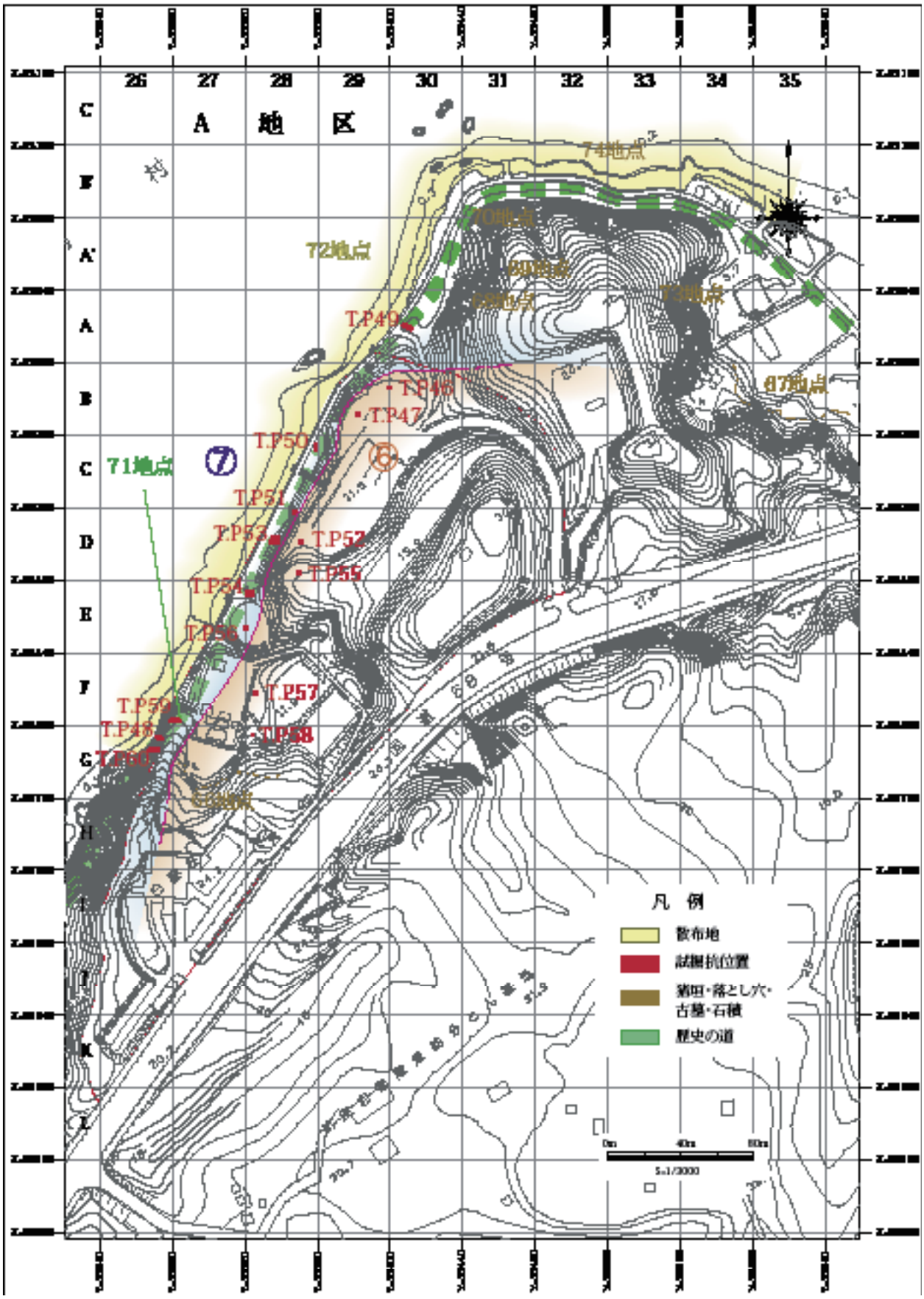
T.P51 出土遺物

第 21 図・図版 25 は T.P51 の試掘調査によって造成土から出土した青銅製の延べ煙管である。ラウは本来直線的だったものだが、スコップによる掘削の結果、ちょうど中心に当たってしまい曲がってしまった。ラウの雁首側半分が米粒大の楕円形に細かく規則的に面取りされており、装飾的な作りである。吸口側半分は吸い口に近づくにつれて径がシャープに小さくなっていく。完形品。
計測：長さ約 20cm、火皿 1 cm、立ち上がり 1.3cm、吸口部径 0.5cm、重量 22.6 g

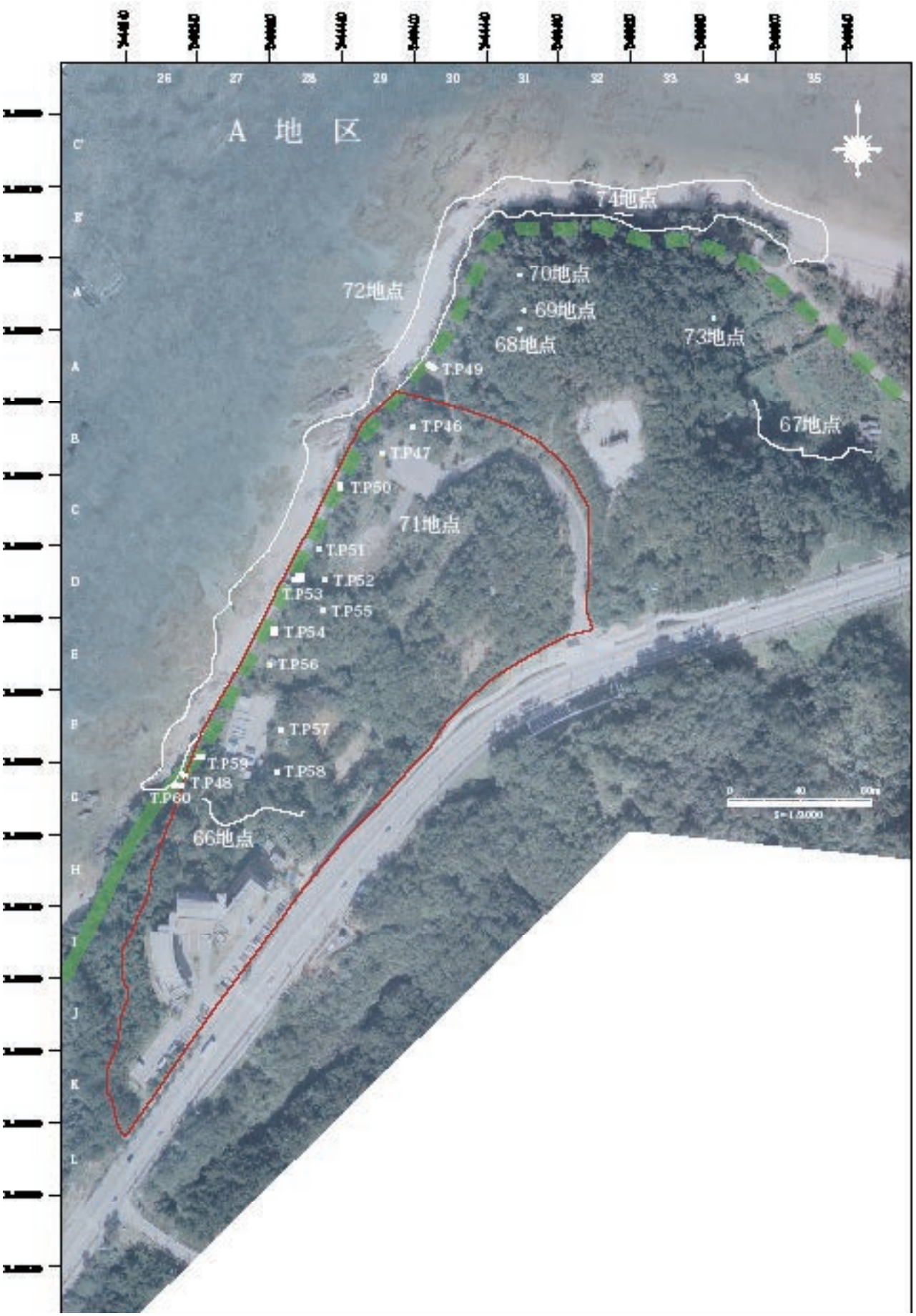


第 21 図　延べ煙管

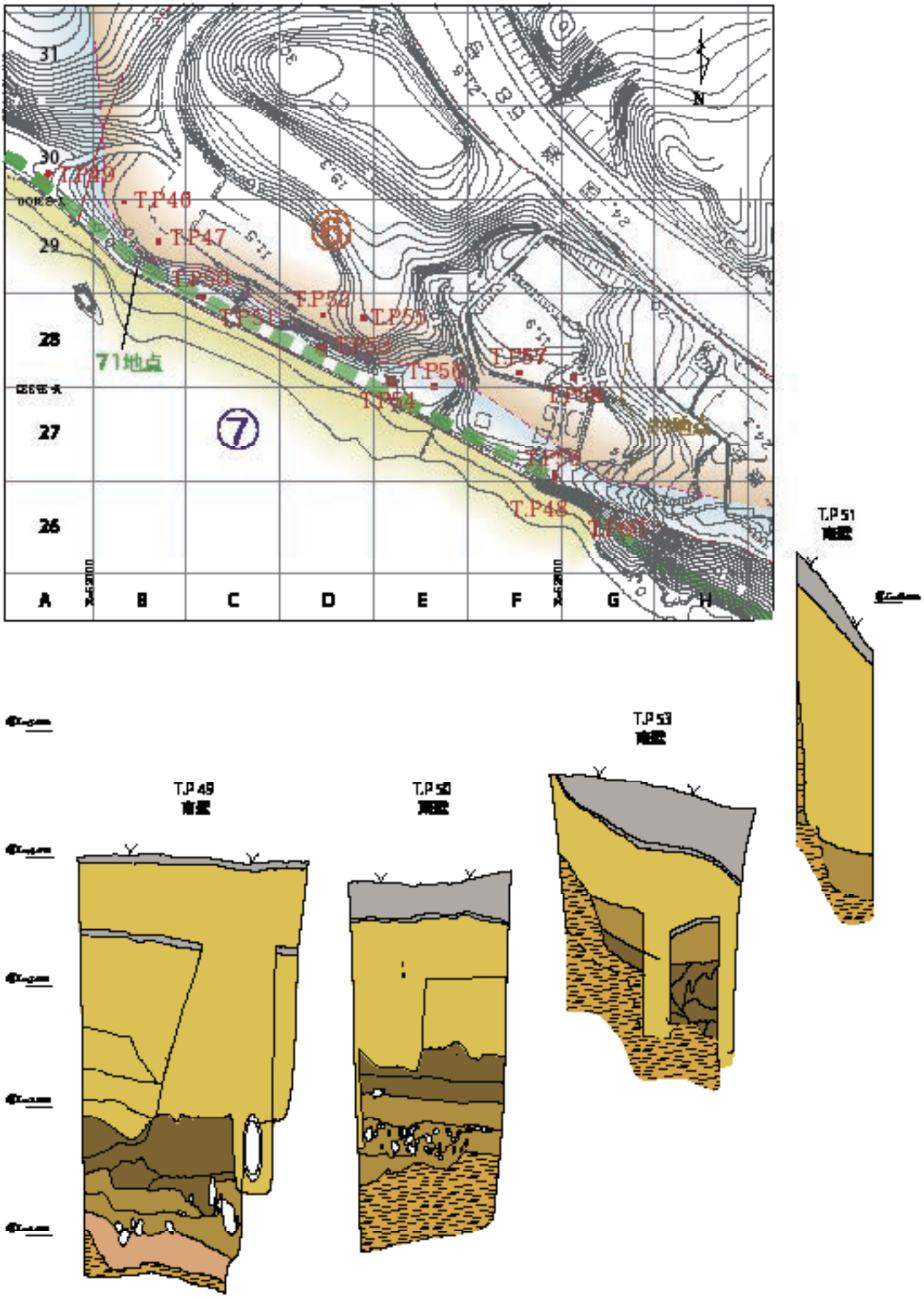
図版 25　延べ煙管



第 22 図　A 地区試掘坑の位置と成果概略

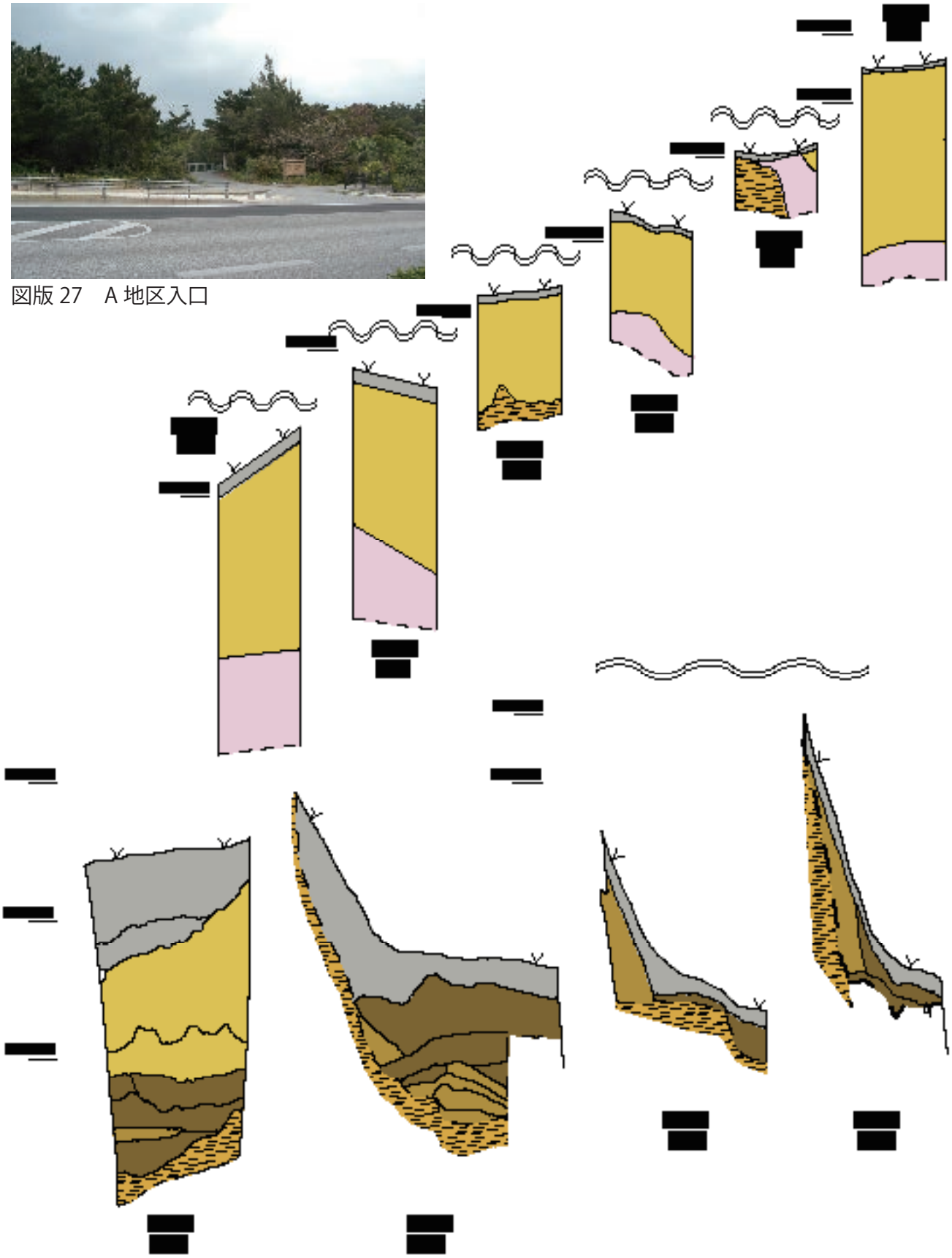


図版 26　A 地区試掘坑の位置と成果概略



第 23 図　エリア⑥・⑦土層

図版 27　A 地区入口



2. 猪垣（66・67 地点）

猪垣は A 地区の範囲内において 1 本（66 地点）及び範囲外において 1 本（67 地点）の計 2 本確認された。前回の表面踏査では B 地区において 1 本の長大な猪垣が確認された。全長 820m に及ぶもので海沿いの沖積地の半分を尾根沿いに囲むように築かれている。切り土を行って溝を作り、さらに、掘り出した土を外側に積み上げて土塁を作るもので、土塁の頂部には所々にテーブルサンゴを軒状に配置する。今回確認された猪垣もこれと良く似た作りである。ただし、B 地区で確認された猪垣沿いには落とし穴が伴っているが、今回確認された猪垣沿いではそれが確認できなかった。沖縄本島の猪垣は連続延長した長城型に構築する（矢ヶ崎 1992・1993）とされているが、A 地区及びその周辺は既存施設の建設によって旧地形が著しく改変されており、2 本の猪垣は本来もっと長いものであったと思われ、それに伴う落とし穴もあった可能性はある。しかしながら B 地区で確認された猪垣と比較して小規模なものである。猪垣は大宜味村教育委員会によって村内の調査がされており（大宜味村教育委員会 1994）、多くの共通点を見出すことができる。

66 地点

旧白雲荘近くの G27・G28 グリットにかけて確認された猪垣である。全長は約 60.74m、海岸から台地に至る斜面沿いに平行に築かれている。両端部ともに土地改変によって削平されており、本来はもっと長かったと思われる。前回の表面踏査による B 地区の成果では、低湿地部と尾根の裾部沿い（32 地点）や尾根筋沿い（37 地点）、尾根から沢に向かって下るように（62 地点）に築かれてる立地であった。しかし、本遺構は台地から海岸へ向かう斜面中位程の場所に等高線に沿うように築かれており、初めての事例である。土を掘り込んで溝を作り、その土をすぐ脇の斜面海側に盛って土塁を作っている。溝は幅約 1.3m、深さ約 0.8m を測り、土塁は幅約 1.2m、高さ 0.6m を測る。猪垣の頂部には所々にテーブルサンゴが軒状に配置されている。

聞取調査による情報では猪垣下方の海岸沿いの低地には小さな畑があったという。

猪垣（66 地点）

猪垣（66 地点）

猪垣（66 地点）

猪垣（66 地点）遠景

図版 28　猪垣（66 地点）

猪垣（66 地点）清掃前

猪垣（66 地点）表面清掃

図版 29　猪垣（66 地点）

67 地点

A 地区範囲外の B34 ～ B36 グリットにかけて確認された猪垣である。全長は約 91.33m、海岸沿いの低地から台地へ至る斜面の裾部に、低地と台地を区画するように築かれている。斜面裾部を垂直に切り土して壁を造っており、頂部は所々にテーブルサンゴを軒状に配置している。猪垣の壁は高いところでは約 2 m もあり、人間でも容易に登ることはできない。畑に下りてきた猪を山に帰さないことを目的として築かれたものと思われる。前回の表面踏査による B 地区の成果では、低湿地部と尾根の境界沿い（32 地点）に築かれるものが確認されており、同様の立地となっている。B 地区で確認された猪垣と比較するとテーブルサンゴがかなり少ない。

周辺は墓域となっているが、聞取調査による情報では猪垣の近くには小さな畑があったという。

猪垣（67 地点）

猪垣（67 地点）

猪垣（67 地点）

図版 30　猪垣（67 地点）

３. 落とし穴（68 ～ 70 地点）

落とし穴は A 地区の範囲外で３箇所（68 ～ 70 地点）確認された。３箇所とも近い位置に並ぶように作られている。形態は楕円形を呈するもの（68 地点）と円形を呈するもの（69・70 地点）がある。前回の B 地区における表面踏査の成果では、ほとんどの落とし穴が猪垣沿いで確認され、形態も円形を呈するもののみだったが、今回 A 地区周辺で確認されたものは猪垣に伴っておらず、形態も楕円形を呈するものが確認された点で立地や形態が異なる。

大宜味村教育委員会における猪垣調査（大宜味村教育委員会 1994）や沖縄市嘉手納弾薬庫内における調査（比嘉 2004）でも落とし穴（シシ穴）の報告例がある。

68 地点

A 地区範囲外の A’ 31 グリッドで確認された落とし穴である。台地の斜面地に掘られている。穴口の規模は長径約 1.2m、短径約 0.7m の楕円形を呈する。現況の深さは約 0.8m で、円筒状にほぼ垂直に掘り込まれている。穴底には多量の腐葉土が堆積しており、本来の深さは判断できない。

沖縄市の調査 (比嘉 2004) によって楕円形を呈するものが報告されているが深さが浅いとされており、本事例とはやや異なる。

69 地点

A 地区範囲外の A’ 31 グリッドで確認された落とし穴である。台地の斜面地に掘られている。穴口の規模は直径約 1.1m の円形を呈する。現況の深さは約 0.5m で、円筒状にほぼ垂直に掘り込まれている。穴底には多量の腐葉土が堆積しており、本来の深さは判断できない。

70 地点

A 地区範囲外の A’ 31 グリッドで確認された落とし穴である。台地の斜面地に掘られている。穴口の規模は直径約 1.2m の円形を呈する。現況の深さは約 0.7m で、円筒状にほぼ垂直に掘り込まれている。穴底には多量の腐葉土が堆積しており、本来の深さは判断できない。

調査風景（69 地点）

落とし穴（68 地点）

落とし穴（69 地点）

落とし穴（70 地点）

図版 31　落とし穴（68 ～ 70 地点）

４. 歴史の道（71 地点）

ⅰ　遺構の位置と歴史の道

旧白雲荘地域に海岸沿いに位置する歴史の道を今回確認することができた。恩納村を通る歴史の道は、国頭方西海道として知られている。歴史の道自体は、永楽年間尚巴志王の頃にはすでに道路制などがしかれていたということであり、この時代にはグスクとグスクをつなぐ道という要素とグスクと集落をつなぐ道という要素、グスクとの立地状況から道を利用する外敵から進行を阻むという要素を含んでいる。そして「15 世紀後半以降の第二尚氏時代には、奄美や八重山の征服に伴って、海上を含む「すべての道」が「首里に通ずる」ことになったと言われている。」という。（恩納村教育委員会 1995）

ⅱ　各試掘場所の詳細

A 地区 G26 グリッド T.P48、T.P60、F27 グリッド T.P59 で恩納村の歴史の道の遺構を確認した。状況証拠から歴史の道に関係すると思われる堆積層が E28 ～ A30 グリッド T.P50、T.P53、T.P54、T.P49 で確認できた。A 地区の主な立地は、海岸沿いで砂浜より一段高い位置（標高約 3.5m）で地形に沿って造られている。谷茶集落前の海岸沿いに南北に向かって道が続いており、傾斜地を削平して平坦面を形成している。波の浸食を受けており、残存する道幅は、3.0m ほどである。構造が T.P ごとに相違点が見られる。基盤である千枚岩と地山を削平して道としたり、自然堆積に盛土をして道の平坦面を造るものなど様々である。また、盛土が様々な土を使用していること、旧白雲荘の時期に撹乱されていること等の要因で発掘調査は困難を極めた。以下、歴史の道を南から北に向けて地点ごとの詳細を述べる。

ⅲ　様々な構造を持つ歴史の道

T.P60（第 24 図・図版 32）

海岸砂丘より 1 段高い赤土土壌に位置し周辺はアダンが茂る。発掘前から斜面地を削平して道としている状況が確認できた。道として確認できた構造は、岩盤と地山を削平して道の端部に石灰岩の切石を列にして並べ、内部に直径 15cm ほどの礫（石灰岩や珊瑚石）を敷き詰めるという構造である。海岸沿いには千枚岩しかないことから、持ち込んだ石灰岩と珊瑚等を使用して造られている。石灰岩でできた石畳道の上に堆積層が 3 層確認できた。それは I ～ III 層で I 層は現代の表土で針金、ガラスなどが確認でき、II 層は石畳の上に覆うように確認され、瓦、砥部焼（スンカンマカイ）や白磁片が出土している。III 層は、斜面地よりの崩落土である。石畳道を確認した段階で調査を終了したため下層の堆積状況は不明である。

【層序】

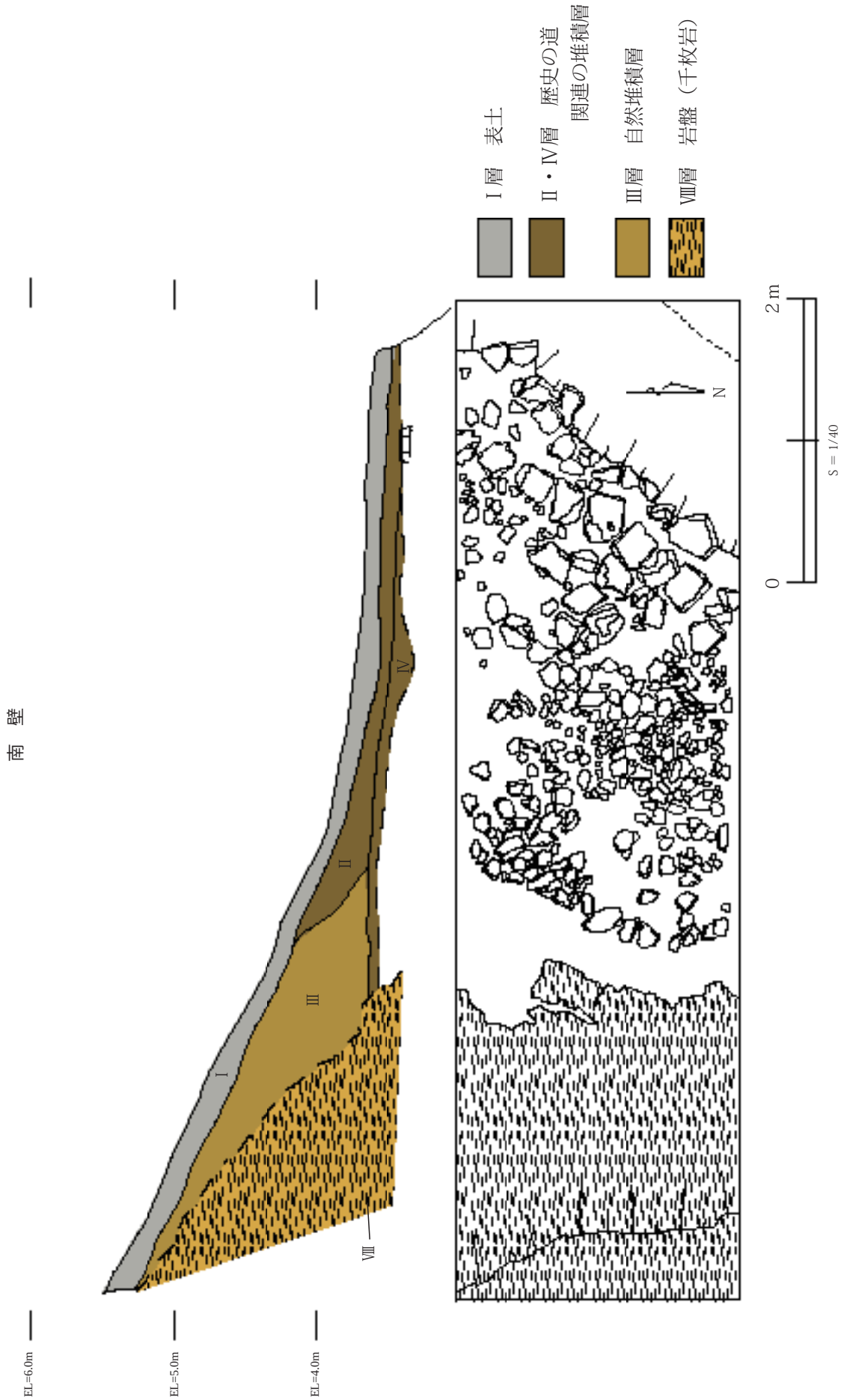
I　層：表土。ガラスや針金などが混入している。現代。道の標高 3.6m ほどである。Hue10YR 暗褐色 3/4

II　層：瓦や砥部焼片と白磁片が出土。石敷道の隙間や上にのみ確認される層。近代～現代。Hue7.5YR にぶい褐色 5/4 の粘質土。

III　層：斜面地からの崩落土。明赤褐色と褐色のマーブル粘質土で無遺物層。

IV　層：石敷道構築時の土。石灰岩と IV 層を用い石敷道が造られている。遺構保持のため未掘。遺物不明。道の標高 3.4m ほどである。Hue5YR 赤褐色 4/8 の砂質土。

VIII 層：岩盤（千枚岩）。



第 24 図　T.P60 平面及び南壁（石敷遺構）

T.P 設定状況

石敷遺構検出

堆積状況

石敷遺構と脇の岩盤

浸食された赤土土壌

T.P60 近景（海岸から）

歴史の道（石敷遺構）と海岸

図版 32　T.P60

T.P48（第 25 図・図版 33）

海岸砂丘より 1 段高い赤土土壌に位置し周辺はアダンが茂る。斜面地を削り現在も平坦面を残している。T.P60 から約 5.0m 離れた北側に位置している。T.P60 とは近い位置にあるが様相が変化しており、千枚岩の岩盤と地山（VIII 層）を削平して道としている。岩盤の削平されている幅は約 2.6m である。層序に関しては岩盤より上の I ～ III 層は T.P60 との対応関係が確認できた。南側に T.P60 の続きと思われる石灰岩礫を利用した道の続きが岩盤の直上で一部確認できた。II 層は岩盤が削平されている面の上だけで確認でき、道として機能している際の堆積層と思われる。

【層序】

I ～ III 層：T.P60 と対応関係にある。

IV　　層：斜面堆積層と思われるが道を作る際に岩盤と共に削平されている。Hue5YR 赤褐色 4/8 の砂質土。

VIII　層：岩盤（千枚岩）を削平し、道としている。近代以前の道と思われる。

第 25 図　T.P48 平面及び北壁・西壁・南壁

T.P 設定状況

調査風景

調査風景

削平された岩盤

堆積状況

堆積状況

石列検出

道検出

図版 33　T.P48

T.P59（第 26 図・図版 34 ～ 36）

海岸砂丘より 1 段高い赤土土壌に位置し周辺はアダンが茂る。斜面地を削り現在も平坦面を残している。T.P48 より約 5.0m 離れた北側に位置している。斜面堆積の地山を削平し造成を繰り返し、道として機能するために平坦にする意図が見られる。下層では、斜面地の自然堆積層を削り、凹凸面を平坦にするために盛土して造成し平坦面を造り道として使用する時期（グスク時代以降）と道としての平坦面を造るために盛土をして造成する時期（近代～現代）のものが確認できた。前者は、遺物は確認できなかったが歴史の道ができた時期と比較するとグスク時代以降のものと思われる。盛土した層は、千枚岩が削られて細かくなったものが混入しており人工堆積として確認することができた。後者は、瓦などの遺物を確認することができた。また、T.P48 と T.P60 の I・II 層と対応関係にあると思われる。I ～ II 層の時期と IV 層上面の時期に歴史の道として使用されていたと思われる。

【層序】

I　層：a ～ b に細分できる。Ia 層は、現代の表土でガラスなどを含む。腐植土層。現代の旧道。
　Ib 層：斜面からの崩落土である。粘質土層。

II　層：T.P60 や T.P48 の II 層に対応する。瓦が混入している。近代～現代の道と思われる。Hue7.5YR にぶい褐色 5/4 の粘質土層。

III　層：斜面地からの崩落土。

IV　層：平坦に整地されている層。千枚岩片が混入している。上面が歴史の道に当たると思われる。Hue7.5YR にぶい褐色 5/4 の砂質土層。近代以前の道と考えられる。

V　層：平坦面を造るために造成した土。掘削した VI 層の凹凸面を平坦にするように造成されている。千枚岩片が混入している。道を構築する際に高さをそろえるために土盛りしたと考えられる。Hue7.5YR にぶい褐色 5/4 で IV 層よりも明るい砂質土層。

VI　層：自然堆積層であるが、掘削されている。Hue5YR 赤褐色 4/6 の砂質土層。無遺物層。

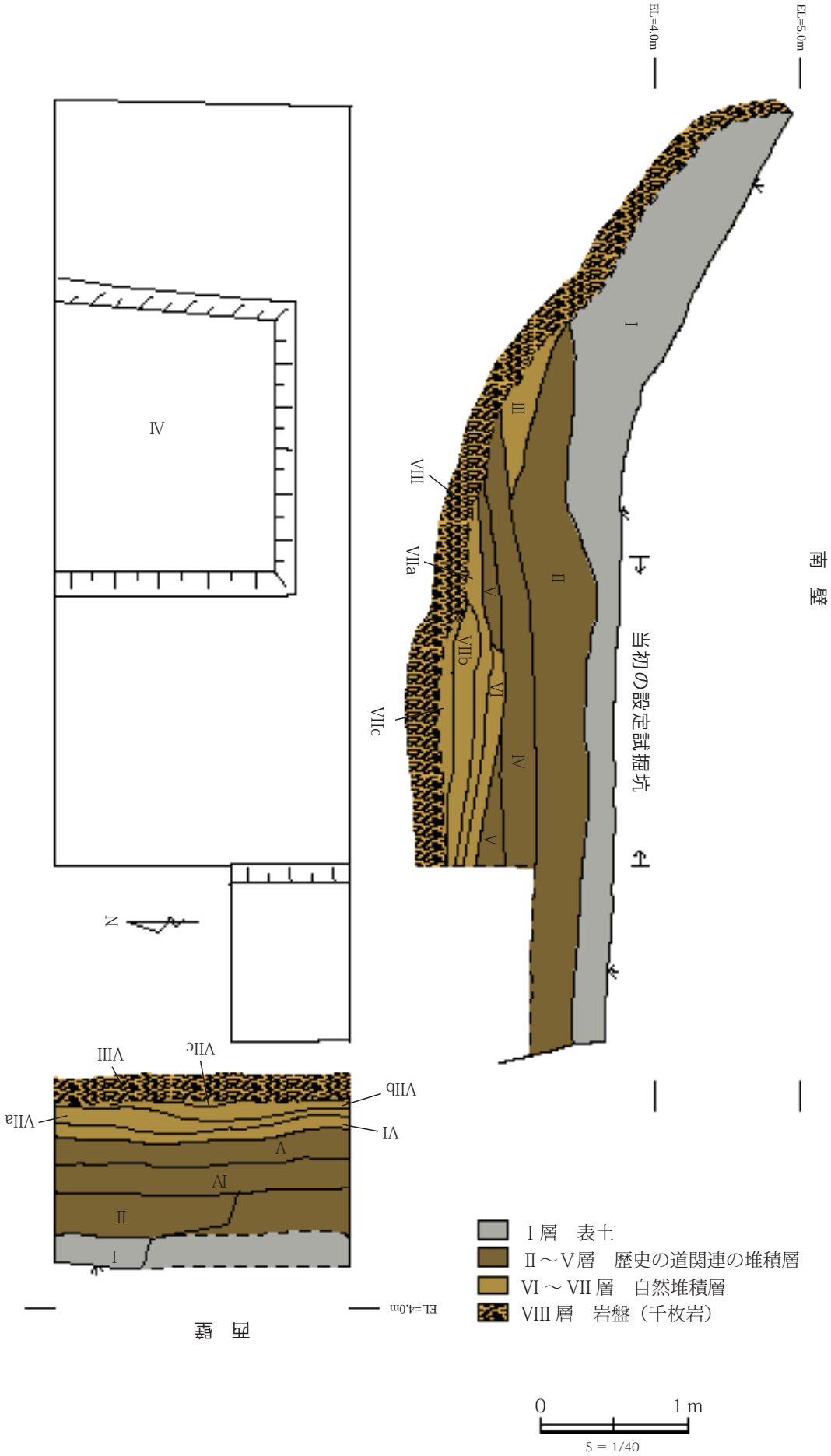
VII　層：斜面地における自然堆積層。a ～ c 層に細分できる。
　VIIa 層：Hue5YR 明赤褐色 5/6 砂質土層。
　VIIb 層：Hue7.5YR 明褐色 5/6 砂質土層。大きめの千枚岩が混入している崩落層。
　VIIc 層：Hue5YR 明赤褐色 5/6 砂質土層。

VIII 層：岩盤（千枚岩）。

平面・南壁

傾斜する岩盤

図版 34　T.P59



第 26 図　T.P59 平面及び西壁・南壁

東壁

南壁

西壁

作業風景

図版 35　T.P59

図版 36　試掘坑（歴史の道）周辺の景観

ⅳ　歴史の道に関係すると思われる堆積土

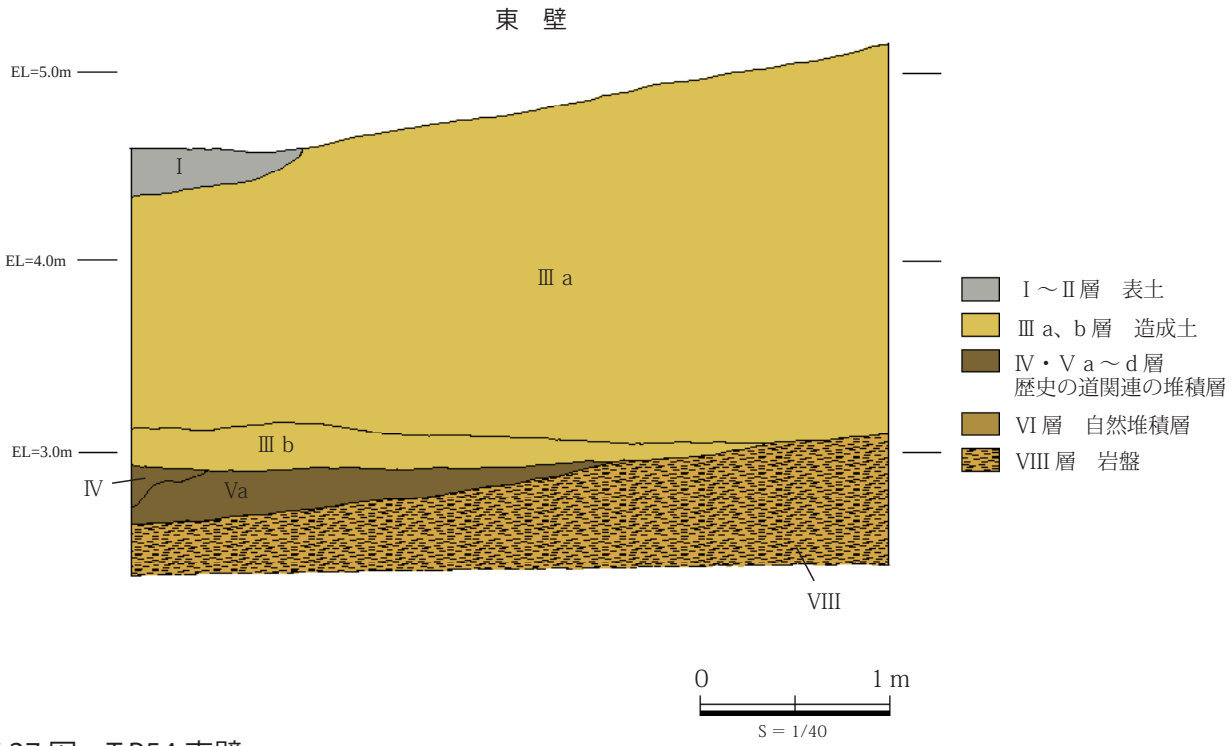
以下の T.P54・53・50・49 の地点に関しては明確な遺物、遺構は確認できなかったが、３時期の表土化した堆積層が確認できた。歴史の道（沖縄県歴史の道調査報告書 1986 より）がこれらの調査区を通っており、聞き取り調査でも丘陵下の海沿いに道があったという情報が得られているため、これらの調査区を道が通っていたことは明らかである。以下、テストピットごとの堆積状況を記載する。

T.P54（第 27・28 図・図版 37）

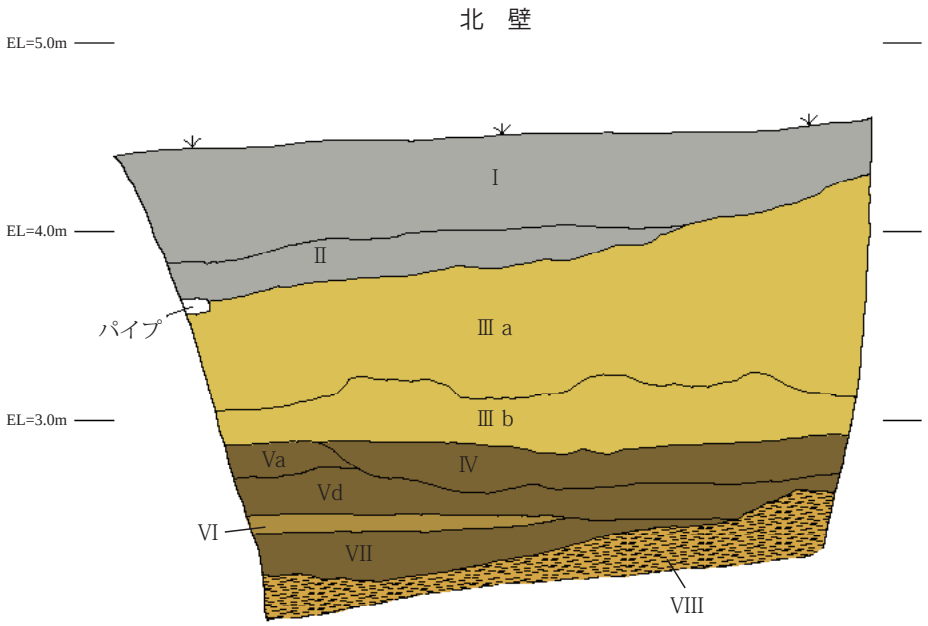
護岸され 1 段高くなった海岸沿いに位置する。重機による掘削で岩盤（千枚岩）まで確認した。道の可能性のある堆積層が IV 層と VII 層である。IV 層で石灰岩を確認した。他の試掘坑で確認できた道には石灰岩を用いている例があり（T.P60 や T.P48 など）、そことの関連性があると思われる。V 層で整地面を造り IV 層が道として機能していたと考えられる。VII 層は、岩盤の傾斜地を平坦にするために造成したと考えられる。

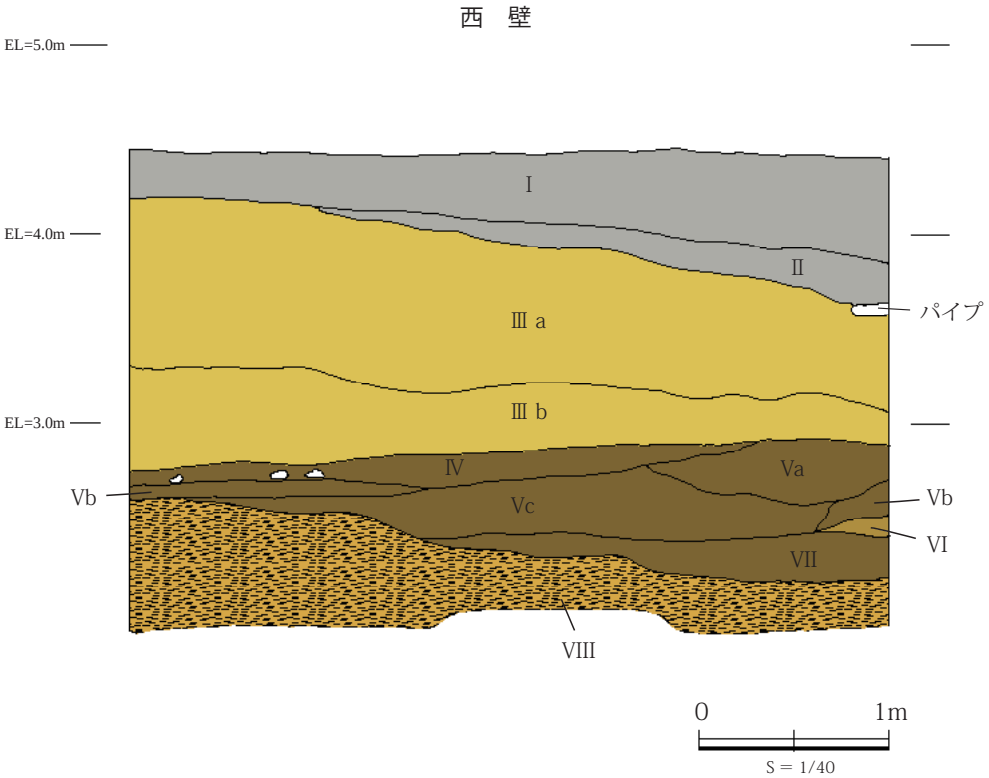
【層序】

I　層：現在の表土。白砂。
II　層：旧白雲荘に伴う旧表土。Hue10YR 褐色 4/4 粘質土。
III　層：旧白雲荘に伴う造成土。a ～ b に細分できる。
　　Ⅲ a 層：Hue7.5YR 明褐色 5/8。
　　Ⅲ b 層：Hue10YR 黄褐色 5/6。
IV　層：道と思われる堆積層。Hue2.5YR オリーブ褐色 4/6 の粘質土層で石灰岩を含む。試掘調査のため、石灰岩の平面的な広がりは確認できなかった。
V　層：a ～ c に細分できる。平坦面を造るために造成された盛土と考えられる。
　　Va 層：Hue10YR 黄褐色 5/8。
　　Vb 層：Hue7.5YR 明褐色 5/8。
　　Vc 層：Hue10YR 黄褐色 5/6。
VI　層：自然堆積砂層。Hue7.5YR 明褐色 5/8。
VII 層：道と思われる堆積層。岩盤の傾斜地に水平に堆積しており、粘質砂利層で岩盤の細破片を多く含む。Hue10YR 黄褐色 5/6。
VIII 層：岩盤（千枚岩）。



第 27 図　T.P54 東壁





第 28 図　T.P54 北壁・西壁

T.P 設定状況

掘削風景

実測風景

写真撮影風景

東壁

北壁

西壁

埋め戻し後

図版 37　T.P54

T.P53（第 29 図・図版 38）

護岸され 1 段高くなった海岸沿いに位置する。北側 2/3 が撹乱されており、堆積層が残存している箇所で観察した。斜面堆積地に平坦面を持つ堆積が 2 時期確認できた。VI・VIIa 層の直上と VIII・IX 層の直上で盛土をして平坦面を造っていることが確認できた。堆積状況からこの 2 つの面が道として考えられる。

【層序】

I　層：現在の表土。白砂

II　層：旧白雲荘建設に伴う旧表土。Hue10YR 褐色 4/4 粘質土。

III　層：旧白雲荘に伴う造成土。Hue7.5YR 明褐色 5/8。

IV　層：自然堆積層。a と b に細分できる。

IVa 層：有機物を多く含み、地表化していた時期があると思われる。Hue7.5YR 褐色 4/4。砂層で b 層より黒色を呈する。

IVb 層：Hue7.5YR 褐色 5/6。砂層である。

V　層：斜面地からの崩落土。Hue10YR 黄褐色 5/6 の砂質土層。

VI　層：道と思われる堆積層。斜面地に水平堆積している。Hue10YR にぶい黄褐色 5/4 砂質土層。

VII　層：a ～ d に細分できる。平坦面を造るために造成された盛土と考えられる。

VIIa 層：Hue5YR 明赤褐色 5/8 の砂質土層。

VIIb 層：Hue10YR 黄褐色 5/6 の粘土層。

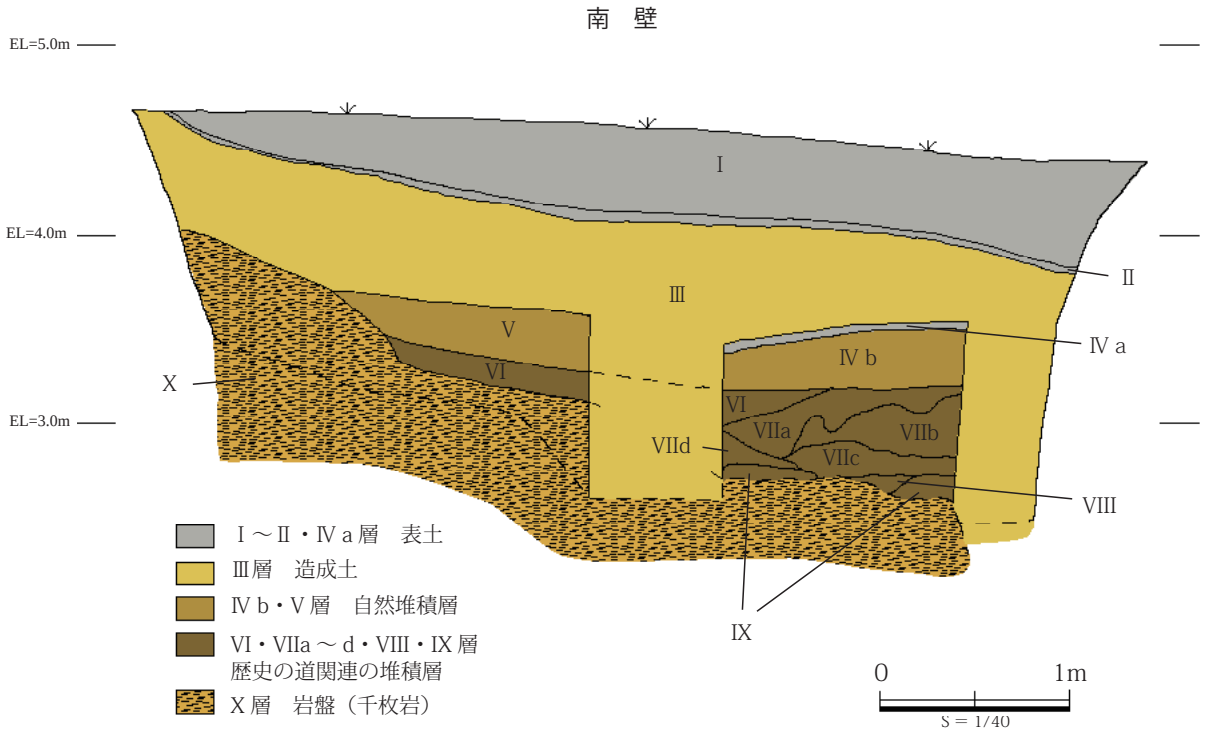
VIIc 層：Hue10YR にぶい黄褐色 5/4 の砂質土層。

VIId 層：Hue10YR 褐色 4/4 の砂質土層。

VIII 層：盛土して道としていたと思われる。自然堆積の IX 層をきってその間に堆積しており人工堆積と思われる。Hue10YR にぶい黄橙色 6/4 の砂利層で 5mm ほどの細かい千枚岩が多く混入する。

IX　層：自然堆積の砂層。VIII 層によって切られており、岩盤の上に堆積している。Hue7.5YR 明褐色 5/8 の砂層。IX 層直上が道と思われる。直径約 20cm の石灰岩礫が 1 つ出土した。道との関連性は不明である。

X　層：岩盤（千枚岩）。岩盤を道のために整地しているかもしれないが、撹乱によって不明瞭である。



第 29 図　T.P53 南壁

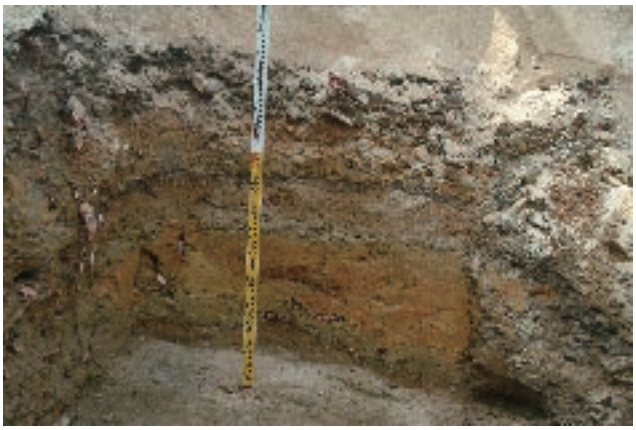
T.P 設定状況

掘削風景

マンホール検出

作業風景

南壁


西壁

石灰岩検出

夕方

図版 38　T.P53

T.P50（第 31 図・図版 40）

護岸され 1 段高くなった海岸沿いに位置する。試掘坑の北側半分が既存施設の建設により撹乱されている。堆積層が残存しているところで観察したところ、斜面堆積を削平し道としていた時期があると思われる。有機物を含んで黒色化している VI 層から V 層は地表化して堆積したと思われる。この堆積層が道と思われる。T.P53 のように岩盤近くを道に利用しているかについては、この試掘坑からは判断しづらい。

第 30 図・図版 39 はⅧｂ層から出土した夜光貝の蓋である。先端部が細かく割れているため、加工品の可能性があり図化した。

【層序】

I　層：現在の表土。白砂

II　層：旧白雲荘建設に伴う旧表土。Hue10YR 褐色 4/4 粘質土。

III　層：旧白雲荘に伴う造成土。Hue7.5YR 明褐色 5/8。

IV　層：護岸工事もしくは、旧白雲荘に伴う造成土。Hue5YR 明赤褐色 5/6 の粘質土層。

V　層：VI 層から地表化していて堆積したと思われる堆積層。Hue7.5YR 褐色 4/4 の砂質土層。

VI　層：斜面堆積の VII・VIII 層を削平して堆積しているため、道と思われる。Hue10YR 褐色 4/6 の粘質土層。

VII 層：自然堆積層。斜面堆積と思われるが道によって削平されている。Hue7.5YR 橙色 6/6 の砂層。

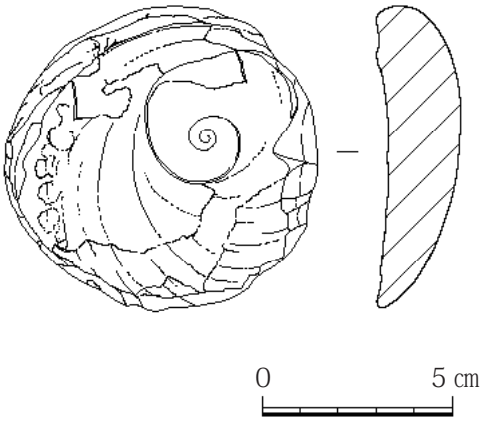
VIII 層：自然堆積層。斜面堆積と思われるが道によって削平されている。Hue7.5YR 明褐色 5/6 の砂層。混入物で a ～ b に細分できる。

Ⅷａ層：混入物がほとんど見られない。

Ⅷｂ層：貝殻や千枚岩が含まれる。

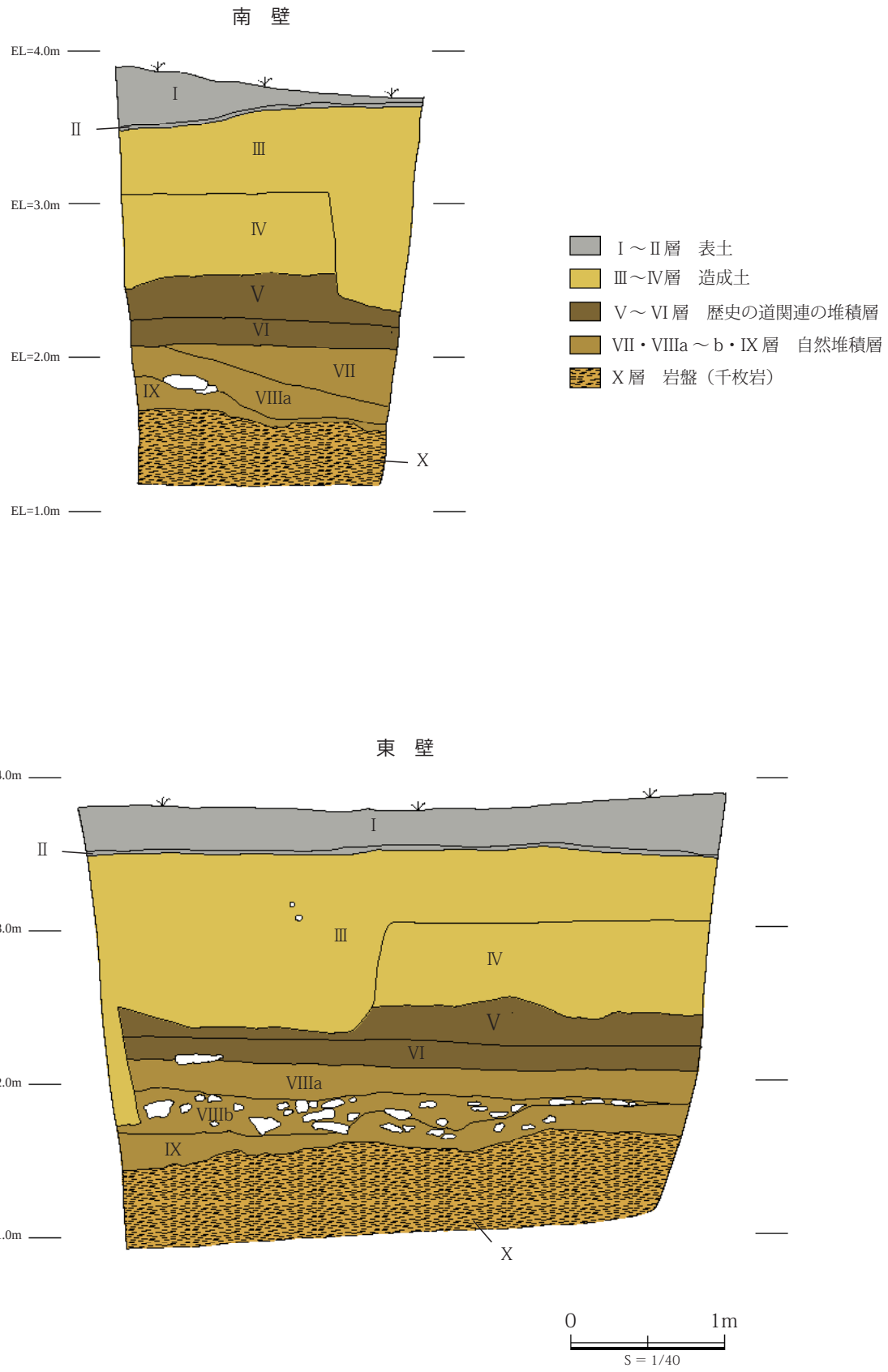
IX　層：自然堆積の砂層。岩盤の上に堆積している。Hue10YR 褐色 4/6 の砂層。

X　層：岩盤（千枚岩）。



第 30 図　夜光貝蓋

図版 39　夜光貝蓋



第 31 図　T.P50 南壁・東壁

T.P 設定状況

礫層

南西壁

南東壁

西壁

南東壁（V 層～ X 層）

埋め戻し後

X 層出土の貝類

図版 40　T.P50

T.P49（第 32・33 図・図版 41）

護岸され 1 段高くなった海岸沿いに位置する。既存施設の建設による撹乱層が 2m ほど堆積しており、下層で自然堆積に挟まれる形で水平堆積している褐色層（VI 層）が確認できた。その層の観察から表土化して堆積したと判断し歴史の道との位置関係や聞き取り調査からその堆積層を道の可能性があると判断した。

【層序】

I　層：現表土。Hue10YR 黒褐色 3/2

II　層：配水管工事に伴う造成土。Hue10YR 黄褐色 5/6 の砂利の混合層。

III　層：護岸工事もしくは、旧白雲荘に伴う造成土。a と b に細分できる。a が旧表土で b が造成土である。

IIIa 層：Hue5B 暗青灰色 3/1。

IIIb 層：Hue5YR 明赤褐色 5/8 の粘土混入土。

IV　層：造成土。a ～ c に細分できる。

IVa 層：Hue10YR 黄褐色 5/6 の粘質砂層。

IVb 層：Hue10YR 褐色 4/6 の千枚岩を含む粘質砂層。

IVc 層：Hue7.5YR 明褐色 5/6 と Hue10YR 褐色 4/6 の混合した粘質砂層。

V　層：自然堆積層と思われる。a ～ d に細分できる。

Va 層：Hue10YR 褐色 4/4 の粘質砂層。自然堆積層と思われる。

Vb 層：Hue7.5YR 明褐色 5/6 の砂層。自然堆積層と思われる。

Vc 層：Hue10YR 褐色 4/4 の粘質砂層。道と思われる VI 層の上にも堆積しており道との関連性があると思われる。VI 層から地表化していて堆積したと思われる堆積層。

Vd 層：Hue7.5YR 明褐色 5/6 の砂層。自然堆積層で南壁のみでたまり状にみられる層。

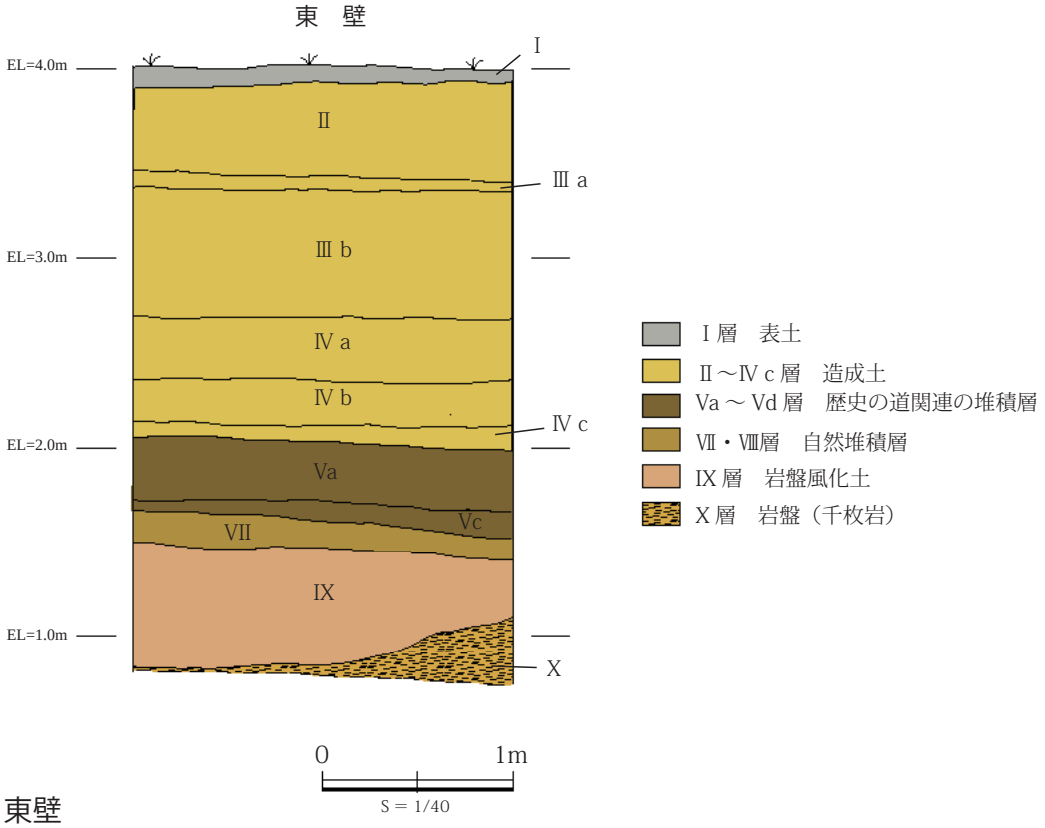
VI　層：道、若しくはそれに関係した層と思われる。Hue10YR 褐色 4/6 の粘質土層。細かい千枚岩や炭が混入している。

VII 層：自然堆積層。Hue10YR 黄褐色 5/8 の砂層。

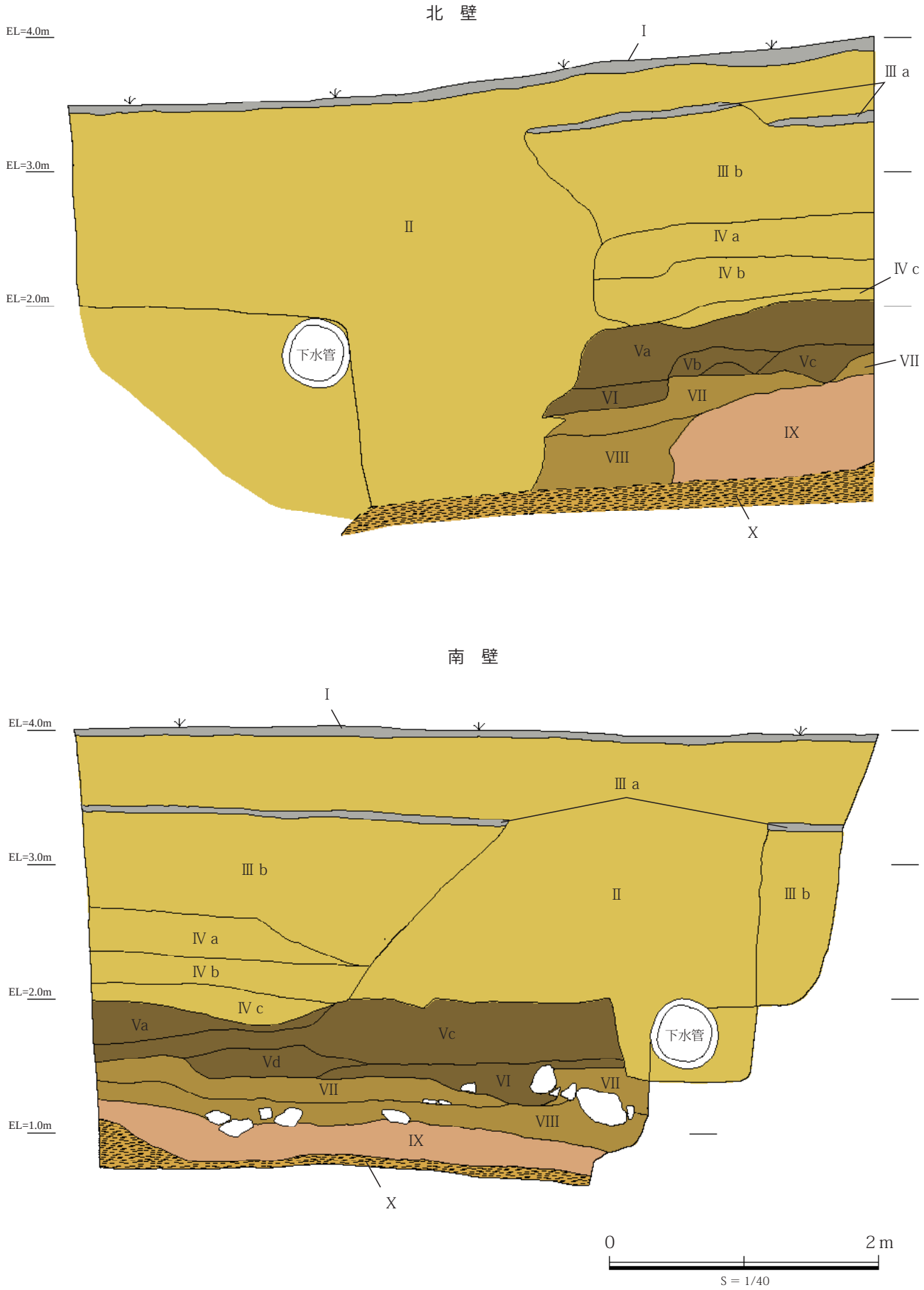
VIII 層：自然堆積層。Hue10YR 暗黒色 2/3 と Hue7.5YR 褐色 4/6 混合砂層。

IX　層：岩盤風化土。千枚岩礫を含む。Hue10YR 暗赤褐色 3/3 の砂利層。

X　層：自然堆積層。千枚岩の砂利層で石英を含む。Hue10Y 灰色 4/1。



第 32 図　T.P49 東壁



第 33 図　T.P49 北壁・南壁

T.P 設定状況

礫層

南東壁

埋め戻し後

泥炭層の確認

図版 41　T.P49

ｖ　まとめ

今回確認できた歴史の道は、大きく二つの時期に分けられる。近代から現代にかけての道とそれ以前の道である。後者は、今回は出土遺物が確認できず、遺構のみの確認であるため明確な年代は不明であるが、歴史の道が出来たグスク時代以降の道と考えられる。T.P60、T.P48、T.P59 の I ～ III 層が出土遺物から近代～現代にかけての道として使用され、それ以前に T.P60 の石敷道を通り、T.P48 の岩盤の削平を越え T.P59 の VI 層直上もしくは、V 層直上をグスク時代以降の歴史の道として使用していたことが確認できた。

５.遺物散布地（72 地点）

表面踏査を実施した結果、海岸砂丘で遺物散布地が確認された。表採できた遺物は中国産青磁２点、土器３点、石器３点である。散布の密度は少量ながら G26 ～ C’ 35 グリッドの広範囲にわたって確認された。当該地域の砂丘は薄く、千枚岩の岩盤がいたるところに露出している。砂丘のすぐそばには赤土が堆積しているが、波の浸食を受けて垂直に切り取られ断面が露出している。聞取調査による情報では昔は砂丘が厚く堆積しており、岩盤もほとんど露胎していなかったという。したがって、近年になって大量の砂が波にさらわれ土壌も浸食を受け続けている。場所によっては歴史の道の一部と考えられる石灰岩が断面に露出している。遺物の散布が確認されたことから試掘調査によって遺跡が発見される可能性があったが、今回の試掘調査では確認することができなかった。

第 34 図及び図版 46 は今回表採できた遺物である。特徴的なものを図化し、その他については写真のみ掲載する。図番号と図版番号は同じとした。

1 は中国産青磁碗の底部で、波による摩耗をかなり受けている。濃緑色の釉が厚く施され、畳付けから外底面は露胎する。素地は緻密で灰色を呈する。底経 5.4cm。中国産青磁はこの他､底部が 1 点表採できた（**2**）。**3** は高宮暫定編年前Ⅳ期（高宮 1991）に位置づけられる伊波式土器の口縁部と考えられる。器形は直口口縁の深鉢形で、底部に向かって径が次第に小さくなる。口唇部を平坦にする。文様構成は第Ⅰ文様帯の上下段に叉状工具による横位の刺突文を施し、中断は空白と思われる。内外面は丁寧にナデられ、内面には刷毛目調整痕が残る。焼成は良い。土器はこの他、貝塚時代前期と考えられる胴部及び貝塚時代後期土器と考えられる胴部が 1 点づつ表採できた（**4**・**5**）。**6** は未製品の石斧と考えられる。平面観はバチ型を呈する。片方の側面及び刃部には成形時の敲打痕が残る。もう片方の側面及び刃部は磨面を持つ。爪形文土器等の古い時代に属する石斧の形態的特徴を有すると考えられる。長さ 15.9cm、幅 5.8cm、厚さ 1.9cm。**7** は置砥石と考えられ、片方の平面が窪んでいる。欠損品。幅約 13cm。厚さ 2.8cm。**8** は磨石と考えられ、側面中央に稜を持ち磨き面を有する。欠損品。幅９cm。**6**～**8** の石質はすべて砂岩である。

今回表採できた遺物はこのように時期幅がバラエティーに富んでいる。当該地域の北方にはイチグスクや恩納グスク、恩納古島遺跡等の中世遺跡があり、南方には谷茶貝塚があるが、遺物が流出するにはやや遠い感がある。当該地域の南方は谷茶の浜で近世・近代は山原船の湊となっていた。グスク時代においても湊として使用されていた可能性があり、中国産青磁については遺物の流通過程で流出したものであるとも考えられる。土器や石斧等の先史時代遺物については、周辺に遺跡が存在する可能性がある。特に石器については、周辺では確認されない石質のため、外部からの搬入品と考えられる。T.P49 では、遺物は包含していなかったが海抜０m 前後で古い時代に堆積したものと考えられる泥炭層が確認された。当該地域の遺跡は波の浸食によって壊滅したとも考えられが、A 地区の範囲外である北側は試掘調査を実施していないため遺跡が存在する可能性があり、今後も充分な注意が必要である。

６.古墓（73 地点）

古墓は A 地区範囲外の A’ 34 グリッドにおいて掘込墓（フィンチャー）が２基確認された。いずれも台地の斜面裾部を横に掘り込んで作っている。２基は近い場所に並ぶように作られているが、やや高い場所に作られたものと低い場所につくられたものがある。便宜的に前者を A､後者を B とする。２基とも規模が小さく、厨子甕 1 個を安置することが精一杯の広さである。

A は幅約 70cm､高さ約 60cm､奥行 80cm を測る。入口は 1 個のテーブルサンゴによって蓋がされているが、内部にはなにも残っていない。B は幅約 45cm、奥行き 25cm、半分以上が土砂や腐葉土で埋まっているため高さは不明である。入口の近くには 1 個の大きなテーブルサンゴが見られるため、これで蓋をしていたと思われる。A の方が B よりも規模が大きいが、作り方は雑である。周辺は現在も使用されている墓域となっている。

７.石積（74 地点）

石積みは A 地区範囲外の B’ 32 グリッド海岸沿いにおいて確認された。歴史の道と考えられる平場のすぐ脇、浸食を受けて垂直に切り取られた赤土土壌の壁を護るように積まれており、石積みの護岸として機能していたものとも考えられる。方形に面取りした石灰岩を積んでおり、暗渠も見られる。構築時期は不明。崩壊が著しく残存幅は約 8.68m。

遺物散布地　南側の景観　（72 地点）

遺物散布地　北側の景観　（72 地点）

古墓　遠景　（73 地点）

古墓 A　正面　（73 地点）

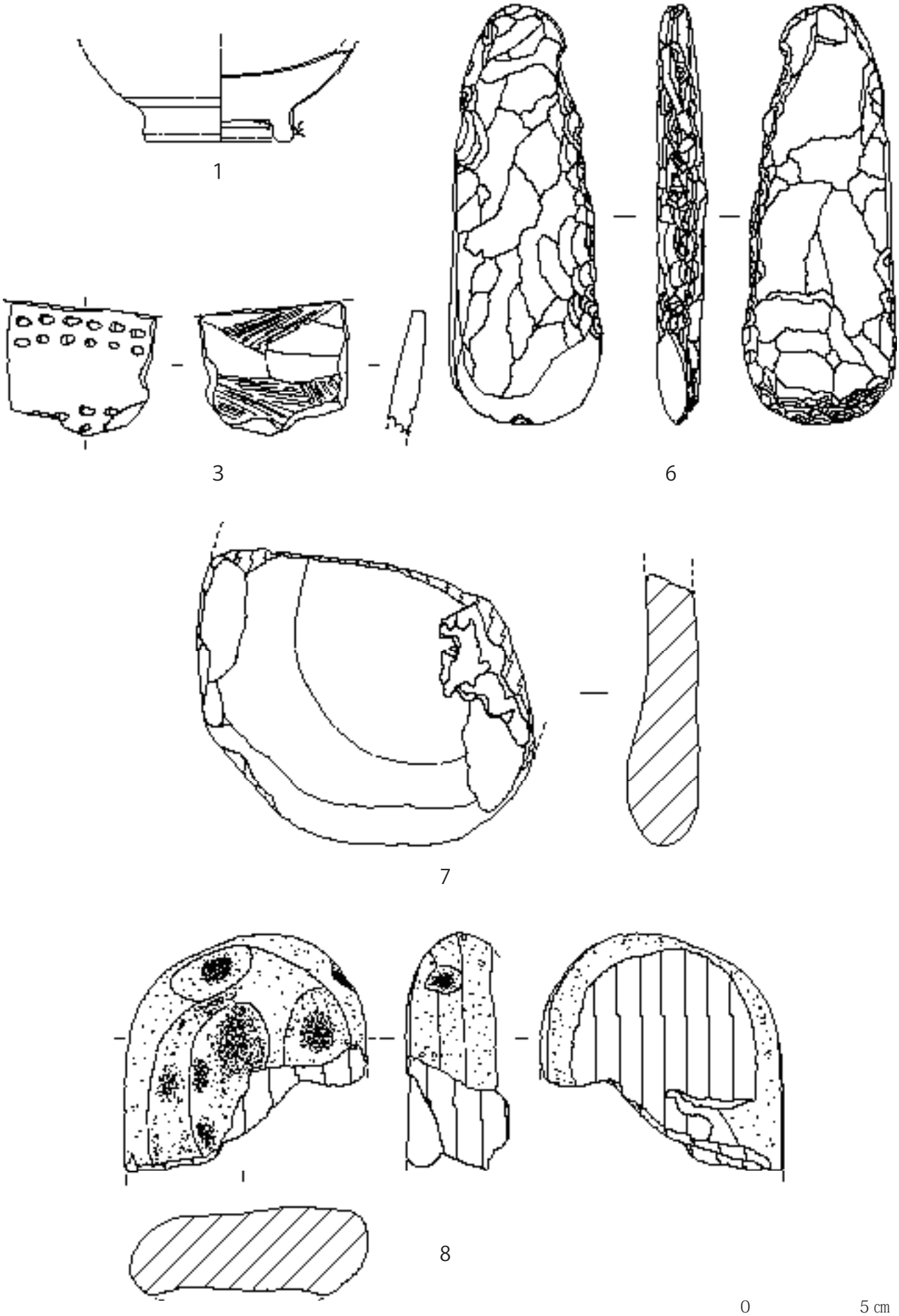
古墓 B　正面　（73 地点）

古墓 A　墓内　（73 地点）

石積　正面　（74 地点）

石積　側面　（74 地点）

図版 42　72 ～ 74 地点



第 34 図　遺物散布地（72 地点）　表採遺物

図版 43　　遺物散布地（72 地点）　表採遺物

８.成果一覧

A 地区の調査によって得られた成果の概要を第４、５表に記す。

第４表　A 地区表面踏査成果一覧

地点名	グリッド	遺構名	立地	測点	X 座標	Y 座標	Z 座標	備考
66 地点	G27 G28	猪　垣	台地から海岸へ向かう斜面	1	52779.926	33283.171	-	
				2	52778.574	33285.703	-	
				3	52777.250	33286.669	-	
				4	52774.395	33286.723	-	
				5	52770.301	33287.843	-	
				6	52767.355	33290.081	-	
				7	52765.105	33294.139	-	
				8	52765.434	33297.000	-	
				9	52769.847	33307.741	-	
				10	52770.372	33310.885	-	
				11	52772.852	33313.742	-	
				12	52774.034	33315.277	-	
				13	52774.244	33316.448	-	
				14	52774.061	33317.546	-	
				15	52774.238	33319.618	-	
				16	52773.858	33322.149	-	
				17	52772.840	33325.495	-	
				18	52772.571	33328.774	-	
				19	52771.780	33331.484	-	
				20	52770.867	33333.772	-	
				21	52770.267	33336.752	-	
				22	52770.390	33337.416	-	
				23	52770.833	33337.997	-	
				24	52772.602	33338.285	-	
67 地点	B34 B35 B36	猪垣	海岸低地と台地裾部の境界	1	53001.394	33588.049	-	
				2	52997.804	33589.814	-	
				3	52990.587	33591.467	-	
				4	52987.495	33590.587	-	
				5	52982.585	33590.587	-	
				6	52976.848	33597.433	-	
				7	52974.263	33603.211	-	
				8	52973.433	33609.572	-	
				10	52970.186	33615.151	-	
				11	52970.286	33621.440	-	
				12	52968.294	33629.757	-	
				13	52969.729	33673.389	-	
				14	52974.656	33641.498	-	
				15	52972.230	33653.256	-	
68 地点	A’ 31	落とし穴	台地から海岸へ向かう斜面	1	53040.600	33458.814	19.279	
69 地点	A’ 31	落とし穴		1	53050.776	33461.087	19.773	
70 地点	A’ 31	落とし穴		1	53070.446	33458.354	15.351	
71 地点	G26 ～ A'35	歴史の道	海岸沿い	1	52782.789	33266.227	4.200	T.P48・59・60
				2	52786.587	33269.378	4.033	
				3	52793.181	33272.437	4.033	
				4	52802.834	33281.015	3.904	
				5	52865.921	33314.863	4.103	
				6	52978.674	33369.422	3.614	
				7	53006.712	33392.116	3.527	
				8	53047.784	33419.412	3.541	
				9	53094.913	33444.203	3.563	
				10	53101.994	33666.173	3.386	
				11	53098.490	33529.436	3.562	
				12	53094.663	33559.598	3.525	
				13	53076.741	33593.907	3.117	
72 地点	C’ 35 ～ G'26	遺物散布地	海岸砂丘	1	52787.000	33255.000	-	中国産青磁 石器 土器
				2	52970.000	33351.000	-	
				3	53102.000	33431.000	-	
				4	53090.000	33619.000	-	
73 地点	A’ 34	古墓	台地裾部の斜面	1	53046.560	33566.036	4.858	２基確認
74 地点	B’ 32	石積	海岸	1	53104.704	33511.925	1.176	
				2	53103.540	33520.531	1.283	

第５表　A 地区試掘調査成果一覧

エリア	T.P	グリッド	立地	標高	試掘坑の規模			面積	基本層序 A				座標	備考
					南北	東西	深度		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		

※ 標高は 50cm 単位で最も近い場所
※ 掘削深度は最大の深さ
※ 大きさは最大の長さ

第５章　まとめ

本事業は文部科学省から委託を受け、沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設に先立って、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を明らかにするために実施した。平成 16 年度は表面踏査を行い、その成果として平成 17 年５月 31 日に報告書を刊行した。平成 17 年度は表面踏査の成果を受けて、試掘・確認調査を実施した。現地調査は平成 17 年 11 月 29 日～平成 18 年２月 17 日まで実施し、資料整理は現地調査開始と共に順次実施した。

本事業は沖縄科学技術大学院大学（仮称）の事業範囲が海側開発検討ゾーンと南尾根開発検討ゾーンを中心とすることを前提に、マスタープランの最終案が作成されることとなったため、対象地域も A 地区（海側開発検討ゾーン）と C 地区（南尾根開発検討ゾーン）に絞り、C 地区において 58 箇所、A 地区において 15 箇所、計 73 箇所の試掘調査を実施した。また、あわせて補足的な表面踏査も実施した。現地調査実施中の１月 10 日に沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設のマスタープランが公表された事を受け、A 地区範囲外の一部についても表面踏査を実施した。調査の範囲や名称、確認された遺跡や遺構については前回の表面踏査の成果を踏襲した。前回は 62 地点の遺構が確認されたため、今回は 63 地点から続きで表現した。「～地点」の表現は確認された遺構全体を包括しており遺構の数ではない（例えば 73 地点は古墓２基を含む）。試掘調査にあたっては班を３班に分割し、それぞれ１名の調査員と４名の作業員で構成した。試掘坑の規模は 2m × 2m を基本とし、必要に応じて拡張した。

試掘及び表面踏査の結果、C 地区において近世・近代と考えられる畑跡が３箇所（63 地点～ 65 地点）、古墓が１箇所（42 地点、前回の表面踏査で確認されたため、確認調査を実施した。）確認され、A 地区において、猪垣が２箇所（66・67 地点）、落とし穴が３箇所（68 ～ 70 地点）、歴史の道と考えられる古道が１箇所（71 地点）、先史時代～グスク時代の遺物散布地が１箇所（72 地点）、古墓が１箇所（73 地点、２基）、石積が１箇所（74 地点）確認され、総数 12 箇所の遺構や遺物散布地が確認された。

以下、今回確認されたそれぞれの遺構や遺物散布地についてまとめ、今後の教育普及や諸開発計画等に資する資料としたい。

１. 歴史の道（71 地点）

A 地区において確認された。明確な遺構が確認されたのは T.P48・59・60 で、その他、T.P49・50・53・54 においては、歴史の道に関係すると思われる堆積土が確認された。

恩納村を通る歴史の道は、国頭方西海道として知られている。永楽年間尚巴志王の頃にはすでに道路制などがしかれており、この時代にはグスクとグスクをつなぐ道という要素とグスクと集落をつなぐ道という要素、グスクとの立地状況から道を利用する外敵から進行を阻むという要素を含んでいた。そして「15 世紀後半以降の第二尚氏時代には、奄美や八重山の征服に伴って、海上を含む「すべての道」が「首里に通ずる」ことになったと言われている。」と言う（恩納村教育委員会 1995）。

試掘調査によって確認された遺構としては、石敷がある場所（T.P60）や、岩盤を削平して道とする場所（T.P48）、傾斜のある地形に盛土を行い、水平面を作って道とする場所（T.P59）があった。この周辺は旧地形が良く残っているため、歴史の道が機能していた当時の面影が偲ばれる。

これらの試掘坑からさらに北側の試掘坑（T.P49・50・53・54）は既存施設による土地の改変が著しく、旧地表の削平や造成が行われており明確な遺構は確認できなかったが、歴史の道に関係すると考えられる茶褐色を呈する堆積層が確認された。この堆積層は斜傾する自然地形に対して水平に堆積しており、試掘坑の壁面において時間をかけた検討を行ったが、道幅等を確認することができなかった。歴史の道がすべて石敷を有するものではないため、このような堆積層については今後詳細な調査と充分な検討を行う必要がある。

A 地区の範囲から外れるが、さらに北側は再び旧地形を残す場所があり、調査を実施することによって明確な遺構が確認される可能性が高い。

恩納村では「真栄田の御侍毛」から「仲泊の一里塚」までの区間の内、保存整備事業が完了した約 1.5km の範囲の歴史の道が平成 16 年９月 30 日に国の史跡に指定された（町田 2005）。保存整備事業から指定までの期間が長かったため、困難な事業であったようである。今回確認された歴史の道も今後詳細な調査を実施することによって、「追加指定」を考慮することが可能な場所と考えられる。

2. 遺物散布地（72 地点）

平成 16 年度に実施した表面踏査では確認できなかったが、今回補足的に表面踏査した結果、A 地区及びその北側の海岸砂丘地において、遺物の散布を確認することができた。確認された遺物は先史時代～グスク時代にわたるものである。先史時代では貝塚時代前期（高宮暫定編年前Ⅳ期）の伊波式土器・貝塚時代後期の土器・石斧等の石器が確認され、グスク時代では中国産青磁が確認された。

これらの遺物の由来について考えるのは難しい。周辺には先史時代やグスク時代の遺跡が存在するが、その場所から流出するにはやや遠い感がある。当該地域南方は谷茶の浜と呼ばれており、近世・近代において山原船の湊として利用されていた。グスク時代においても利用されていたならば、今回確認された中国産青磁については、遺物の流通過程で流出したものである可能性も指摘できる。

今回の試掘調査ではこれらの遺物を包含する遺跡等は確認できなかったが、A 地区の範囲外は試掘調査を実施していない場所のため、周辺に当該時期の遺跡が存在する可能性はあり、今後も充分な注意が必要と考えられる。

海岸砂丘地のような場所では一度の踏査では遺物散布の有無が確認できないことを痛感した。

3. 畑跡（63 ～ 65 地点）

C 地区において近世・近代と考えられる畑跡を 3 箇所確認した。厚い腐葉土に覆われており、表面踏査では確認が困難であったが、試掘調査のための伐採や表面清掃によって確認できた。いずれも細い尾根筋の頂部に作られている。前回の表面踏査の結果では付近に猪垣が確認されたが、今回確認された畑跡周辺では確認できなかった。

4. 猪垣（66・67 地点）

A 地区及びその周辺において猪垣を 2 箇所確認した。丘陵から海岸へ向かう斜面に対して水平に作られているタイプ（66 地点）と丘陵の裾部（海岸低地）に作られているタイプがあり、立地条件が異なる。66 地点は尾根から海岸側へ向かう斜面を横位に掘り込み、海岸側に土塁を築くもので、土塁の頂部にはテーブルサンゴを配置する。既存施設の建設によって土地の改変が行われ残存部が少ないが、本来はより長大なものであったと考えられる。67 地点は丘陵裾部を垂直に切り出して壁をつくるもので、壁の頂部にテーブルサンゴを配置する。

5. 落とし穴（68 ～ 70 地点）

A 地区範囲外で落とし穴を 3 箇所確認した。前回の表面踏査の成果では猪垣沿いで確認され、形態も円形を呈するものだが、今回確認したものは猪垣を伴っていない点で立地条件が異なり、形態も明確に楕円形を呈するもの（68 地点）が確認された点で異なる。

6. 古墓（42 地点、73 地点）

古墓は C 地区において 1 基（42 地点）、A 地区範囲外において 2 基（73 地点）確認された。42 地点は前回の表面踏査で確認されたもので、今回は範囲確認調査を実施した。42 地点の古墓は C 地区沢沿いの尾根裾に作られてた掘込墓と考えられ、墓内には 4 箇所の Pit が方形に配置されて確認された。遺物は明治～近現代のものと思われる小杯が出土したのみである。厨子甕や人骨の散布等も見られないことから、古墓と断定することも難しいが今回は古墓として報告した。73 地点で確認した古墓は丘陵斜面に横穴を堀り込むもので、規模がかなり小さく、厨子甕 1 基を安置するのがやっとの広さである。入口はテーブルサンゴで閉じられている。

7. 石積（74 地点）

A 地区範囲外の歴史の道沿いで確認された。歴史の道沿いのすぐ脇、浸食を受けて垂直に切り取られた赤土土壌の壁を護るように方形に加工された石灰岩が積まれている。暗渠も見られる。石積みの護岸として機能していたものとも考えられるが、詳細は不明である。

以上、今回の成果をまとめた。2 ヶ年間にわたる埋蔵文化財予備調査によって、沖縄科学技術大学院大学（仮

称）建設予定地内から 74 箇所の遺構や遺物散布地が確認された。恩納村内における険しい山間部（北尾根・南尾根開発検討ゾーン）の予備調査は、筆者らは初めてであり困難なものであったが、炭焼窯・猪垣・落とし穴・畑跡等の生産遺跡が多量に確認されたことは有効であった。また、海側で国頭方西海道と呼ばれる歴史の道が確認されたことは重要な成果であった。海岸砂丘地において遺物散布地が認められたことも、周辺に当該時期の遺跡が存在する可能性があることを示唆していると思われ、今後の調査に期待が持てる。

最後に、建設予定地内における南尾根開発検討ゾーン内の民有地及び海側開発検討ゾーン内におけるＡ地区の範囲外については、表面踏査は実施しているが試掘調査は実施していない。今後の諸開発計画にあたっては、充分な注意が必要である。

＜引用・参考文献＞

大宜味村教育委員会　1994 『大宜味村の猪垣－猪垣調査報告書－』

沖縄県教育委員会　1983 『伊武部貝塚発掘調査報告書国道 58 号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査―遺構・貝製品・石器・貝殻編―』沖縄県文化財調査報告書第 51 集 沖縄県教育委員会

沖縄県教育委員会　1989 『沖縄県歴史の道調査報告書－国頭・中頭方西海道（II）－』

恩納村教育委員会　1994 『恩納村の文化財』恩納村教育委員会

恩納村教育委員会　1995 「第３節「国頭方西海道」の概要」『歴史の道国頭方西海道保存整備事業報告書』

岸本 義彦 ほか　1991 『北部リゾート地区遺跡分布調査報告』沖縄県文化財調査報告書第 99 集 沖縄県教育委員会

當眞 嗣一　1983 「山田グスク」『沖縄グスク分布調査報告書―沖縄本島及び周辺離島―』沖縄県文化財調査報告書第 53 集 沖縄県教育委員会

當眞 嗣一　1987 「歴史の道とグスク」『紀要』第４号 沖縄県教育委員会文化課

仲松 弥秀　1980 「第二章 村の自然」『恩納村誌』恩納村役場

比嘉 清和　2004 「沖縄市池原で確認されたシシ穴の概要について」『あやみや』沖縄市立郷土博物館紀要 13 号　沖縄市立郷土博物館

町田真理子　2005 「文化財の指定について　ⅡＢ）国史跡指定『国頭方西海道』について」『文化課紀要』第 21 号　沖縄県教育庁文化課

矢ヶ崎 孝雄　1992 「沖縄県下の猪垣（一）」『文教大学教育学部紀要』26

矢ヶ崎 孝雄　1993 「沖縄県下の猪垣（二）」『文教大学教育学部紀要』27

報 告 書 抄 録

ふりがな	おきなわかがくぎじゅつだいがくいんだいがく（かしょう）けんせつよていちないのいせき
書名	沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅱ）
副書名	埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告
巻次	－
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第36集
編著者名	片桐千亜紀、比嘉尚輝、崎原恒寿
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	沖縄県西原町字上原１９３－７
発行年月日	２００６（平成18）年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
おきなわかがくぎじゅつだい 沖縄科学技術大 がくいんだいがく(かしょう) 学院大学（仮称） けんせつよていちないの 建設予定地内の いせき 遺跡	おきなわけんおんな 沖縄県恩納 そんたんちゃ 村谷茶・ みなみおんな 南恩納	473111				H18.11.29 ～ H19. 2. 17	試掘 363 ㎡	沖縄科学技術大学院大学(仮称)の建設計画に伴い、埋蔵文化財の分布状況を把握するための予備調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡	遺物散布地	先史～グスク		貝塚時代前期・後期土器 石器、中国産陶磁器	試掘調査によって、歴史の道（国頭方西海道）と考えられる古道が確認された。
	歴史の道	グスク～近代	石敷		
	生産遺跡	近世・近代	畑跡 猪垣 落とし穴 石積 掘込墓		表面踏査によって、遺物散布地（1箇所）や古墓等の遺構（11箇所）が確認された。
	古墓	近世・近代			

要約

本報告書は、文部科学省より委託を受け、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内における埋蔵文化財の分布状況を明らかにするために実施した、試掘・確認調査の結果をまとめたものである。現地調査は平成17年11月29日～平成18年2月17日まで実施した。調査地域は沖縄県恩納村字南恩納・谷茶にまたがる。

73箇所の試掘調査の結果、近世・近代と考えられる畑跡・古墓や歴史の道（国頭方西海道）と考えられる古道が確認された。また、補足的に実施した表面踏査の結果、先史時代～グスク時代の遺物散布地、近世・近代と考えられる畑跡、猪垣、落とし穴、古墓、石積が確認された。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 36 集

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅱ）

－埋蔵文化財予備調査（試掘・確認調査）報告－

発　行　年　2006（平成 18）年 3 月 31 日
編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903 － 0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193 番地の 7
℡ 098（835）8751
印　　刷　グローバル企画印刷株式会社
〒 901-1111　沖縄県南風原町字兼城 577 番地
℡ 098（889）3222

ⓒ沖縄県立埋蔵文化財センター　2006　printed in japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。